

- (ホ) メルボルン—ロビンセストン—ホバート線(六一六軒、毎日一往復)
- (ヘ) メルボルン—キング島—ロビンセストン線(六三六軒、毎週三往復)
- (ロ) ロビンセストン—フリンダース島線(一七五軒、毎週一往復)
- 3 エアライנס・オブ・オーストラリア社
同社はG・A・ロビンソンがプリティッシュ・パシフィック・トラストの財政的援助を得て創立せるものにして、スチムソン機四機を以てシドニー—プリンスヘーン線を経営して居たが、プリティッシュ・パシフィック・トラストは其の後自己の持株をオーストラリアン・ナショナル・エアウイズ社に譲渡し、目下後者の子会社として其の支配を受けてゐる。同社は創立以來濠洲東海岸地方に於て活躍を續け、一九四〇年末現在に於ては左の諸線(總距離三、三八三軒)を経営してゐる。尙會社使用機はダグラスD・C・三、スチムソン一二Aの米國製機及英國製のD・H・ドラゴン機である。
- (イ) シドニー—プリンスヘーン線(八〇五軒、毎日一往復)
- (ロ) プリンスヘーン—タウンズビル—ケアンズ線(一、五〇〇軒、毎日一往復)
- (ハ) ケアンズ—クローイドン—ノーマントン—パークタウン線(七〇二軒、毎週一往復)
- (ニ) ケアンズ—クックタウン—コエン—ウエンロツク線(三七六軒、毎週一往復)
- 4 マクロバートソン・ミラー社
同社はウエスト・オーストラリアン・エアウイズ社に代りて目下濠洲西部地方就航しつゝある會社にして、一九四〇年末現在に於ては左の諸線(總距離四、六五九軒)を経営し、使用機はデ・ハビランド八六、デ・ハビランド・ドラゴンその他、米國製の双發ロツキード・エレクトラである。
- (イ) パース—ジエラルドトン—オンズロー—ポート・ヘッドランド—

- ダービー—ウインダム—ダービー—ウインダム線(三、五二九軒、毎週二往復)
- (ロ) ウインダム—ダービー—ウオターズ線(八四三軒、毎週一往復)
- (ハ) アドレイド—ワイヤライアン—ノツツ線(二八七軒、毎週三往復)
- 5 ギニー・エアウイズ社
同社は元來ニューギニアの金鐵地帯に於て主として貨物輸送業務のみを營みつゝあつたが、其の後濠洲本土に於てもシドニー—アドレイド線及濠洲中央部を縦断するアドレイド—ダービー—ウインダム線を開設した。然るに其の後シドニー—アドレイド線は之を廢して専ら濠洲中央縦断線に力を注ぎ、一九四〇年末現在に於てはロツキード・エレクトラ、ブロード(三發)の米國製機及ユンカースG三一、同G三四其の他の獨逸製機を以て左の諸線(總距離四、〇七六軒)を経営してゐる。
- (イ) アドレイド—ウインドナダツター—リスブリッジ—スーダリー—ウオターズ—ダービー—ウインダム線(二、八三五軒、毎週三往復)
- (ロ) アドレイド—カンガール島線(二九八軒)
- (ハ) アドレイド—ポート・リッカン—線(六二二軒)
- (ニ) ポート・モレスビー—ワウ—ブロー—サラマウ—アラエ線(三二二軒、毎週一往復)
- 6 カーペンター社
同社は一九三八年四月より濠洲政府との契約に依り濠洲—ニューギニア間の定期航空業務を開始し以て現在に及んだ。使用機は四發式デ・ハビランド八六にして一九四〇年末現在に於る運航状況左の如し。
- シドニー—プリンスヘーン—ロツク—ハンブトン—タウンズビル—ケアンズ—クックタウン—ポート・モレスビー—サラマウ—アラエ線(四、〇五八軒、毎週一往復)
- 7 アンセット・エアウイズ社
同社は濠洲東南部に於て航空業務を行ひ一九四〇年末現在に於ては左の諸線(總距離三、〇六〇軒)を経営した。使用機はエアスピード・エンボイ、エアスピード・クリリアの英國製機その他米國製のロツキード・エレクトラ等である。

- (イ) メルボルン—ミルズレー—ブローク—ヒル—アドレイド線(一、九六六軒、毎週一往復)
- (ロ) メルボルン—ナランデラー—ワツガー—シドニー線(八三七軒、毎週一往復)
- (ハ) メルボルン—ハミルトン線(二五七軒、毎週一往復)
- 8 アダストラ・エアウイズ社
一九四〇年末現在に於る經營路線は左の如し。
- シドニー—ベガ線(三三八軒、毎週二往復)、尙使用機はデ・ハビランド・ドラゴン—ライ及ワコである。
- 9 ヴィクトリアン・アンド・インターステート・エアウイズ社
一九四〇年末現在に於る經營路線はメルボルン—ヘイ線(三六二軒、毎日一往復)にして、使用機は英國製のマイルス・マリンである。
- 10 エアクラフト社
一九四〇年末現在に於る同社の經營路線は左の如くにして、總距離一、四七六軒で、尙使用機はデ・ハビランド・ドラゴン及ワコである。
- (イ) プリンスヘーン—ロツク—ハンブトン線(五七五軒、毎週一往復)
- (ロ) プリンスヘーン—キンガロイ線(一四五軒、毎週一往復)
- (ハ) プリンスヘーン—モント線(四三三軒、毎週一往復)
- (ニ) プリンスヘーン—メリボロー—バンダ—バグ線(三二二軒、毎週一往復)
- 11 エアライנס社
一九四〇年末現在に於る同社の經營路線は左の如くにして、使用機はデ・ハビランド・ドラゴン及スチムソンである。
- パース—マウンツ—マグネット—ミカサ—ライ—ウイナル—レオ—ライ—カール—グー—線(一、三〇八軒、毎週一往復)
- 12 ノース・ウエスタン・エアライנס社
一九四〇年末現在に於る同社の經營路線は左の如くにして、使用機はデ・ハビランド・ドラゴン—ライである。
- シドニー—モリ—線(五二八軒、毎週三往復)
- 13 バトラー・エア・トランスポート社

一九四〇年末現在に於る同社の經營路線は左の如くにして、使用機はデ・ハビランド・ドラゴンである。

シドニー—メルボルン—ナランデラー—ワウ—ウインダム—コーナン—パーク—カンナ—マラー—チャールズ—線(一、一六八軒、毎週二往復)

二 航空輸送統計

濠洲に於る航空輸送成績は一九二〇年の業務開始以來順調なる發展を遂げ來つたが、一九三一—三三年の經濟恐慌により著しく成績が低下した。然るに一九三四年の英・濠線の開通を期として次第に躍進し、一九三八年英帝國航空郵便計畫の實施と共に同線に飛行機就航するに及び、濠洲に於る航空輸送成績は飛躍的發展を遂ぐるに至つた。今左に一九三〇年以降の輸送統計を掲げる。

航空輸送統計表

年次	飛行哩數	旅客輸送數	貨物輸送量	郵便輸送量
一九三〇	一、九七、〇〇〇	一、六五九	一、六五五	三、〇〇〇
一九三六	四、〇七、六九四	三、一七九	三、三〇五	六、九九〇
一九三七	六、九〇、七二九	六、〇四九	五、七二四	八、九四七
一九三八	九、六五、四六六	一〇、六三九	一〇、〇八〇	一三、五三二

三 國際航空

濠洲對外航空路は、クワンタス會社のシガポール、プリンスヘーン(後にはシドニー)線の開通により初めて設定せらるゝに至つたものであるが、現在には同線以外の國際航空路としてK.N.I.L.M.會社(舊蘭印)のジャカルタ—シドニー線とタスマン・エンパイア・エアウイズ會社(新西蘭)のシドニー—オークランド線との兩線があり、前者は東印度及濠洲兩政府間の協定により一九三八年七月三日毎週二往復を以て開設せられ、オランダK.L.M.會社のアムステルダム—ジャカルタ線とジャカルタに於て接続せるものである。第二次歐洲戰爭の勃發後には運航回數を毎週一往復に減じ、爾來今日に至るまで依然として東印度・濠洲間に定期航空業務を維持し來つたが、東印度より歐洲に到るK.L.M.會社線は伊太

利参戦の影響に依りて英國の英・濠線と同じく近東以西の運航を阻止せられ、地中海東岸のリダ(パレスチナ)よりジャカルタに到る航空を運管して居る。後者は一九四〇年四月三〇日開設せられたもので、クワンタスの姉妹會社たるタスマン・エンバイア・エアウェイズ會社の運管にかゝる本線の開通は多年切望せられたる濠洲—新西蘭の高速運管を實現し、更に同年七月開通せる米國バン・アメリカン・エアウェイズ會社のサンフランシスコ—オークランド間南太平洋航空路と連絡して、米國經由英國との航空連絡を可能ならしめた。斯して濠洲は戦時中であつて、英帝國より孤立することなく對外高速運管を維持して居たのである。

四 航空保安施設

一九三九年六月末現在に於る飛行場は總計四三一の多數に及び、其の内、國有飛行場七一、國有不時着陸場一四七、地方當局及個人所有のものにして政府より認可せられたる飛行場二一三である。是等の飛行場中、夜間照明設備を有するものは、一九三九年四月末現在に於てアーチチャーフィールド(プリズペーン)、エバンズ・ヘッド、コッパス・ハーバー、ケムセイ、キングスフォード・スミス(シドニー)、ガウルバーン、ホルブルック、クータマンドラ、カンベラ、ベナラ、エツセンドン(メルボルン)、ニル、バラフィールド(アデレード)、ケンブリッジ(ホバート)、ウエスターン・ジャンクシオン(ローンセンストン)、メイランズ(パース)及ダーウインの一七飛行場である。

、ヤールビル、クロンカリー、クックタウン、ダリー・ウオターズ、ダーウイン、フリンダース島、フォレスト、ジェラルドトン、グロート・アイランド、ホバート、ホルブルック、カルンバ、ケムセイ、キング島、ローセンストン、メルボルン、ニル、ワードナダツタ、パース、ポート・ヘッドランド、ロックハンプトン、シドニー、木曜島、タウンズビル、ウインダム等の二十九箇所に設置せられ、定期航空業務の安全を期してゐる。是等の航空無線局の大部分はペリニ・トシ式方向探知装置を備へて無線羅針業務を行つて居るが、タスマン海横断飛行開始と共にシドニー及ロドホー島には新たに超短波方向探知局が設置せらるゝに至つた。

又航空機の航空を安全に指導する無線標識局は、プリズペーン—シドニー—メルボルン—アデレード間、メルボルン—ローンセンストン—ホバート間の航空路に設置せられた。

冬季でも雲・霧の見られぬ濠洲は航空には理想的である。殊に濠洲の如き各都市間の距離の極めて遠い所では飛行機の効用は格別である。飛行機はシドニー—プリズペーン間を五時間、汽車は十九時間、シドニー—アデレード八時間半、汽車では二十八時間、シドニー—パース間七十四時間を汽車は五日を要する。

航空士が濠洲の安全保障に貢献してゐることは別にしても、奥地の探検をするのも飛行家である。飛行機はラジオと共に、この隔絶した植民地にとつて不可欠のものである。財貨・必需品・醫藥を運び、醫師を運び診療所の役目をも果すのである。

補助航空事業關係表 (一九三九年六月末日調)

路	線	哩數	回数	運轉會社名	週運航數	年運航哩數
シドニー—ダーウイン—シンガポール		四六九	週三回	クワントン、タスマン航空會社	三回	一三六七
パース—メルボルン—ダーウイン		三三三	週二回	クワントン、タスマン航空會社	二回	一三六七
アデレード—ダーウイン		一、二〇〇	週三回	クワントン、タスマン航空會社	三回	一三六七
パース—メルボルン—アデレード		一、二五五	週三回	クワントン、タスマン航空會社	三回	一三六七
アデレード—メルボルン		E10	毎日	クワントン、タスマン航空會社	七回	一三六七
プリズペーン—クロンカリー		九七七	週二回	クワントン、タスマン航空會社	二回	一三六七
クロンカリー—マウントアイザ		六八	週二回	クワントン、タスマン航空會社	二回	一三六七
マウントアイザ—ダーウイン		五八八	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
①ダリーウオターズ—ウインダム		五三三	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
②クロンカリー—ノルマントン		二二六	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
シドニー—チャーヤールビル		七三	週二回	クワントン、タスマン航空會社	二回	一三六七
シドニー—パウル		一、一三三	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
メルボルン—ランセンストン—ホバート		E0A	毎日	クワントン、タスマン航空會社	七回	一三六七
メルボルン—キランセストン		三三六	週三回	クワントン、タスマン航空會社	三回	一三六七
ランセンストン—フリンデルス島		一〇八	毎日	クワントン、タスマン航空會社	七回	一三六七
プリズペーン—クランコ		二二〇	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
ロックハンプトン—マウントクローン		三三〇	週一回	クワントン、タスマン航空會社	一回	一三六七
シドニー—パース		二、〇四	週二回	クワントン、タスマン航空會社	二回	一三六七
アデレード—ダーウイン—ヤラ		一、五〇	週三回	クワントン、タスマン航空會社	三回	一三六七

濠洲……交通

パース・ウィルナー・カール・グーリット	ハニ	週一回
メルボルン、ミルドレーブ・ロークンヒル	一二九	毎日就航
メルボルン、ナランデラ・ワ	五二〇	毎日
メルボルン、ドレーン・マーク、ミルドレーブ	一六〇	毎日
メルボルン、シー・ハミルトン	四五〇	週一回
ケアンズ・ノルマントン・ブルトン	三七〇	週一回
ノルマントン・クイーンズランド・ノルマントン	一〇六	週二回半
ケアンズ・ブークツク・タウン	七二五	週一回
ブリスベーン・タウンズビル	一七三	週二回
タウンズビル・ケアンズ	四七五	毎日二回
シドニー・ブリスベーン	三三〇	二週間一回 (双方より)
ケアンズ・ブーンヤカルタ	三三〇	二週間一回 (双方より)

計

111801

(註) (1)航空機に特に設備用製備を有す (2)契約回数外、毎週二回往復。
(備考) この外、同年濠洲内に於る無補助航空事業に従事せる会社若干あり。

航空路 (W. A.) 會社	1252	84533
D. H. 84 スチムソン・ラリアント SRTB	714	37408
アン・セツト・エレクトラ 10-B	6180	33480
アン・セツト・エレクトラ 10-B	1210	99840
アン・セツト・エレクトラ 10-B	900	66800
D. H. 84 空路會社	185	9210
D. H. 84 空路會社	530	27560
D. H. 84 空路會社	10180	57800
スチムソン・モデル A	454	23524
D. H. 89 空路會社	12350	642100
ダグラス DC-3 空路會社	350	18100
D. H. 84 空路會社	13423	691267

第五節 通信

郵便電信局の数は一九三六年六月末に於て八、一四局を數へる。一九三五—三六年度に於るその取扱封書・葉書・小包は八三五、〇八七、六〇〇である。發信電報一五、五〇八、八四三通、受信及渡信海外電報一、三三三、〇〇六通、無線電報一七三、六〇二通である。總輸入一五、〇五五、一

電信局數及電信線哩數表 (一九三八年六月末日現在)

事項	ニューサウスウェールズ	ヴィクトリア	クイーンズランド	南オーストラリア	西オーストラリア	タスマニア	全濠洲
電信局數	11801	2255	1569	831	928	537	9389
電信専用電信線延長哩數	11849	7222	14741	6513	8533	444	50558
電信・電信線電話線延長哩數	61880	19111	36871	13069	9810	1484	141320
モールス式電信線延長哩數	11915	1808	3681	1	181	118	20816
海底電線延長哩數 (法定哩)	8108	819	338	338	338	338	3387
架空線延長哩數	31058	19124	18771	18771	11091	3343	97310

電話加入者數及通話數 (一九三八年—三九年)

州別	中央交換局		郊外交換局		地方交換局		計
	加入者線數	線當り平均一日通話數	加入者線數	線當り平均一日通話數	加入者線數	線當り平均一日通話數	
ニューサウスウェールズ	20794	1123	9427	17	6704	245	31237
ヴィクトリア	12111	1011	8115	4	5110	197	17917
クイーンズランド	8527	1055	1755	5	3355	270	12707
南オーストラリア	6289	1008	1889	5	1917	171	8151
西オーストラリア	7875	708	708	1	1017	194	2151
タスマニア	3801	874	1206	1	827	232	1329
全濠洲	58798	1022	21128	31	18955	1111	77884

無線電信許可表數 (一九三七年—三八年)

許可	ニューサウスウェールズ	ヴィクトリア	クイーンズランド	南オーストラリア	西オーストラリア	タスマニア	北方直轄	聯邦直轄	全濠洲
沿岸機	2	1	6	1	5	3	1	1	19
船舶機	93	96	16	10	5	1	1	1	111
航空機	14	13	7	4	3	2	1	1	48
國內機	14	13	7	4	3	2	1	1	48
計	110	113	30	15	13	6	3	3	110

特携試放放
計殊帶驗聽送
用用用者用の

(註) (1) 許可局の外に郵務省のウエーブル(北方直轄)カムウイ(クインズランド)の二局あり (2) 國營放送事業放送局二九(VLRクインズランド、リンドハースト、VLOシドニ、L、VW、P、Sの短波放送局三を含む)

年次	ニューサウス ウエールズ (聯邦直轄を含む)	クインズ ランド (パプアを含む)	南オース トラリア	西オース トラリア	タスマニア	全濠洲
一九二九	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二八	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二七	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二六	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二五	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二四	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二三	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二二	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二一	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九二〇	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一九	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一八	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一七	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一六	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一五	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一四	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一三	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一二	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一一	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九一〇	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇九	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇八	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇七	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇六	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇五	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇四	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇三	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇二	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇一	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九
一九〇〇	三三九	一〇六一	三三二	三三二	三三二	一三三九

第十五章 其他

第一節 地方概説

クインズランド州

本州は本土の北東部を占めその廣さに於て濠洲中第二位にあるが、南回歸線が殆ど其の中央部を走り、大體の氣候が熱帶的である上に、東部高地は密林藪蒼として居り、今尙人跡稀な地域多く、人口は濠洲總人口の約八分の一を包容してゐるに過ぎない。本州の海岸は出入多く良港に富み、四八軒を距て、海に浮ぶ長さ一二〇軒の大保礁との間が湖水の如き觀を呈してゐる。海岸の低地帯は幅四八軒乃至一六〇軒に及び、地味肥沃で雨量も多く甘蔗其他の栽培に好適してゐる。その背後は遠く北に走つて標高一、六二〇米のペレンペンカー山脈が連つてゐる。この山地は西方に向つて緩傾斜をなし、農耕・牧畜に適する草原を形成して、稍乾燥した灌木地帯に移るが、その盡きるところは即ち本土中央部の乾燥地帯となるのである。南より北に移るに従ひ、氣温は益々上昇して純熱帶的となり、湿度も亦夫に隨つて増加するので、北上するに従つて熱帯性植物が著しく勢を得はじめ。甘蔗・棉花・バナナ・パイナップル等その主なものであるが、畜産業は此の州にとつて農業にも増して重要である。肉用に適する牛の産地としては、クインズランドの右に出づるものはないが、羊はニューサウスウェールズの次に位にある。

次に金・銅・石炭等も亦當州の重要な産物である。金銀所在地として有名なのは、チャータースタウンと、産額に於て世界一と稱せられるマウン・モルガンとである。銅はクロンカリーとマウン・モルガンから、石炭はブリスベーン市に近いイブスウィッチから産出される。土地は廣く豊穡であるから低廉な勞力を得られることになれば、將來に於

る本州の發展は相當見るべきものがあらうと思はれる。クインズランドの海岸には、此處を北上する世界の航海學者の膽を奪ひ、世界の學者の興味の中心となつてゐる大堡礁(グレート・バリアー・リーフ)がある。之は一大珊瑚礁であつて、或は島となり海岸の長壁となり、外壁となつて數百軒の長さに連亘してゐる。

ブリスベーン

ブリスベーンはクインズランド州の首都で濠洲北部の貨物を吞吐すると共に、ブリスベーン河岸には棧橋が設けられ、一萬五千噸級の船舶を碇泊せしめ得る。而も四時風波の憂なきを特色とする。人口は約二二萬で水の都といはれるほど水運の便がよく、氣候は熱帶地としては温和な方で南國の氣分を満喫させる。此處には有名な自然博物館があり、之は公衆教育と學術研究の機關となつてゐる。

ニューサウスウェールズ州

本州はその附屬地を合せて面積八〇一、四二九平方軒、總人口二六〇萬人、廣さに於て濠洲中の第四位、人口に於て首位に位する。海岸線は單調であるが、ジャビービス灣、ブロークン灣、ポート・ステフェンズ、良港シドニーを包容するポート・ジャクソン等がある。

地形は大體三つの地帯に分けられ、東部海岸地帯、その西側の高地帯、更に西側の緩傾斜の平原地帯との三つになつてゐる。この海岸地帯は南より北するに従つて氣温が上昇し、北部では熱帯性の作物が増加し、乳製品を主とする畜産業が盛である。ハンター河の流域は有名な小麦の産地であるが、シドニー附近は地味が瘠瘦で、諸所に果樹園が点在してゐるに過ぎない。山地は主として鑛山業と畜産業とが行はれ、傾斜地帯より西への大草原はメリノ種を主とする羊の放牧地である。シドニー市街はダーリング港とウィルムルムル灣とに挟まれ、舌状をなした地域を占めて居り、郊外の發展を包括した大シドニーの面積は二四六、七二一平方軒、總人口約百萬である。市内目抜の場所は廣大な郵便局を中心とするショーシ街、ビット街及キャッスルリッチ街等で、それ等の街路や商店の模様等は米國化の傾向が甚しいが、住民は舊慣を墨守する英人なので

輕浮薄な風はない。此處にある濠洲博物館は特筆すべきもので、鳥獸其他の自然物、大洋洲各地の民族の聚集品がよく整頓されてゐる。又シドニー大學は古風なエリザベス式であり、立派な大講堂には演壇に見々と蠟燭を點して中世の英國風を保つてゐる。シドニーは黒オパール（オパール）の裝身具の産出でも知られてゐる。オパールは水分を含んだ硫酸を主体とする膠狀體の物質で玉滴石（ハイアライト）と呼ばれ葡萄の房に似た形をしており、現今では頗る高價で、寶石の王とまで稱へられてゐる。シドニー港の一角でポート・ジャクソンの入江に近い所にあるタロンガ動物園はシドニー市民の慰安場所たるのみでなく、世界有数の動物園として其名聲を恣にしてゐる。天然の奇岩突兀たる丘陵の間に、巖石樹木を配して自然そのままの檻を造り、設備萬端よく整ひ脚下の麗はしい港の眺めといひ、又有袋類の豊富なること寔に稀有の動物園である。

本州には世界的に有名な大鐘乳洞が五箇所あるが、中でもその名天下に著聞するのはジェノランケーガである。

本州には新國都となつたカンペラがある。シドニーとメルボルンとの中間にあつて鐵道幹線より少し距つてゐるが、東方一二〇軒の地には良港ジャビービスがある。

ウイクトリア州

本州は濠洲大陸中で一番面積の小さい所で、總面積は二二七、六二〇平方軒に過ぎないが、人口の稠密さはニューサウスウヰルズ州に劣らない。州首都にして良港であるメルボルンはヤラ河川の入口にある。更に他にジーロング港がある。

本州の西部一帯は丘陵起伏する低地であるが、その西北部マリイ地方は、何等收穫なき乾燥沙漠地帯である。西部の中央には山脈連亘し、一、五〇〇米以上の高峯で所謂濠洲アルプスを爲してゐる。是等の山地の南側には直に海に注ぐ短い河川が多數あるが、北方の斜面に沿つて流下するものは、總て南オーストラリア州へ流れる濠洲第一の大河マレーに注ぐバルリー、ダイアマウンテンの兩河の如きは平時は無水で、若し之から灌溉水を導くことが出来るとすれば、耕耘の開けることは甚大で、州當局では鋭意之が對策に當つてゐる。州首都アデレードは街路樹に飾られた幅の廣い整然たる街路、廣邊にある小公園の清らかな市街であつて、堂々たる南オーストラリア大學、新裝備の電車等、如何にも親しみ深い清潔な近代都市を形作つてゐる。この市はセント・ビンセント灣に注ぐトレンス河に臨み、アデレード港から續いてゐる。セント・ウイント灣口にあるカンガル島は東西一四四軒、南北五八軒の巨島で、島インセ内にキングスコート及ホッグベリーの二つの町があるが、この島は「南國の健康地」と名付けられてゐる通り、一年を通じて氣温の變化がなく、氣候快適、空氣清淨で凡ての人に喜ばれる。濠洲に至つて大河の妙い國で舟航の便のあるものは淺いアレキサンドリーナ湖に通じて、エンカウンター灣に注ぐこのマレー河以外には殆ど無い。セント・ビンセント灣及スペンサー灣に臨む一帯の地は葡萄の産地として有名である。現時南オーストラリア州の葡萄植付總面積は五〇、二七一エーカーを算し、内三〇、〇〇〇エーカーは主として葡萄酒の原料を得るために、殘餘は乾葡萄の原料を得るために、夫々適當な種類が栽培せられてゐる。

西オーストラリア州

本州は濠洲中の最大の州であつて、東經一二九度以西の全部を占め、面積二、五二七、六三三平方軒、東西の距離は一、五〇〇軒、東北隅から西南隅に至る距離は二、三六八軒で殆ど濠洲全土の三分の一に相當するのがあるが、人口に至つては僅に約四四萬人に過ぎず、夫も大部分は首都パース附近に集中してゐる。斯の如く人口の少い所以は眞に安住し得る

本州は小麦の生産地として有名であるが、その主産地は北部一帯シェパードンを中心とする灌溉地帯である。又羊毛も本州の主要産物であるが、その生産地はハミルトン及キヤツスルメインの中間に位する西南部地方である。尙其の他に重要なものは金であつて、バララット、ペンディゴ等金産地として著聞してゐる。

州首都のメルボルンはヤラ河口から八軒の地で、人口は八〇萬人を超えてゐる。一年の平均氣温は攝氏一五・五度、降雨量六三九軒である（緯度の關係から言へば日本の仙臺附近と同様である）。市街には壯麗雄大なる政廳、議院、博物館、メルボルン大學等があり、落着いた風致の都市である。聖安息日たる日曜日は市民によつて眞の安息日となつて居り、娛樂のための自動車は姿を消し、教會の來往に必要な時間以外には電車も運轉中止し、汽車もこの日は出發しない。頑迷とでも言ふべき程に宗教的慣習を固守するのは英國人らしい床しさと云へる。

タスマニア州

本州は面積六七、八九七平方軒で、大きさはウイクトリア州の半ばに過ぎず、濠洲の州としては最小である。夫に人口も約二三萬を數へるに過ぎない。首府ポートは南端の良港で、北岸にはロージェストンの要港がある。人口の比較的稠密なのは西北部と中部と東南部とであり、北に流れるタマール河と南に向つて流れるダーウチント河の流域は地味豊穠な土地である。西部海岸は濕潤な西風を受ける山地が聳立してゐる爲に降雨量が非常に多い。本州の産物として知られてゐるものは、錫、銅、鉛、銀等の鑛産物であるが、近時は果實・林檎が歐洲市場に盛に進出するに至つた。

南オーストラリア州

本州は本土の南部及中央部を占め、面積は九八四、三八一平方軒、その廣さは濠洲中第三位であるが、人口は全濠洲の十分の一に足らぬ約五八萬人で、而もその中の約三五萬人は州首都アデレードに集中してゐる。地域が少ない爲であつて、本州の安住地は夫は西南の一角スワンランドのみに過ぎない。他は酷熱住むに適しない熱帯地と水を得るに由なき廣漠たる沙漠地帯である。スワンランドは移住に適し、林産物としてはカリ、ヤラ等の良材を産出し、農耕も亦盛で相當量の小麦・果實を産出し、北部のブルームを中心とする地方には眞珠採取業が行はれてゐる。本州の全産額は莫大なもので、其の量は濠洲全産出量の六割五分を占めてゐる。

州首都パースは西海岸に注ぐスワン河の北岸に臨み、その海港フリーマントルから一九軒を距てゐる。この地が人口二〇餘萬を算するに至つたのは一八九二年にクルガルデー及カルグルリーに金鑛が発見せられたからであり、近時一定の都市計畫によつて市區改正がなされ、街路整然として快速の電車が走り文明の都市たる様相を整へつゝある。このパース市に達する關門とも云ふべきフリーマントル港には、二つの大突堤が左右から突出して港内を安全ならしめる爲の築港工事が完成し、港内は水深くして大艦巨船をも容れ得る。西オーストラリア州の生命ともいふべき金を産する地方、特にカルグルリー方面は乾燥地帯であつて、一滴の水は金よりも貴いといはれてゐた地域であつたが、現時はパース市の北三〇軒のダリーング山中に大堰堤を設け、ヘレナ河を遮斷し水を引くに至つたので金の採掘事業に一新紀元を劃する様になつた。この送水路の總工費は三百萬磅を要し、ムンダリングの大堰堤とポンプ、それを送り出す七箇所の送水場は規模の壯大さに一驚を喫する。

北方直轄州

總面積は一、三五六、一七六平方軒でクインズランドに次ぐ地域であるが、黑人を除いた人口は僅々四千人内外に過ぎず、海陸共に交通の便悪く、聯邦政府は歳入の不足に悩み、その開發には非常な犠牲を拂つてゐる。州首都は北部のポート・ダーウインであるが、白人の多くは官吏と其の家族のみであつて、來往のみ繁くして幾年を経て住民の數は大し増えない。此の地方の海岸地帯は一般に低地で熱帯植物に覆はれ、カ

ーペンタリア灣に注ぐローバー河及西北海岸に向つて流下するウィントリア・テリー等の河川が、その附近を灌漑してゐる。その奥地ムックリー臺地の東側は綠草が繁茂してゐるのゆゑ、將來牛の増殖を計れば好望の地方である。ダーウインからバインまでは鐵道があつて、金や錫を搬出してゐる。又中央オーストラリアのアリマ・モンリング・メから鐵道を北上してダーウインに達することゝなつてゐる。

第二節 文献目錄

I 般

- Australia. *Bureau of census and statistics, Canberra* :- Official statistics. 1941.
- :- Official year book of the Commonwealth of Australia.
- The Australian encyclopaedia; ed. by Arthur Wilberforce Jose, and others. 1926-27. 2v.
- Bowden, A. W. *comp.* :- South Australia: statistical register, 1937-38. 1939 (comp. fr. official records)
- New South Wales :- Official year book of New South Wales. 1920.
- Sydney Morning Herald :- Century of journalist: the Herald and its record of Australian life, 1831-1931. 1931.
- 井上昇三 :- 動く濠洲 昭和17
- 伊藤孝一 :- 濠洲の現勢 (太平洋叢書) 昭和17
- 高須・共轉
- Australia. *Inst. of intern. affairs* :- Studies on Australia's situation in the Pacific. 1936. (Inst. of Pacific relations. Victorian division)
- Blackburn, M. and others :- Trends in Australian politics. Papers read before the third summer school of the inst., ed. by W. G. K. Panamu. 1935. (Australian inst. of political sci.)

Bromhead, W. S. :- Shall White Australia fail? 1939.

Duncan, W. G. K. *ed.* :- Australia's foreign policy. 1938.

——— & James, C. V. *ed.* :- The future of immigration into Australia and New Zealand. 1937.

Collins, C. M. :- Australian company law: being a handbook of the law relating to companies in each of the Australian states. 1940.

Denning, W. E. :- Caucus crisis: the rise and fall of the Scullin government. 1937.

Gepp, Sir H. W. :- Democracy's danger: addresses on various occasions. 1939.

Hall, H. L. :- Australia and England: a study in imperial relations, 1934.

Hamilton & Addison :- Criminal law and procedure, New South Wales, containing the Crimes Act, 1900, the Criminal Appeal Act of 1912 and other statutes. 4 ed. 1940.

Iddings, I. L. :- Must Australia fight? 1939.

Institute of international affairs :- The British Commonwealth and the future. 1939.

Institute of Pacific relations, *Honolulu* :- Immigration laws, Australia Canada, New Zealand, Japan.

Isaacs, Sir I. A. :- Australian democracy and our constitutional system. 1939.

Jose, A. W. :- Royal Australian navy. 1923. (Official history of Australia in the war of 1914-1918, vol. 9).

Latham, J. G. :- Australia and the British Commonwealth. 1929.

McDonald, Henry & Meek (*Amotized & cgl*) :- Australian bankruptcy law and practice: embodying the Commonwealth Bankruptcy Act 1924-1933 and the rules and forms. 2 ed. 1940.

McAuliffe, P. :- Australia: her heritage, her future. 1939.

Melbourne, A. C. V. :- Early constitutional development in Australia. vol. I: New South Wales, 1783-1934.

Murray, Sir Hubert :- Papua of to-day; or, an Australian colony in the making. 1925.

O'Brien, E. M. :- Foundation of Australia: a study in penal colonisation. 1936.

Peru, N. :- Rational democracy in the Commonwealth of Australia. 1939.

Phillips, P. D. & Woolf, G. L. *ed.* :- The peopling of Australia. 1928.

Price, A. G. :- White settlers in the tropics, with additional notes by R. G. Stone. 1939. (Am. geographical soc., spec. publ. no. 23)

Quick, Sir John :- The legislative powers of the commonwealth and the states of Australia. 1919.

Rawling, J. N. :- Who owns Australia? 4 ed. 1939.

Reeves, William Pember :- State experiments in Australia & New Zealand. 1902. 2v.

Ribbles, J. H. :- Plea for a better understanding in our Australian-American relationships. 1936.

Roberts, Stephen H. :- History of Australian land settlement, 1788-1920. 1924.

Rodd, L. C. :- Australian imperialism. 1938.

Ross, I. Clunies, *ed.* :- Australia and the Far East: diplomatic and trade relations. 1936.

Schneider, Horst :- Die Einwanderung farbiger Rassen nach Australien. 1934. (Dresdner geographische studien, Heft 6)

Taylor, G. :- Environment and race. 1927.

Wise, Bernhard Kingrose :- The making of the Australian Commonwealth 1839-1900. 1913.

Woolf, F. L. W. :- The constitutional development of Australia.

1933.

Wynes, W. A. :- Legislative and executive powers in Australia: being a treatise on the legislative and executive powers of the commonwealth and states of Australia under the Commonwealth of Australia Constitution Act. 1936.

報知新聞南方問題調査會編 :- 日濠通商紛争の觀察・オーネストラリア政経經濟事情 昭和12

警察・治安・社會・風俗及國情

Anderson, George :- Fixation of wages in Australia. 1929.

Australia. economic and trade conditions, to December, 1932. 1933.

Amos, D. J. :- Story of the Commonwealth Bank. 2 ed. 1932.

(Commonwealth stories, no. 1)

Bailey, K. H. and others :- The peopling of Australia. 1939.

Beck, W. :- Das Individuum ei den Australiern: ein Beitr. z.

Problem d. Differenzierung primitiver Gesellschaftsgruppen, im Zusammenhang n. d. psychol. Problem d. Persönlichkeit u. ihrer

Entwickelg. 1924. (Staatliche Forschungsinst. in Leipzig. Inst. f.

Volkerkunde, Reihe I, Bd. 6)

Bengery, P. de :- La conciliation et l'arbitrage obligatoire des

conflits du travail en Australie et en Nouvelle-Zelande. 1937.

Briou, J. :- La situation financiere australienne et ses consequences

economiques. 1931.

Clark, V. S. :- The labour movement in Australasia. 1907.

Coghlan, T. A. :- Labour and industry in Australia: from the first

settlement in 1788 to the establishment of the commonwealth in

1901. 1918. 4v.

Dow, D. M. :- Australia advances. 1938.

Eggleston, F. W. & G. Packer :- Growth of Australian population. 1937.

Foerander, Orwell de R. :- Towards industrial peace in Australia. 1937.

Gattinger, H. J. G. :- *Verständigung und Arbeiter-Herrschaft Ergebnisse e. krit. Betrachtg. d. austral. Verhältnisse.* 1929.
 Geisler, W. :- *Die Wirtschafts- und Lebensraume des Festlandes Australien.* 1928.
 Giblin, L. F. :- *Some economic effects of the Australian tariff.* 1936. (J. Fisher lecture in commerce, 1936)
 Gr. Brit. *Dept. of overseas trade* :- *Economic and trade conditions in Australia, 1932, '35-38.* 1933-39, 5v.
 Horne, G. & Aiston, G. :- *Savage life in central Australia.* 1924.
 Howitt, A. W. :- *The native tribes of South-East Australia* 1904.
 Janney, Leslie C. :- *Australia's government bank.* 1933.
 Jose, A. :- *Australia: human and economic.* 1932.
 MacLaurin, William Rupert :- *Economic planning in Australia, 1929-36.* 1937.
 Malinowski, B. :- *The economic aspect of the Intichiuma ceremonies.* 1912.
 Maudon, F. R. E. :- *A study in social economics.* 1927.
 Mills, Stephen :- *Taxation in Australia.* 1925.
 Kerr, Donald :- *The principles of the Australian land titles (Torrens) system, being a treatise on the real property acts of New South Wales, Queensland, South Australia and Tasmania; the transfer of land acts of Victoria and Western Australia; and the land transfer act of New Zealand.* 1927.
 Radcliffe-Brown, A. R. :- *The social organization of Australian tribes.* 1931. (The "Oceania" monographs, no. 1)
 Ratcliffe, J. V. & J. Y. McGrath :- *Australian tax decisions: being the reports of tax cases issued as the court decisions section of the law book company's taxation service with exhaustive indexes.* vol. 1: 1930-32. 1932.
 Rhodes, J. H. :- *Makings of an Australian manifesto.* 1940.
 Ross, A. G. :- *Practical business economies for Australian conditions.*

1935.
 Rydge, N. B. & Collier, J. B. :- *Australian commonwealth income tax acts, 1922-29, and regulations thereunder, together with a full explanation of each section and a statement of departmental practice and decisions of the Imperial Australian and New Zealand courts.* 1929.
 Shann, Edward :- *An economic history of Australia.* 1938.
 Spencer, Baldwin :- *Native tribes of the northern territory of Australia.* 1914.
 Sutcliffe, J. T. :- *The national dividend of Australia and the manner of its distribution* 1926.
 Tebbutt, R. E. & L. O. Martin :- *Moratorium handbook: being the Moratorium Act. (N. S. W.) 1932, no. 57.* 1933.
 Thomas, Northcote W. :- *Kinship organisations and group marriage in Australia.* 1906.
 Wilkinson, H. L. :- *The world's population problems and a white Australia.* 1930.
 Wright, T. :- *New deal for the aborigines.* 1938.
 Yorston, Robert Keith & Foresacre, Edward Eric :- *Proprietary and private companies in Australia: their advantages, formation, statutory duties and general practice* 1937.
農業・林業・水産業
 Air-seasoning of timber. 1939.
 Australia. *Bureau of census and statistics* :- *Summary of Australian production statistics, 1921-32.* 1933. (Production, bulletin, no. 26)
 Bottomley, J. :- *Cotton-growing in Australia.* 1906.
 Brunning, L. H. :- *The Australian gardener: a complete and practical guide dealing with the growing of fruits, flowers and vegetables.* 1929.
 Chomley, C. H. :- *Australia: the coming cotton country.* 1922.
 Ferrin, A. W. :- *Australia: a commercial and industrial handbook*

1922. (U. S. Bureau of foreign and domestic commerce special agents series, no. 216)
 Horns, Juan :- *Agricultural implements and machinery in Australia and New Zealand.* 1918. (U. S. Dept. of commerce, Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series, no. 166)
 Jovett, W. G. & W. Davies :- *A chemical study of some Australian fish.* 1938.
 Kevin, J. C. G. *ed.* :- *Some Australians take stock (essays),* by W. E. H. Stanner and others. 1939.
 Ramsey, H. J. :- *Australian tomato book.* 1929.
 Smith, Franklin H. :- *Australasian markets for American lumber.* 1915. (U. S. Bureau of foreign and domestic commerce, special agents series, no. 109)
 Smith, H. B. :- *The sheep and wool industry of Australasia and New Zealand: a practical handbook for sheep farmers and wool-classers, with a chapter on wool buying and kindred products.* 3 ed. 1928.
 South Australia. *Government* :- *Report of the government statist upon the production and livestock, etc. Statistics, 1929/30.* 1931. (Statistical register of the state of South Australia, 1929/30, pt. 5, sec. 1)
 Stewart, T. A. *ed.* :- *Australian rose annual for 1939.* 12th issue. 1939.
 Testing of timber for moisture content. 1939.
 Tinnar, M. :- *Das Standortproblem d. australischen Industrie.* 1934.
 Wadhams, S. M. & Wood, G. L. :- *Land utilization in Australia.* 1939.
 White, M. R. :- *No roads go by: life on a cattle station in central Australia.* 1932.
 Wood, G. L. *and others* :- *Problems of industrial administration in Australia.* 1938. (A ser. of lectures at the univ. of Melbourne)

桐生知次郎 :- 澳洲の甘蔗病害と製糖業防法 昭和13 (臺灣蔗作研究會報 第16卷3號別刷)
 桐生知次郎 :- 澳洲の糖業 昭和13 (熱帯農學會誌第10卷1號別刷)
 臺灣總督府官房調査課編 :- 澳洲の産業 大正13 (南洋支那及南洋調査第80輯)
 安西千賀夫 :- 澳洲の産業・全農及貿易 大正 9
工業・鑛業・運輸
 Anos, D. J. :- *Story of the Commonwealth woolen mills: the making of the mills and the work they did.* 1934. (Commonwealth stories, no. 4)
 Australasian manufacturer industrial annual issue. (Published annually)
 Bosworth, C. E. :- *Shoe and leather trade in Australia.* 1918. (U. S. Dept. of commerce, Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series, no. 159)
 Downs, William G. :- *Australian markets for American hardware.* 1916. (U. S. Bureau of foreign and domestic commerce: miscellaneous series, no. 42)
 Clark, D. :- *Australian mining and metallurgy.* 1904.
 Gr. Brit. *Hydrographic dept.* :- *Australia pilot, vol. 4-5, 2 ed.* 1923, '23, 2v.
 Imperial institute, *Lond.* :- *The mining laws of the British Empire and of foreign countries, vol. 5: Australia, pt. 1: New South Wales.* 1929.
 Keim, F. :- *Über gold- u. Perlsgrunden Australiens.* 1925.
 Lundquist, R. A. :- *Electrical goods in Australia.* 1918. (U. S. Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series, no. 155)
 Moore, H. B., Day & Journeaux :- *Gold mines of Australia and New Guinea: leading companies.* 1934.

- Bien, Frank :- Railway materials, equipment and supplies in Australia and New Zealand. 1918. (U. S. Dept. of commerce, Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series, no. 156)
- Schmeisser, G. :- The gold fields of Australasia. tr. by H. Louis. 1893.
- Smith, G. :- A contribution to the mineralogy of New South Wales. 1926. (Mineral resources, no. 34)
- U. S. *Bar. of foreign & domestic commerce* :- Ice-making and cold-storage plants in Australia and New Zealand. 1924. (Trade information. 230)
- 外務省郵船局第三課 編 :- 濠洲ニ於ケル礦物資源 昭和14
- 德義・英國及國粵**
- Austral. Band :- Einfuhrungs- und Verbrauchssteuertarif 1921/23. 1929.
- Australia. *Bureau of census and statistics* :- Oversea trade and customs and excise revenue, 1933-39. (Bulletin no. 36)
- :- Australian statistics of oversea imports and exports and customs and excise revenue, 1935/36-36/37. 2v.
- Australian :- 1: 10,000,000. Earth. Eisenbahnlinien u. Autostrassen mit 4 Nebenkt. 1934. (Flemmings Generalkt. 4)
- Australian tariff: an economic enquiry. 2 ed. 1929. (On the economic effects of tariff, Australia)
- Burrill, H. R. :- Report on trade conditions in Australasia. 1908.
- Copland, D. B. & C. V. James. *ed.* :- Australian marketing problems: a book of documents, 1932-1937. 1938. (Documents on Australian political and economic affairs ser.)
- :- Australian trade policy: a book of documents, 1932-37. 1937.
- Comnes' Australasian roads; the location, design, construction and maintenance of roads and pavements. 1927.
- Preislers Verkehrsdenkmäler 1: 17,000,000. Pl. 6: Australien. 1931.
- Reisler, W. :- Austral on u. Ozeanien. 1939. (Enzyklopaedie d. Erdkde. 34)
- Geisler, W. *and others* :- Australien u. Ozeanien in Natur, Kultur u. Wirtschaft. Antarktis 1932. (Handbuch d. geogr. Wiss.)
- Gregory, C. A. :- Atlas of the discovery, settlement and exploration of Australia. 1940.
- Gregory, J. W. :- Australia. 1916.
- Grube, A. W. :- Geographische Charakterbilder. 3. tl: Asien; Australien (Ozeanien). 1924.
- Harris, H. L. :- Australia in the making: a history. 1936.
- Hatfield, W. :- Sheeppastes. 1937.
- Hanser, H. :- Australien: der menschensche Kontinent. 1938.
- Hirthigs, E. :- Australien, Südsee, Antarktis. 1930. (Sehnen u. Schiffen, reihe 2, H. 4)
- Ivan, W. :- Um d. Gantons willen nach Australien. Episode dt. Auswanderer. Den Austral. Deutschen gewidmet. 1931.
- Johann, A. E. :- Kangurus, Kobra u. Korallen. Fahrten u. Erlebnisse in Australien u. d. Südsee. 1926.
- Lahorte, E. D. :- The southern lands. 1931.
- Martin, M. :- History of Austral-Asia: comprising New South Wales, van Diemens Island, Swan River, south Australia etc. 1863.
- Moore, W. R. :- Capital cities of Australia. (The national geographic magazine, vol. LXV, no. 6, 1935)
- National travel association :- Pleasuresque Australia.
- Nowack, W. :- Australien. Kontinent d. Gegensätze. 1938.
- MacGarrig, H. :- Little wheels: a trip across Australia in a Baby Austin. 1935.
- McGaire, P. :- Australian journey. 1939.
- Martin, J. K. :- Granhorn in Australien. Auswanderer-Erlebnisse. 1931. (Slg. "Aus weiter Welt" 91)
- O'Connell, J. F. :- Elf Jahre in Australien und auf der Insel
- Ross, I. Clunies, *ed.* :- Australia and the Far East: diplomatic and trade relations. 1939.
- Rhodes, J. H. :- With Amlice toward home: thought starters on our national imperatives as seen through commercial spectacles. 1939.
- Rydge's year book, 1938-40: special annual issues of Rydge's business journal. 3v. 1933-40
- Satchell, J. T. :- History of trade unionism in Australia. 1921.
- Trade directory of South Australia. 1919. (U. S. Bureau of foreign and domestic commerce, miscellaneous ser. no. 83)
- Viney, H. G. :- Century of commerce in South Australia, 1836-1936: incl. a brief history of the Adelaide chamber of commerce. 1937.
- Wise, H. :- Buyers and sellers register of Australia and New Zealand, 1939. 1939.
- 滿鐵東亞經濟調査局 編 :- 濠洲鐵道概要調査 昭和17 (南方交通調査資料第6號)
- 東亞研究所 :- 日濠貿易概観 (中間報告) 昭和14
- 國英・德義・波蘭及保比**
- Adams, M. P. O. G. :- Australia's wild wonderland. (The national geographic magazine, vol. LXXV, 1939)
- Bennelen, R. W. van :- Versuch einer geotektonische Analyse Australen u. d. Südpazifik nach d. Urdationsstheorie. 1933.
- Blakeley, F. :- A record of experience. 1939.
- Bradly, Edwin J. :- Australia unlimited. 2v. [1925]
- Browne, G. S. :- Australia: a general account. 1929.
- Conigrave, G. Price :- North Australia. 1936.
- Coote, G. H. :- The geography of Australia as delineated by the Dutch cartographers of the 17th century. 1894-97.
- Evans, G. W. :- Voyage a la terre de Van Diemen; ou Description historique, géographique et topographique de cette ile 1823.
- Fenner, G. :- South Australia: a geographical study. 1931.
- Ponape: Erlebnisse e. trischen Meerosen in den J. 1822-1833. Aus d. Engl. ubers. u. Insg. v. P. Hanbruch. 1930.
- Pollock, W. :- So this is Australia. 1937.
- Portus, G. V. :- Australia since 1606: a history for young Australians. 6 ed. 1937.
- Prado y Tober, Diego de :- New light on the discovery of Australia as revealed by his journal. 1930. (Harklytt soc. works, 2nd ser, no. 64)
- Roberts, S. H. :- History of Australian land settlement(1788-1930).
- Ross, G. :- Der unvollendete Kontinent. II. Aufl. 1940.
- Scott, Ernest :- A short history of Australia. 1916.
- Spencer, Sir Baldwin :- Wanderings in wild Australia. 19-8. 2v. & Gillen, E. J. :- Across Australia. 1912. 2v.
- Staal, P. :- Foreigner looks at Australia. 1936.
- Stann, L. D. :- A regional geography. Australia and New Zealand. 1930.
- Stephenson, P. R. :- Foundations of culture in Australia: an essay towards national self respect. 1936.
- Stoffing, W. :- Australien, das Land von morgen. 1930.
- Swinburne, Gwendolen H. *comp.* :- A source book of Australian history. 1919.
- Taylor, Griffith :- Australia: a study of warm environments and their effect on British settlement. [1922]
- :- Australia: incl. chapters on New Zealand and neighboring islands: a geography reader. ed. by I. Bowman. 1931.
- :- Australia: in its physiographic and economic aspects. 1923.
- :- The limits of the Australian desert. 1931.
- :- Settlement of tropical Australia. 1917.
- :- Physiography of Eastern Australia. 1918.
- Thomson, Robert P. :- A national history of Australia, New Zealand

- & the adjacent islands: from their discovery to the centennial era and from that period to the present day. 1917.
- Wade, Sir Charles G. :- Australia: problems and prospects. 1919.
- Wadia, A. S. N. :- Call of the southern cross: being impressions of a four months' tour in Australia and New Zealand. 1932.
- Wallblanc, K. F. :- In Busch und Savannen Australiens. 1924.
- Wheeler, W. J. :- Australia and New Zealand. 1933. (Murray's modern geographies, 3)
- Wood, F. L. W. :- Concise history of Australia. 1935.
- 濠洲・太平洋・南極 昭和17 (世界地理第10卷)
- Jose, A. 著 大日本文明協會 譯 :- 濠洲及其諸島 大正 3
- 長倉橋介 :- 最近の濠洲及南太平洋 昭和 4
- Taylor, G. 著 竹内常行 譯 :- オーストラリアの地理 昭和17 (東亞館 叢書 244號 C)
- 土屋元作 :- 濠洲及新西蘭 大正 5
- 煤礦・銅礦・金礦・油礦
- Australia. *Parliament* :- Council for scientific and industrial research for year 1939-40. 1940. (14th annual report)
- Barrett, C. L. :- Australian birds: the wonders of birdland in picture and story. 1938. (Sun nature book, no. 10)
- :- Bird man: a sketch of the life of John Gould 1938.
- :- Koala: the story of Australia's native bear. 2 ed. 1939.
- :- Wildlife in Australia: wonder animals and birds 1938.
- Baselow, Herbert :- The Australian aboriginal. 1925.
- Dusman, G. *hsg.* :- Illustrierte Völkerkunde. unter mitwirk. v. A. Bryan, u. a. Stuttgart. 2 Bde., 1 Tl. : Australien u. Ozeanien.
- Asien, von G. Buschan, A. Bryan, W. Volz, u. a. 2. u. 3 Aufl. 1923.
- Cherwin, C. :- Back in the stone age: the natives of central Australia 1933

- David, T. W. E. :- Geology of the Commonwealth. 1923.
- Elkin, A. P. :- Australian aborigines: how to understand them. 1938.
- Ewart, A. J. :- Flora of Victoria. 1930.
- Finlayson, H. H. :- Red centre: man and beast in the heart of Australia. 1936.
- Fitzgerald :- Australian orchids. [1877-80?]
- Frazer, J. G. :- The native races of Australasia; incl. Australia, New Zealand, Oceania, New Guinea and Indonesia. 1939. (A copious sel. of passages for the study of social anthropology from the ms. notebooks of Sir J. G. Frazer, arr. and ed. from the ms. by R. A. Downie)
- Gregory, T. W. :- Climate of Australia. 1924.
- Grube, A. W. :- Bilder und Szenen aus dem Naturund Menschenleben. 1926. (Fahrten u. Forschungen. Bd 5 Bilder u. Szenen aus Australien u. Ozeanien)
- Hunt, and others :- Climate and weather of Australia. 1913.
- Penkhn, E. :- Die Bevölkerung in d. wichtigsten brit. Ueeresgebieten. Entwicklg. u. gegenwart. Stand. (Statistik. Union, Kaiserreich Indien, Australien u. Kanada) 1940. (Forschgn. d. Dt. Auslands-wiss. Inst. Abt. Volkstumskde., 1)
- Porteus, S. D. :- Psychology of a primitive people: a study of the Australian aborigine 1931.
- Prescott, E. E. :- The native flowers of Victoria.
- Roughley, T. C. :- Wonders of the great barrier reef. 1939.
- Spencer, Baldwin & Gillen, E. J. :- The northern tribes of central Australia 1904.
- Taylor, G. :- Australian meteorology. 1920.
- Taylor, G. :- The topography of Australia. 1927.
- Vogel, H. :- Atmosphärische Zirkulation über Australien 1929.
- Waite, E. R. :- Fishes of South Australia. 1923 (Handbooks of the flora and fauna of south Australia)

Wilkins, Sir G. H. :- Undiscovered Australia: being an account of an expedition to tropical Australia to collect specimens of the rarer native fauna for the British museum, 1923-25. 1929.

Womersley, H. :- Primitive insects of south Australia, silverfish, springtails and their allies 1939. (Handbook of the flora and fauna of South Australia)

民族・宗教・文藝・雜記

- Browne, G. S. ed. :- Education in Australia: a comparative study of the educational systems of the six Australian States. 1927.
- Greene, H. M. :- Outline of Australian literature. 1930.
- Mackenzie, T. F. :- Nationalism and education in Australia with spec. ref. to the state of New South Wales 1935.
- Parker, K. L. :- Australian legendary tales. 1896.
- Robin, B. P. :- The sundowner. 1922.
- Spencer, F. H. :- A report on technical education in Australia and New Zealand. 1939.

〔附録〕 既往の日濠關係

日濠貿易關係—海運問題—眞珠業問題—裁滿問題—日本移民事情

第一節 日濠貿易關係

濠洲の歴史は短いが、併し近代國家としての日本の活躍は濠洲の半ばに達してゐない。日本の鎖國政策が米人によつて破られる以前に英人は七〇年間、濠洲に入込んでゐた。世界大戦後に初めて日濠貿易が兩國にとつて重要となつた。一九二二年には濠洲の對日本輸出額は總輸出額の六・二%であり、對日本輸入額は總輸入額の三・五%であつた。一九三〇—三五年迄の期間は輸出の数字が漸増し一九三六年から一九三七年にかけて、其の率は輸出が六・〇%、輸入が四・三%に低下した。而して輸出の均衡に於ては日本の方が有利となつてゐた。即ち、濠洲は通常日本に商品供給する國々の中では第二位であり、日本から商品を買ふ國の中では英國の次位にあり、濠洲へ物を賣る國の中では第三位であつた。

濠洲から見れば日本は急激に工業化しつゝある國であるから、食糧品、原料を主として輸出する濠洲の如き國にとつては魅力を有してゐた。一九三六年三月、當時の濠商相は「濠洲は日本が世界列強の最高の地位に上つたことに感嘆せざるを得ない。而も我々は我が濠洲の貿易が日本の諸港へ發展して行く可能性のあることを喜ぶ」云々と述べた。然るに僅々二箇月後の五月には、濠洲は進んで日濠貿易戦を開始したのである。七箇月間の折衝の後、此の貿易戦は暫定取極の締結によつて解決はしたが、此の事は、濠洲對日本及英國の利害の衝突のあつたことを示したものである。

明かに日本は濠洲に對して、濠洲が日本に對するよりも、よりよい顧

客であつた。夫にも拘らず濠洲の行つたところは、日本からの輸入、特に織物の輸入を削減せんとしたのである。之はマンチエスターの綿業者の命令によつてなされたものと當時一般に評せられてゐたが、茲に濠洲の利益と英國の利益との衝突が判然と顯はれてゐる。或る論者は當時の濠洲の地位を次の如くに述べた。即ち「濠洲人は日本の産業發展及東洋人の生活標準の向上に特殊の利害關係を持つてゐる。地理的關係及天然資源よりして日・濠の將來は密接不可分に結び付けられて居り、従つて兩國の貿易政策は明に兩者の相互依存の關係を發せしむる方向に向けられねばならぬ」と。此の見解を承認するとすれば、次の二つの點を自明のものとしねばならぬ。即ち英國市場は濠洲の増加する生産品を吸収することが不可能なること及其の結果として、濠洲貿易の販路は他に求むる必要があり、其の中最も重要な地位に在るものは日本であるといふ事である。又或る論者は英國對日本の問題を次の如く述べた。即ち「英國の市場は衰微しつゝある。他方日本は人口の増加を見つゝあり、而も急速なる工業化によつて、其の生活標準は向上しつゝある。而して羊毛・肉に對する需要は過去に於ると同様に將來は飛躍的に増加するであらう」と。論議の中心は羊皮市場の地位如何であつた。日本の羊毛購買高は貿易戦前には急激に上昇する一方であつた。佛・伊・獨の購買高は減少したのに引替へ、日本の購買高は上昇した。日本人は非常な安値で加工製品を市場に提供することが出来るので、濠洲羊毛の他購買者の從來入込んでゐない地域へ毛織物の消費範圍を擴張したのであつた。若し日本の需要が増加の一途を辿り行くならば、濠洲羊毛生産者が、夫によつて利することは明かであり「羊の御蔭で食つてゐられる」國民が、又彼等により多大の利益をうけることになる。従つて日本から輸入品—夫は羊毛の支拂として送られたもの—を制限することに於て濠洲政府は羊毛産業に打撃を與へるやうに考へられる。

かくして問題は明白である。即ち國家として濠洲は國內の發展を中止

に持つのでなくては英國は易々と戦争による争潮を期し得ないからであ

一八七〇年代にイースタン・オーストラリア汽船會社(英國の所有)が東洋と濠洲との海運業を開始した。而して長年の間、東洋並に濠洲方面に於て確固たる地位を維持してゐた。日濠貿易が發展するにつれて、日本の船舶がこの方面へ進出し來つて、一九三七年迄に日本船十七隻、英國船三隻が就航してゐた。其の後協定によつてイースタン・オーストラリア汽船會社は濠洲貨物の二割五分の權利を獲得した。この協定は一九三五年、三六年に夫々満期となつた。そこで日本側はイースタン・オーストラリア汽船會社の權利を縮小しようとし、若し應じないならば、日本の船會社如何なる運賃協定をも拒否するといふ態度を執つた。イースタン・オーストラリア汽船會社は、之を以て日本が濠洲海運を獨占する意圖あるものとして、濠洲政府に訴へて助力を求めた。恰も日濠貿易戦の最中で積荷の減少を來して居た際であつたので、問題は一層複雑なものとなつた。

一九三七年七月、日本船主協會は英國汽船會社(イースタン・オーストラリア汽船會社を含む)を東京に招致し、東洋に於る海運業一般に就て論議し數箇月間の折衝の結果、新協定が成立し、イースタン・オーストラリア汽船會社は率に於て多少減少し二割二分五厘を取得することとなつた。斯くして日本は南進の國是を實現するに當つての重要な方面たる海運業に於て恒久的優越性を確立した。而して日本は全盛時代の英國の如く、製造工業國たると同時に、船主として自國の船舶を以て精製品を輸出し原料を輸入してゐることは明かである。明に濠洲—日本の海運は日本の據場であつて、茲に敢て侵入せんとするものは、必ず日本よりの果敢なる排撃を覺悟せねばならぬこととなつた。

第三節 眞珠業問題

濠洲の眞珠業は主に濠洲の北部沿岸、特にブルーム及木曜島で行はれ

第二節 海運問題

過去數年間、英國は其の海運業不振に頭を悩まし來つた。英國の眞の競争國の中で最も顯著なものは、新しく速く且つ國家より十分の補助金を受ける船舶を有した日本であつた。此の不振より生ずる恐怖は國防への考慮が表面化するにつれて烈しくなつて來たといふのは、大商船を十分せざる限り、其の輸出貿易を擴張しなければならぬ。一方英國市場は濠洲にとつて唯一の依存すべきものであり得ないことが實感せらるゝに至つた。かくて濠洲の爲すべきことは英國以外に市場を求めることである。濠洲は太平洋の一強國として日本の市場に期待をかけてゐる。日本の市場は發展しつゝあり、而も日本の市場は濠洲に豊富に生産し供給なし得る物資を求めてゐた。しかし對日貿易を得んとするならば、濠洲は夫と引換に日本の生産物を受取らねばならぬのであつた。然し濠洲の主要市場は依然として英國であつた。而もその英國から濠洲は巨額の借款を引き出して居り、夫に對し利子を支拂はねばならぬ。日本が濠洲に於て勢力を得ることは必然的に英國の濠洲に於る實質的利益に抵觸することになり、英國の經濟的紐帶をその最も弱い織物に於て脅すことになつた。英國は是以上に經濟的紐帶を弱められることは黙止することが出来ないのであつた。而して貿易戦當時、濠洲は親英派の政府が政權を握つてゐた。而もこの政府は濠洲の利益を支持する者を無視して、一圖に英國の利益を守るの態度を堅持してゐたのである。

問題は少しも解決されてゐない。即ち、曩に英國本位に解決を見たものは一時的のものに過ぎない。近い將來國防・戦争の脅威からして、種々の問題が派生し、結局は濠洲自體の而して夫が大東亞建設の一環たる責務の自覺と協力とに歩を進めるに至るであらう。或は情勢が一變して濠洲の羊毛も小麦・獸皮・バターも大して必要としない時が來るであらうが、滿洲國・蒙古其の他各地に於る發展を一々東亞共榮の見地から検討して濠洲の夫に及ぶべきものと考へられる。

てゐる。ダーウィンは其の第三位に属する。日本潜水夫は濠洲初期の移民史を飾りつゝ一時衰微してゐたが、一九三四年から三五年にかけては二、五〇〇の人間と三〇〇隻の臨時船が之に従事するやうな盛況を取戻した。

寶石商に取つて重要な眞珠は、眞珠産業に於ては附随的な産物に過ぎず、基本的産物はボタン、ナイフの柄其の他裝飾に用ひられる貝殻である。濠洲眞珠業の地位は世界に於て最重要なものである。

日本人は最初初期契約で働く潜水夫として此の産業に入込んだ（この日本人採用のことは濠洲の他の産業に於ては絶對的に許可せられない止むを得ざる方式である）日本潜水夫は引續き濠洲船に雇はれてゐる。而して一九三五年頃より日本人は又新しい要素をこの産業に注ぎ入れた。即ち彼等は日本委任統治領のパラオ（約一、五〇〇哩を距する）を出で、自分の船を濠洲の海に送り始めた。一九三六年には八五隻の船が作業に従事し、一九三七年には約百隻の船が此の仕事に當つた。而して一九三八年には是等眞珠採取船を支配する日本眞珠會社がその資本を六倍に増資し、船を一六〇隻に増加した。是等の船は平均三〇噸内外であり、幾つかの群に分れ、各群には約百噸の母船が附屬する。母船は眞珠採取場に於て糧食の補給をなすと共に貝殻を受取る役割をなしてゐる。この日本の發展は濠洲の眞珠業者を刺戟せずにはおかなかつた。

領海を如何に定義すべきかに就ては幾多の疑問を生ずる餘地があるが、日本人が濠洲の領海外にある限り競争による以外に日本人の活動を抑制する手段がないことは明かである。然るに濠洲の眞珠業者は、この競争を続けることに困難を感じた。濠洲眞珠業者は曰く「優秀なる潜水夫は日本人であり、日本船は最も優秀なる潜水夫を吸収し、第二流、第三流のものを濠洲船に残す。潜水夫は平均一箇年一、五〇〇弗の収入があり、彼等は採取の率により受取るので、優秀なる潜水夫は一シーズンに二千四百弗の収入を擧げることが出来る。即ち之は潜水夫の採取力に非常な差異があることを示すのである。又採取期の初めの船の準備費も濠

洲は眞金・食料・燃料其他に就て、日本よりも多くなると。パラオを出る日本船は、費用の嵩む濠洲の船が負擔しなければならぬ沿岸税を課せられてゐないのである。而も日本の船は濠洲の船に比して新しく且つ裝備も完備してゐる。之では到底日本の業者と太刀打は出来ない」と。

濠洲領海に於る眞珠區域は採取し盡されんとし、之が舊に復するのには五、六年を待たねばならない。現在最善とせられる區域は大海であつて、即ち何人の所有にも屬しない區域である。而して日本人は此の區域に關して卓越した知識を有してゐるのである。

日本が眞珠業へ進出した結果として世界市場への供給量は非常に増加し、価格は下落した。一九三七年より三八年にかけて約七千四百噸の貝殻が採取せられたが、日本は四、三〇〇噸、濠洲は二、六九五噸採取しなその残りは東印度が採取した。而して世界の消費量は一ヶ年約四、〇〇〇噸であるが、二大取引中心地たるニューヨーク、ロンドンの在庫品は二箇年分以上に達してゐた。價格の下落と共に本産業から驅逐せられるものは生産費の高い濠洲である。

以上の日濠に於る眞珠業の競争は、日本が決定的強味を有するが故に文句なく日本の勝利に歸すべきものであるが、複雑なる要素が取り入れられて惱みを爲してゐた。夫は第一は、日本は濠洲の領海に侵入することを禁ず、第二は燃料・飲料水を得る爲に、又貝殻・糧食の貯藏所を設ける爲に濠洲沿岸に上陸することを禁ず、第三は原住民女の Usage を禁じたのである。

第一の問題は、沿岸の採集場が取り盡されるに從て重要で無くなつた。第二に就ては、不十分ながら濠洲監視船が定期的な、斯る違反者を捕へ没收してゐる。第三の問題は扱ひ難い問題であつて、原住民女は濠洲人から苛酷な取扱を受けてゐるので日本人に好意を持ち、接近したがつてゐるのは事實である。

は漁船の根據地をダーウィンに置くことであつた。第一の解決は濠洲政府が肯定せず、第二の解決はダーウィンより出漁する濠洲業者達が、日本の競争上の強味を一層濃化するものとして反對した。明かに兩者は解き得られぬ悩みに逢着してゐるのであつた。

第四節 鐵鐵問題

農業生産に従事してゐる多くの國家と同様に、濠洲も茲數年間製造工業の發達を獎勵し來つた。一九一五年以來濠洲は鋼鐵産出國となり、世界大戰中製造工業は急激に發達した。

その發展振りは國防と關聯して目醒しいものがあつた。貿易戰に於て濠洲製造業者は、日本製造品の輸入は、濠洲の生産を傷つけるが故に許すべからざるものであることを指摘し始め、かくて問題を甚だしく複雑ならしめた。

濠洲鐵鐵問題は濠洲の鋼鐵と結び付いて居り、濠洲の國家的問題であると同時に英國の利害とも密接なる關係を有してゐた。

日本は南オーストラリアのワイヤラから鐵鐵を手に入れてゐるが、この鐵鐵の産出地（アイアン・ノツツ其の他）はプロトクンヒル・プロブライエンタリー會社が所有し開發してゐる。右會社は濠洲の鐵鐵を獨占し（主に英國資本による）、而して日本はタスマニア及クインスランドにも鐵鐵の供給を求めた。鐵鐵をめぐる日濠關係は西濠洲の北西部にあるヤンビー・サウンドが中心となつてゐた。ヤンビー・サウンド鐵床の鐵鐵埋藏量は滿潮時の海面上一億噸と推定されてゐるが、其の内最も豊富なものはクラン島、コツカツトウ島及アービン島である。

日本はクラン島の鐵床に利害關係を有してゐる。この鐵床の租借權は一九〇七年以來、未だ一噸の鐵鐵を産出せずに四人の手を経て一九三五年初め英國H.A.ブラツザート商會が之を取得した。一九三六年の初、ブラツザート商會は西濠洲パースルに事務所を設置し、クランへ従業員及準備品を送つたが、實際の生産はミネソタ州ツルスのジョン・A.サ

ヴェーデ商會が受持つてゐた。而して機械技師長V.C.ムーアは一九三七年三月クランに赴いた。鐵鐵採掘のため、ブラツザート商會は東京の日本鐵業より資金の融通を受け、濠洲のこの事業會社への融資は同時に同鐵山の全産出額を日本鐵業へ引渡すこととなり、なほ日本への鐵鐵輸送は日本郵船會社に一任せられることになつた。

最初の中は大した反對も受けなかつたのであるが、間もなく反對の聲が大きくなり、一九三七年三月には政治家・新聞記者がこの問題を取り上げて騒ぎ立てた。その根據は一つは濠洲自身の鋼鐵業の保護に關するものであるとするのであり、今一つは英國の資源保護上放棄して置けないと云ふのである。かくて濠洲政治家及英國當局は聯邦政府に對して日本への鐵鐵輸出の禁止を迫つた。

聯邦政府は之に對し第一に租借權の問題は西オーストラリア政府に委ねられてゐること、第二に、國防當局は濠洲の鐵鐵埋藏量は豊富なを以て鐵鐵輸出が將來の脅威となることは考へてゐないと答へた。兎に角、濠洲聯邦は戰時となればいつても輸出を禁止し得るのであるし、此の計畫は鐵鐵が開發されるといふ明確なる利益を有すると考へられたのである。然しながら一九三七年七月には風潮が變つて來た。夫は聯邦政府に提出された所謂專家報告には現在の消費率から見て輸出が可能であり、稼行條件を備へた經濟的鐵鐵床は百年間濠洲の需要を充すに過ぎないと述べ、尙鐵鐵業が現在の鐵鐵消費率を以て發展して消化増加を續けると濠洲の鐵鐵床の壽命は五十年が危ぶまれるといふ。

翌月には濠洲首相は此の報告に誤りがあつたとし、濠洲の鐵鐵供給量は豊富なりと判断せられると云ひ、而も又一九三八年二月にはクラン鐵床は來年よりは産出せられざるべしと聲明した。

第五節 日本移民事情

邦人の濠洲發展は明治十年代から始まるので明治十六年、十九年、二十一年の三回に亘り合計一七七八人の契約移民が渡濠してゐるのである。

が、この外に別に明治十一年頃から木曜島に出掛けて高瀬貝の採取に従つてゐるものもあつた。

移民が漸く軌道に上つて來たのは明治二十五年以後である。全年の十一月日本吉佐移民會社なるものが、先づ五〇人の契約移民を送り、翌年は更に五百二十人を、次いで二十七年には四二五人を夫々契約移民として送り出した。

吉佐移民會社が移民輸送を開始すると、之に倣つて數個の移民會社が設立されて移民を送るに至り、明治二十六年頃には濠洲の邦人は千餘人と云はれてゐたのが明治三十年の頃には二、〇〇〇人以上に及ぶ盛況であつた。

是等の邦人はクインスランド州の砂糖耕地に働くものと、木曜島に於て採貝業に従事するものと二つに大別が出來た。又別に少數の者がメルボルン、シドニーの様な都會地で商業を營み、家僕又は其の他に従事してゐた。かの兼松商店の創立者たる兼松房次郎がシドニーに旗揚げしたのは明治二十三年であつた。

木曜島の邦人の活動は斷然他の外國人の追隨を許さぬものがあつた。明治三十年、同地に於て採貝に従事した邦人は九百人で、之は當時、同島採貝全従業者一、〇〇五人の六割に當つた。而もこの中には勞働者たるの境遇を脱して獨立經營に進んだ者が十數人に及んで居り、明治三十一年六月の現在では、邦人の所有船三二隻を算へられたのである。

こうなると例によつて排日運動が深刻化するのである。濠洲の排日運動は吉佐移民會社が初めて五〇人の契約移民を送つた翌年の明治二十六年にクインスランドの州議員によつて提唱せられ、爾後年々に擴大した。夫で我が日本政府は明治三十年クインスランド及木曜島渡航移民を三禁止したのであるが、翌三十一年十二月には濠洲は「眞珠及海鼠漁業法」を修正して、英國臣民に非ざれば眞珠貝・海鼠漁業船を所有し、借船して獨立營業を爲すことを得ずと禁止して仕舞つた。

明治三十四年七月濠洲聯邦が成り、その立法議會は「移民制限法」を議

決し、翌三十五年一月より實施することにしたので、邦人の濠洲渡航は或る特殊な用向のもの外は一切阻止されることとなつた。

〔濠洲 終〕

新 西 蘭

新西蘭 目次

第一章 地理·歷史

第一節 地理.....二七
第二節 歷史.....二八

第二章 人口·住民及宗教·教育

第一節 人口.....二九
第二節 住民.....二九
第三節 宗教·教育.....三〇

第三章 政治·國防

第一節 政治.....三〇
第二節 國防.....三一

第四章 財政·金融

第一節 財政.....三一
第二節 金融.....三二

第五章 產業

第一節 農業.....三三
第二節 畜產業.....三三
第三節 林業.....三四
第四節 水產業.....三五

第五節 鑛業.....三五
第六節 工業.....三六

第六章 貿易

.....三六

第七章 交通

第一節 陸運.....三七
第二節 海運.....三七
第三節 空運.....三八

第八章 其他

第一節 主要都市.....三九
第二節 文獻目錄.....四〇

新西蘭

第一章 地理・歴史

地理(位置・面積)：地勢：山岳・平野：河川・湖沼・氷河：気象：植物：動物：歴史

第一節 地理

一 位置・面積

新西蘭(ニュージーランド)は濠洲大陸の東南方約千二百哩、南太平洋に於る南・北二大島と数箇の小島嶼より成り、東經一六六度五分より一七九度〇分、南緯三四度三〇分より四七度一〇分に位し、火山多く温泉に恵まれ、山勝ちで急湍をなす河流、繁茂した林相を呈し、風光明媚、氣候も亦一般に温和で、殊に北島の風土は頗る我が日本に似て居る。即ち南北半球を異にするけれども、之を我が國にあてはめるならば、略東京より樺太の中央の位置に相當する。その面積二六九、一九二平方浬(一〇三、九三五平方哩)で、我が國の本土と九州とを合したものでより少し大きい程度である。

然るに人口は一九四〇年に於て一、七一九、三九二人の稀薄さで、その密度は一平方浬當り六人餘に過ぎない。

新西蘭自治領を構成する島嶼を列記すれば次の如くである。

(一) 自治領本土を構成する島嶼

北島及隣接する島嶼	平方浬	平方哩
南島及隣接する島嶼	二四、八七九	四、四二八
スチューワート島及夫に隣接	一〇、四六〇・八七	五、八〇五

新西蘭……地理・歴史

計

(二) 一八四七年の宣言により新西蘭領に編入せられたるもの

外洋諸島

スリーキングス諸島	七、七七	三
オークランド諸島	六〇、六〇	一三、三
キヤンベル島	一、三九	三
アンチポードス諸島	六、二二	一、四
パウンティ諸島	一、三九	一
スネアズ諸島	一、三九	一
ソランダー島	七、五五	一、七

(三) 新西蘭に併合せられた島嶼

カーマデック諸島(一八八七年)	三、三六	一、三
タツク及其他の太平洋諸島(一九〇一年)	二、七五	八
タツク諸島	アイツタキ島	
ラロトンガ島	マウケ(ハリ)島	
マンガイア島	タクテア島	
アテウ島	マニエエ島(ハーベイ諸島)	
ミテアロ島		
タツク諸島以外の諸島嶼		
ニウエ島(又はサウエイジ島)	二、九七	一、一
ラカハンガ島(又はレイアソン島)		

一一八七

バーマート島(又はアバラウ島)
 アガバカ島(又はデンジャ島)
 ペンライン島(又はトンガレバ島)
 スワロー島(又はアンカレ島)
 マニヒキ島(又はハンフレイ島)
 ナツソー島

計 五五〇八
 以上 二六九一・一七五

(四) 委任統治領西部サモア及ナウル島
 國際聯盟の委任條項により現在新西蘭は舊獨逸領西部サモアを統治し、更に英本國政府及濠洲政府と共にナウル島に對して聯盟の委任統治權を保持する。

(五) 南氷洋ロス屬領

一九二三年七月三〇日附英國勅令に依りロス海(南氷洋に在り)の海岸地方及之に隣接する諸島嶼及領土は一八八七年の英國植民地令の英植民地として宣言せられ、爾來ロス屬領(Ross Dependency)と命名された。新西蘭總督はロス屬領知事として同領の行政權を附與されてゐる(無人島)。

(六) ユニオン群島

一九二五年一月四日、ユニオン群島(Union Is. 一名トケラウ群島とも云ふ)はギルバート、エリス兩群島植民地から除外され、新西蘭總督の統治下に置かれ其の後其の權限は西部サモア長官に委任せられることとなつた。

二地 勢

新西蘭の最も著しい特徴は山勝ちであること、主要山骨は南島に於ては北島に於るより高く且つ廣大である。即ち南島の山脈に於ては三千米以上の高峯十六を下らず、其の中クツ

クツ山・タスマン山等は雄峯である。其の比較的高い部分は年中雪を頂き、處に依り美しい氷河すら見られるのである。就中、フランツ・ジョセフ氷河は海拔二百餘米以下に下つて居る。北島に於ては主要山脈は其の高きに於て千八百米を超えることなく、寧ろ東海岸に偏在してゐる。主要山脈の西には三箇の雄大な火山體が高く聳えて居り、更にエグモン火山は北島の南西に於て屹立し、二千五百米に達してゐる。

新西蘭の諸河川は特に山勝ちな南島に於ては急流を成すので、舟運の便よりも寧ろ水力源を得るに好適である。南島に於てウエイカ河と他の若干の河川とは小蒸汽船には航行可能であるが、濠洲の諸河川の如く其の河口が砂堆を以て塞がれてゐる缺點がある。北島の北部に於ては最近沈降のため河口が沈下し、或る物は自然的に優秀な港灣を形成してゐる。

三 山岳・平野

1 山 岳

北島では主山脈はクツク海峡(Cook Strait)に起つて東北に向ひイースト岬(East Cape)に走つてゐる。その長軸に沿つて色々の名稱のものがあるが、その内で最も重要なものはルアヒネ山脈(Ruahine Range)である。

ルアヒネ山脈を越えて島の中央部に、ルアマフ山(Mount Ruapehu)を主峰とする複雑な火山群が存在する。この内で活火山はトンガリ山脈(Tongariro Rg.)のガウルホエ山のみである。西南部には孤立した休火山エグモン山(Mt. Egmont)がある。

西北部では山脈は幾分方向を轉じて西北方に走つてゐる。ハウラキ灣は東のコロマンデル山脈(Coromandel Rg.)と西のガム地方の高い臺地との間の陥没地である。南島は北島よりも一層山勝ちで、山脈は同方向に走り、山脈間の低地を谷が占めてゐる。北島の平行山脈はクツク海峡を越えて、カイコラ

(Kaitiaki)となつて連續する。カイコラ山脈は、南方で島の脊梁山脈の一部を爲すスペンサー山脈(Spencer Rg.)と合し、これより以南は所謂南島アルプスとして知られて居り、一〇、〇〇〇呎を超えるものは一七座以上に及ぶ。島の略中央に最高峯クツク山(Mt. Cook)が聳え、この壯大な山系に沿つてアスハイアリング山(Mt. Aspiring)の如き高峯がある。西南部では山は海岸より屹立し、古い時代の氷河が所謂十三峽灣(Thirteen Sounds)を刻んでゐるが、その内のミルフオード峽灣(Milford Sound)は最も著名である。尙、クツク山の側斜面にはスイスの氷河よりも更に巨大なる大氷河が存してゐる。今、山岳の内著名なものを擧げると次の如くである。

山 岳 名	所在島	海 拔
ルアペフ山	北 島	九、一七五
エグモン山	同	八、二六〇
ガウルホエ山	同	七、五〇〇
クツク山	南 島	一、三九九
アスハイアリング山	同	九、九七五

2 平 野

平野の最大なものは南島カンタベリー平野である。幅三〇哩より六〇哩に及び、長さ百餘哩に及んでゐる。その他南島南端インベルカーギルを中心としてサウランド平野が開け、又ネルソン及西海岸地方にも少々の平野があり、何れも農耕の中心地となつてゐる。

北島はマナワツ河下流、ワイカト河下流、ワカタネ地方、ホウクスベイ地方に平野を見出し得るが、我が國と同じく山國であり平野は少い。

四 河川・湖沼・氷河

1 河 川

山國である新西蘭の河は、我が國の河川の如く水運に不便であるが、南アルプス氷河の水を運び、或は是等の湖沼を経て豊かなる水流を平原に與へ、肥沃なる平野を造り、或は北島に於てはタウポ湖を経て、その下流に偉大なる乳産地を造つてゐるワイカト河の如く、或は水力電氣を起し、即ち夫が爲北島に於ては約七十七萬五千萬力、南島では四百萬力以上が容易に起し得られると計畫されてゐる。次に流域一〇〇哩以上の河川名を掲載すれば左の如くである。(括弧内は流量一秒當り立方呎を示す)

河 川 名	延 長
北 島	
ワイカト (200000立方呎以上)	二二〇
ワンガヌイ (500000立方呎以上)	一四〇
ランギテケイ	一一五
マナワツ (600000立方呎以上)	一〇〇
南 島	
クルーサ (200000立方呎以上)	一一〇
ワイタキ (當國第一の流量河)	一三五
クラレンス	一二五

2 湖 沼

南アルプス連峯の麓に、又北島死火山の噴火口に、幽邃なる山影を反映せる多くの湖沼は、新西蘭の景色を一段と引き立たしめてゐる。その北、南島の主な湖水は次の如くである。

湖沼一覽表

湖沼名	長さ	最大幅員	面積	排水流域	流出水量	海抜	最大水深
北島	二哩	一哩	二哩	一哩	一哩	一哩	一哩
タラウエラ	七哩	六哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ワイカラ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ワイラ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
南島	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ロト	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
プロト	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
カレン	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
コル	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
テカ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ブカ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
オハ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ハカ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ワカ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
マカ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
マナ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
モナ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ハノ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ポウ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
ハテ	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩
エス	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩	一哩

3 氷河

新西蘭は南島に山脈系と密接して大きな氷河系をもつてゐる。氷河の中最大のものはタスマン氷河であつて、同じ程度の大きさの他の氷河と共にクック山周囲の高地に源を發してゐる。

この氷河は山脈の東斜面を流下して延長一八哩、幅員二哩に達する。東斜面に懸つてゐる他の氷河、例へばマリチソン(一一哩)、ミユツラ(八哩)、ゴットレイ(八哩)及フツカー(七哩)等の氷河と共に其の流下速度は緩慢であつて、末端面は凡そ二、〇〇〇呎以上の高さである。山脈の西斜面に於ては、降雪量多きために氷河も無数に發達して比較的低い處まで流下して來てゐるが、東斜面に比して傾斜が急であるから流下速度も一層早くなつてゐる。その中最大のものはフォックス氷河とメラッ・ジョセフ氷河で、前者は延長九哩、後者は八哩、末端面の高さは夫々六七〇呎及六九〇呎である。

これらの氷河は灌溉や水力電氣になる河川の源流をなしてをり、而して斷えず一定の水量を供給し得ることに於て非常に貢獻を爲してゐる。

五 氣象

1 概要

一般的に氣候は冷温帶的の海洋的で均等に温和である。北部は地中海地方と同緯度であるが、海洋の影響を享け典型的な地中海的氣候ではなく

氣象關係統計表

一、月平均降雨量

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
マリ・ア・ファン・デ・メーン岬	一七	二八	三〇	三六	四三	四九	五五	五九	五三	四七	三九	三〇	三六
オトリクランド	二七	三〇	三〇	三三	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五
ロトル	二七	三〇	三〇	三三	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五

冬季は著しく多雨であり、氣温は華氏五十度乃至七十度間に在る。ダネデインの氣温は南島の比較的寒い部分の代表的なもので、六十二度乃至四十五度間に在る。卓越風は西風で東側が常に比較的乾燥地帯となり、幾分大陸的である。クライストチャーチに於ては氣温の較差は二十度であつて、霜は九箇月間も續き夏は九十度にも昇るのが普通である。

2 雨量・氣温及日照時間

國土甚だ狭小なるために大陸型氣候の特徴は、寧ろどちらかといへば南島の内陸に於て強く發達してゐる。山脈は風の流れをつき崩し、種々の高度に在る空氣を混ぜ合はせることによつて、空氣の成層が夫々異つた密度の層に分れるのを阻止する傾向がある。その結果廣範圍に亘る濃密な雲層の現れることは甚だ稀である。それ故に新西蘭は高度の日照を享受してゐるのであるが、この日照といふことは高い降雨量と共に一國の氣候にとつて極めて重要な要素をなすものである。

四圍を環る大洋の重要な潮流は南西から北東に流れてゐる。然し南島の西岸を離れた所で潮流は二つに分れ、一つの支流は南方に轉回してフオーボ海峡に至り、今一つはクック海峡を通過して本土の北端を環つてゐる。北部と南部の氣候上の距離がどちらかといへば僅少なものは、恐らくはこの潮流の關係によるものであると考へられる。

ト ラ ガ 海
リバースデー・イ
ングルウツド
ナ ビ
ワイタタピア・パルス
デットン・マスター
トン附近
ウ・エリントン
ネ・ル
マ・シエラ・マ
レンハイム
ハ・ン
ホ・キ
ク・ライストチヤ
ビル・フイレス
オ・ア
ク・ラ
ダ・ネ
インバーカ
イ・ジ

二、平均降雨日数表

Table with 12 columns (months) and 20 rows (locations). Values represent average rainfall days per month.

地 名
オ・ク
ニ
ナ
ウ
マ
レ
ホ
ク
ダ
ハ

Table with 12 columns (months) and 10 rows (locations). Values represent average rainfall days per month.

三、海平面として見たる平均気温

気温単位

地 名
ワ
オ
ロ
ニ
タ
マ
ウ
ネ
ホ
ク
ダ
イ

Table with 12 columns (months) and 15 rows (locations). Values represent average temperature in degrees Celsius.

四、日照時間

観 測 所
オ
タ
ロ
ニ
ナ
ウ
ホ
ク
レ

Table with 12 columns (months) and 10 rows (locations). Values represent average sunshine hours per month.

鳥や食火鶏に比べて遙に小さく、嘴が長く、鼻孔が嘴の基になく先端に開口し、立派な後趾を存すること等特に變つてゐる。

キヅイには六種類あり、一種類だけスチュワート (Stewart) 島に産する以外、總て新西蘭島に棲息する。ケア一本島は新西蘭南島に産するオリブ色をした大形の鸚鵡である。元來果實を食してゐたが、綿羊が飼養されるやうになつてから羊の背に乗つて、其の鋭い嘴で羊の肉や脂肪を食ひ、之が爲同地の牧羊業の大敵となつた。

Heterosia gouldi 黒色の小鳥で、尾の先端が白く、嘴の兩側に九官鳥に見るやうな橙黄色の肉垂がある。此の鳥の雄は、キツツキと同じやうに楔形をした鋭い嘴を有し、之で樹幹に孔を穿つ。食物は啄木鳥類と同様樹幹中に潜在する昆蟲幼蟲である。

其他一海鳥としては鶴及ペンギンが住んでゐるが、ペンギンは世界に分布された本家ではないかと考へられてゐる。

尙絶滅種として最も有名なモア (Moa) が在り駝鳥より遙に最大であると、或はタカ (*Notornis hochsteteri*) と稱せられる鳥は一八九八年最後に採集されたものであると言はれる。その前年に捕獲された標本はロンドンで一一〇磅の高價に賣却され、今日ドレスデンの博物館に所蔵されてある。肥蟲類ではツアタラ (*Sphenodon punctatus*) と稱する數尺位のトカゲの大きなものが南島北部の島に住んでゐるが、南洋の島で捕獲される様な大きなものではない。

第二節 歴史

1 初期の歴史

十七世紀以前の新西蘭の歴史は神話と傳説とに包まれてゐる。一六四二年ヨーロッパ人が此の地を發見した時に、既にマオリ族と稱するポリネシア種族が居住して居り、此の種族は、その頃よりも數世紀の以前から此の島に據つてゐたことが明かになつてゐるのである。マオリ族は現

代人には一寸想像も出来ない様な大きな二艘の丸木船を作り、それを横に合せて幅廣いものにしたものに乗つて、大擧して南太平洋の荒波を衝いて巧妙な航海術と月と星とによつて、天候と方向とを確めて航海を續けたものと考へられる。

何時頃このマオリ族が新西蘭を發見し、如何なる場所から上陸したか又その當時に先住民があつたか、若しあつたとすればその民族はどうなつたかは、現在では唯傳説として知られてゐるに過ぎない、文字の無かつた民族のこととして過去の一切は、不明の裡に葬り去られてゐるのである。

マオリ族其のものゝ起原に關してもポリネシア族の一般的傳説以外何等の記録もない。その傳説によると西方から東方に恐らくはマレイシアを経て太平洋に逐次移住したことを示してゐるようである。即ち數時代前マオリ族はハワイキと稱する國に居住してゐたが、其の酋長の一人が永い間の航海の後に新西蘭の北部の島嶼に到着した。この酋長が故郷に歸つて新しく發見した土地を賞め稱へたため、多數の親族及友人屬丁が例の獨木舟に乗つてこの新しい土地に移住して來たのだと傳へられてゐる。然し、その傳説の地ハワイキの地位は判明してゐない。このマオリ族は、東部太平洋諸島の共通語となつてゐるポリネシア語を殆ど純粹に話してゐるといはれる。

2 歐洲人による發見

オランダ東印度會社の航海者アベル・ヤンズゾーン・タスマンは一六四二年一月三日新西蘭を發見した。タスマンは一六四二年八月一日ヨットに乗つてパタゴニアを出發し、モリシア島を訪れタスマニア島を發見した後、尙も東方に向ひ、新西蘭南島の西海岸を認めながら、足を踏み入れずに去つた。

このタスマンの去つた後に最初に足を本土に踏み入れたのは英人クックであつた。クックはヤング・ニックス・ヘッド (Young Nick's Head) なる地點に於て一七六九年一月六日陸地を認め、同月八日ホイバディ

灣へ投錨した。而して彼は北島・南島を周航して一七七〇年三月濠洲に向ひ出發した。其の他數名の探險家達が、十八世紀の後半に入つて續々とこの新西蘭を訪れてゐる。

3 移住及植民

航海者は續々とこの島を訪れて來るやうになつたが、實際にこの島に歐洲人が滞留するやうになつたのは一七九二年であつて、それはブリタニア號に乗つてやつて來たキャプテン・ラーベンで、南島の西海岸フアシル港に錨虎捕獲隊を上陸させて活躍させたのである。其の後數年間に海岸の數地點に捕鯨根據地が建設され、一八一四年には宣教師ハル及ケンタルの兩名が來島した。これが起因となつて、濠洲のニューサウスウェールズとの交渉が始まり、同年一月十九日には、同政府所屬の布教師サミュエル・マースデン等が來島するに至つた。而してアイランズ灣でに最初の布教所を設けた。

一八二五年新西蘭の各所で夫々單獨に植民地建設の企てが三度も試みられたのであつたが悉く不成功に終り、其の後數年間は植民地としては僅に主要捕鯨根據地の周圍に若干のものがあるに過ぎず大半のものは奥地に入つて原住民の女と結婚して了つた。

明確な植民計畫の下に於る第一回の移民團は一八四〇年一月二二日にポート・ニコルソンに到着してウエリントン町を建設した。其の後の數年間にネルソン、タラナキ、オタゴ及カンタベリーの植民地が英本國の各種團體から送られ來つた移民によつて建設された。

政廳の所在地となつたオークランドは一八四〇年に主として濠洲及新西蘭の他の地方のもの、それに英本國から直接に移住し來つたもの等によつて建設されるに至つた。

4 英國主權の確立

新西蘭に英國駐在官の任命を見たのは一八三三年のことであつて、本部はアイランズ灣のコロラレカ (現今のラッセル附近) にあつた。その七年後の一八四〇年一月二九日海軍大佐ウィリアム・ホブソンはアイラン

ズ灣に到着し原住民の同意を得て新西蘭諸島にウイクトリア女王の主權を宣言し、其の政務を掌握するの權能を附與せられた。ホブソンは一八四〇年一月三日コロラレカに於て正式に其の任務を讀み上げ、同年二月六日にウイタング條約と稱する契約を締結し、斯くて主權に伴ふ一切の權利及權能をウイクトリア女王に讓渡せしめ、酋長及種族に對しては一切の領土的權利を確保した。本條約は初め四十六人の酋長により署名せられたが國內の各所に廻付され他の酋長により署名せられた。斯くて六箇月足らずの間に五百十二の署名が附せられた。

然るにホブソンは土地の買込みを策し、一私設會社たるニュージョージランド會社なるものを設立して、土地を買込んで移民に分與せんとしたのであつたが、移民は續々と入國し土地の分與を迫り、又マオリ人 (原住民) と前記ニュージョージランド會社との間にも抗争が激しくなり、事態は收拾の出來ぬ混亂に陥つた。大體に於てマオリ人には土地私有の考へはなく土地の占有は戰勝による他知らなかつたのであるし、緯度や經度で土地を買収するといふやうな對しては不安が甚しく、何處が境かも不明なので多くの問題を生ずるに至つた。

一八四四年頃から一八四八年間は、實にマオリと白人間の戰國時代であり、多くの血腥い事件が續々と起つた。

一八四〇年五月二日ホブソンは北島の場合にはウイタング條約により、又南島及スチュワート島の場合には發見の權利に依り、英國の主權を宣言した。南島に於て條約が署名せられることになると、パンバリー少佐は一八四〇年六月十七日クラウディ灣に於てマオリ族の同意を得て、同島に英國の主權を確立する旨の正式の宣言を爲した。

かくて、新西蘭は一八四〇年五月三日迄濠洲ニューサウスウェールズの屬領であつたが、同日一八四〇年十一月十六日附の王室憲章により別個の植民地として創設せられた。

第二章 人口・住民及宗教・教育

人口・住民・宗教・教育

第一節 人口

1 概要

一九三六年三月に行はれた國勢調査によると、新西蘭本土の全人口数は一、五八七、二二一人で、屬領諸島の五五、九四六人を合せると一、六六〇、一七三人であつた(但しロス屬領は無入島である)。此の内訳を示すと次の如くである。

地域	男子	女子	總數
新西蘭本土 (マオリ族を除く)	781,121	760,268	1,541,389
同マオリ族	83,900	80,782	164,682
小計	865,021	841,050	1,706,071
カーマデック群島	7	1	8
クック群島及ナイウエ島	8,377	7,933	16,310
トケラウ群島	568	603	1,171
西部サモア委任統治領	5,546	5,546	11,092
小計	14,498	14,023	28,521
總計	879,519	855,073	1,734,592

近年に於る平均死亡率は千人に付九・二四人である。一九三〇―三四年の五箇年間に於る平均出生率は生存者千人に付一七・五の割合であり、同期間に於る平均死亡率は八・三の割合であつた。一九三四年に於る出生率は千人に付一六・五、同年に於る死亡率は五・八であつた。新西蘭に於る幼児死亡率は世界中の最低位で、五箇年の平均幼児死

日調査に依る)では九人、南島(同調査に依る)では四人となつて居り、而して新西蘭(本土)一九三九年一月一日調査に依れば六人となつてゐる。次に出生増加率は嘗て華かであつたが、最近に至つては甚だしく低減してゐる。死亡率の甚だ少ない新西蘭に於て増加すべき筈であるが、極端な産兒制限の結果人口が増加しないのであつて、現在ではこの傾向が著しく大なる社會問題であり、國家の問題となつてゐる。この出生増加率は世界に於て約中等の位置にあり、フランスの一・一、獨逸の四・八等と比ぶべきもないが、首位に近い我が國の一・三・六よりも遙に下位にある事は勿論である。

人口自然増加數 (人口千人當り)

年次	増加數	年次	増加數
一九〇一―一〇五	一六六九	一九二一―一二五	一三六〇
一九〇六―一〇	一七三三	一九二六―三〇	一一二四
一九一―一五	一六七六	一九三一―三五	八七三
一九一六―二〇	一三九九	一九三六―三九	八四七

2 移民

移民に關しては所謂ホワイト・オーストラリアと同主義であつて、勿論日本人の移民は許されないし、英國の移民よりなつた所であり、英國の領土であり乍ら、英國の労働者ですら自由に入國出来ない状態である。移民條項は複雑で難かしいが、大體に於て白人なれば新西蘭人の新西蘭内部に於る職業に對する保證があれば、當局が移民を許可する方針になつてゐるが、その數は最近に至つては減少してゐる。兎角有色人種に對する排斥は益々ならぬものがある事は事實である。以下その状況を概説することとする。

支那人に對しては一八六〇年代の末期から既に排斥運動が起り、一八

新西蘭 人口・住民及宗教・教育

亡率は出生千人に對し三・三であるが、之は、氣候、民族の生存力、大企業の比較的に少いこと、並に立法上及教育上の施設が適切であることによるものと考へられる。

歐洲人の植民は一八四〇年のウエリントン部落建設に其の端を發し、一八六〇年のゴールド・ラッシュを以て急激に増加した。爾來移民の渡來と自然増加に依て人口も次第に増大し、最近一九四〇年度の統計(New Zealand Official Year-Book 1941)では次の通りである。新西蘭の全人口は合計一、七一九、三九二人で、その中マオリ族の數は九〇、九八〇人である。其の内訳は左の如くである。

新西蘭本土	男子	女子	總計
マオリ	781,121	760,268	1,541,389
ケルマデック、クック及ニウ、トケラウ諸島、西部サモア委任統治領	83,900	80,782	164,682
總人口	865,021	841,050	1,706,071

この分布状態即ち一九三七年四月一日調査に基けば、北島では一、〇三一、二七六六人、南島に於ては五五、四、七二五人であるから、北島は南島の凡そ二倍に近い。然るに面積上より言へば南島の方が大きいのであるから、北島の方が人口は稠密と云ふことになる。次に各都市に於る人口數を述べれば、北島の北のオークランドが新西蘭第一で二一七、三〇〇人、同じく南の首府ウエリントンが一五四、四〇〇人、次が南島中央のクライストチャーチが一三四、一〇〇人、同じく南のダネディンは八二、五〇〇人であつて、その次に來る都會は二萬人臺となつてゐる。即ち南島南端のインペルカール、北島のパーマーストーン、ノース、ワンガマイ、ハミルトンの四つ、一萬人以上二萬人迄の都會は次の六つとなつてゐる。即ち北島ではギズボン、ネビ、ヘスチング、ニュープリマウス、南島ではネルソンとチマルである。新西蘭に於るこの人口を一方に換算すれば北島(一九三七年四月

八一年制限法が議會を通過し、其の後歐洲に於て排斥禁が甚まり、衆國も亦移民制限に關する條約を締結したので、新西蘭當局は殊に是等の地方から支那移民の殺到し來らんとを恐れた。

其の後幾多の曲折を経て、一八九九年遂に南アフリカのナダル法に範を採つた移民制限法が成立した。殊に支那人に對しては語學試験の他百磅の入國人頭税を課し、支那人を搭載した入港船舶は二百噸に付一人以上になることを許さない旨が規定されてゐる。

斯くして今日制限的指定移民法が實施され、政府は之に依て請願された移民を査定してゐる。

但し日本人に對しては指定が無いため移民入國は皆無である。茲に於て我が國との將來の問題が残されてゐる譯である(但し最近に至つては貿易や商業に従事する目的なれば、一定期間定住を許可される事になつてゐる)。

新西蘭が幾多の資源を保有し、白人よりも寧ろ有色人ら一層適應したる廣大なる空間を保持し、是等が吾人待つてゐるにも拘らず不合理な規定があり、我が物資の流入を阻止し、又は利己的政策を以て我が同胞の移住を峻拒してゐる事實は、畢竟新西蘭に於る移民政策が明かに我々有色人に對する挑戦を物語つてゐるものと思考される。

茲に於てこの排斥こそ我々日本人の爲さねばならぬ、又日本人に課せられた天の使命であると言はねばならぬ。

第二節 住民

一 住民

この島の先住民はマオリ族と呼ばれ、十二世紀の中頃タヒチ島から移住したものと云はれ、精悍勇猛であり又人墨を施す習慣がある。そのタブー・習慣は社會學民族學の貴重な研究問題となつてゐる。

一體このマオリと言ふ意味は「光の子」といふことで、今は其の風俗も非常に異つてゐるが、固有の風俗は男子にあつては髪を結び鳥の羽等をさして飾りとし、又鯨の骨で作つた櫛をさしてゐる。耳飾は美麗な緑色の玉を以て作り、頸にもチキといふ目の大きい頭の曲つた緑玉製の人形を懸けてゐる。其の人形の目は赤い顔料又は青貝を以て飾つてゐる。而して男はアマエリを以て編んだものを着てゐる。

入墨は元來顔の裝飾であるが、或は屋上に戸主の入墨を模した木偶を掲げて、標札の代用とし、或は外人との取引證書に契約者自身の入墨を描いて實印の用をなすことがある。近來は宣教師等が之を禁ずる方針を採つてゐる故に、全く入墨をしてゐない者もあり、又時として面白いことには半分入墨して止めてゐる者もある。女は髪を結ばず、入墨は唯だ口の周圍と頸にしてゐるだけである。

今日に於るマオリ人の位置は高く見られ英人らしく生活してゐる。即ち彼等も一英市民としての義務を持ち、學校も小學校・中學校・女學校もあり、白人と同じく大學にも行く資格を持つてゐる。現在では生活の安易なためか好戰的な氣分も少く、非常に呑氣な氣風を有してゐる。其の人口も一時漸減の傾向を辿つてゐたが、現在より二十年前より政府の政策よろしく、その数は増加し一九三九年度には約八六、〇〇〇人となつてゐる。

第三節 宗教・教育

一 宗教

この國の殆どが基督教徒であり如何なる村にも教會が存在すること、我が國に於て寺の存在するのと同様である。

オークランド、ウエリントン、クライストチャーチ、ダネデンには各本山ともいふべき立派な教會やドームのある舊教會のある事も、我が國の場合によく似てゐる。

基督教の中、英國聖公會系がその四二%の信者を有し、クライストチャーチが總本山の位置にあり、スコットランド系のプレスビテリアン教會は二四%で、ダネデンが本山、ローマカトリックは一三%、メソヂストは約一〇%となつてゐるが、近頃はクリスチャン・サイエンス信者も相當な位置を占めつゝある。

宗教で注意されることはマオリの宗教で、自然崇拜的な昔のマオリの全部が、現在では基督教徒となつてゐる。

茲に於て英國の植民政策上如何に彼等に對しても宗教の力に訴へてゐるかを窺はれるであらう。

二 教育

この國の教育は極めて行届いてゐる。移民最初の年に移民の子供に學校を開き、間もなくマオリ人のために傳道師が學校を開いて教育に努め、移民開始後二〇年にして已に立派な大學を持つ様になつた歴史は、如何に新西蘭の人々が教育に意を注いだかを證明すると共に、今日の新西蘭人の教育程度の高い事も推察せしめる。

1 小學校

官立の小學校は一九三九年度には全國に二、三〇校、生徒數二〇五、〇六六人其の他にマオリの小學校及傳道師に經營されてゐるもの三〇六校、生徒數二七、九三一人である。

教員は官立小學校には六、二六人で、女子教員が多く男子教員對女子教員の割合は一〇〇對一四八で、生徒數に對する教員數は約三二人餘一人である。

2 中等學校

中學校・女學校は、實業學校(農・商・工業等を含む)の一部を除いて男女共學學校は少い。中等學校(マオリ學校・實業學校を含む)は全部で二、二九校で、生徒數は三八、〇六五人、先生數は一、五一七人である。

3 大學

大學は新西蘭には一つの公立大學、即ち新西蘭大學が存在するのみで

める。

本學はウエリントンにあつて、オークランドのオークランド大學、ウエリントンのウイクトリア大學、クライストチャーチのキャンタベリー大學、ダネデンのオタゴ大學の各綜合大學とクライストチャーチ郊外リッソンのキャンタベリー農科大學と、パーマストン・ノースのマーシ農科大學よりなつてゐる。

總學生數は一九三九年度に於ては五、九七九人で、中三分の一は女性の占める處である。

教授及講師數はオタゴ大學―教授二七名、講師及助講師八一名、キャンタベリー大學―教授一七名、講師及助講師四四名、オークランド大學―教授一五名、講師及助講師三九名、ウイクトリア大學―教授一四名、講師及助講師二〇名、キャンタベリー農科大學―教授二名、講師一〇名、マーシ農科大學―教授二名、講師及助講師二〇名である。

3 統計

公債による教育費表

年 度	公債による 出 入	平均人口一人 當りの歳出
一九三六	三二、五七	四、一七
一九三七	三九、七六	五、〇四
一九三八	四六、九	五、二一
一九三九	五二、〇	六、三四
一九四〇	五五、三三	六、八一

小學校學校・児童數表

地 區	一九三九年 末現在 學校數	一九三六 一九三七 一九三八 一九三九 一九四〇	各年度末現在児童數
オークランド	六八〇	六七三、七四	六七三、三三
ウエリントン	一五五	一五七、七五	一五七、〇二
クライストチャーチ	一五五	一五七、七五	一五七、〇二
ダネデン	一五五	一五七、七五	一五七、〇二
マーシ	一五五	一五七、七五	一五七、〇二

新西蘭の人口・住民及宗教・教育

中等學校生徒數表

年 度	中等 學校	合同 學校	地方 中等 學校	工業 學校	マオリ 中等 學校	私立 中等 學校	計
一九三五	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三六	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三七	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三八	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三九	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九四〇	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三

中等學校生徒數表

年 度	中等 學校	合同 學校	地方 中等 學校	工業 學校	マオリ 中等 學校	私立 中等 學校	計
一九三五	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三六	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三七	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三八	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九三九	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三
一九四〇	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三	一、九三

新西蘭 人口・住民及宗教・教育

中等學校教員數表

年 度	中等學校		地方高等 中學校		工業學校		合同學校		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
一九三〇	三三三	三〇五	一六三	一一〇	二九三	一五八	八〇	五五	一,一五七
一九三三	三三三	二九二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九三六	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九三九	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九四二	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九四五	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九四八	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九五一	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九五四	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九五七	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三
一九六〇	三三三	二八二	一四六	一〇二	二六六	一五四	七七	五三	一,〇六三

大學學生數表

年 度	講義に出席 する學生數		講義免除 の學生數		計
	男	女	男	女	
一九三〇	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九三三	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九三六	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九三九	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九四二	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九四五	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九四八	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九五一	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九五四	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九五七	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九
一九六〇	四〇	〇	一〇九	一〇九	一四九

給費學生數表

年 度	大學初級 タラナキ 獎學金		大學後 期獎學 金		大學 給費		師範學 校獎學 金		其 他		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
一九三〇	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九三三	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九三六	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九三九	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九四二	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九四五	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九四八	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九五一	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九五四	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九五七	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四
一九六〇	一〇八	一〇八	三	三	三三	三三	二五	二五	一一	一一	一,一〇四

一九三〇	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九三三	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九三六	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九三九	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九四二	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九四五	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九四八	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九五一	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九五四	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九五七	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
一九六〇	一一一	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九

第三章 政治・國防

政治・國防

第一節 政 治

一 概 要

新西蘭は、濠洲ニューサウスウエールズ州より獨立後、英國の植民地として英本國の任命せる知事 (Governor) が之を統治し、其の下に知事の指名にかゝる行政會議 (Executive Council) 及立法會議 (Legislative Council) が設けられた。此の制度は一八四七年迄繼續せられたが、一八五二年に至り初めて新西蘭植民地に代議制度を賦與すべき法律が英本國議會を通過し、翌五三年新西蘭に實施せられた。此の法律により立法院 (Legislative Council) 上院に相當する) 及代議院 (House of Representative) 下院に相當する) より成る一般總會 (General Assembly) 一議會に相當する) が設けられることとなり、其の第一回總會は一八五四年に開會された。當時行政部の委員即ち政府の大任は、議會即ち總會に對して責任を負はなかつたのであるが、一八五六年に至り議會に議席を有する大臣の任命を見るに至つた。

一九〇七年新西蘭植民地 (Colony of New Zealand) の名稱が新西蘭自治領 (Dominion of New Zealand) と改められ、更に一九一七年に至つて知事 (Governor and Commander-in-Chief) の地位は總督 (Governor-General and Commander-in-Chief) に昇格せられるに至つた。

二 統治組織

現今に於る新西蘭自治領の地位は、一九三一年一月一日附英國ウエストミンスター法の規定する所によつて定まり、右によつて新西蘭及他の自治領は英本國と略對等の地位を認められることになつた。

中央行政—現在に總督の下に英國流の議會政治が行はれてゐる。政府は之を行政院 (Executive Council) と稱し總督及一三名の大臣より成り、議會 (Parliament) は上院 (Legislative Council) 及下院 (House of Representative) より成つてゐる。總督は英國皇帝を代表し、其の公の行為は總て大臣の輔弼に従ふを要するのである。

上院は、現今三七名の議員より成り任期は七年、衆議院は議員八〇名 (内四名のマオリ人議員を含む) で、任期は三年である。而して下院に絶對多數を占むる政黨が内閣を組織することは英國と同様である。

尙選舉制度は成年普通選舉で女子も選舉權を有してゐる。立法—總督及上下兩院の議會に屬し、總督は議案の承認諾否、保留の權限及議會の召集・停會・解散の權限を有し、同時に軍司令官を兼任する。任期五年、現總督は空軍元帥ニューオールである。

現在下院の勢力關係は一九三八年一〇月の總選舉の結果、労働黨五二名、國民黨二四名、中立四名である。

行政—總督は内閣の輔佐によつて行政權を執行する。内閣は總督の指令により下院の多數黨の首領によつて組織され、議會に對し責任を負ふ。大臣の數は通例一〇名内外、現首相はフレージャーである。

司法—全國に一〇名の最高法院判事及三〇名の治安判事が任命され、且つ多數の裁判所並に治安裁判所が設けられてゐる。

地方行政—地方は以前九州 (Province) に分たれ、各々に地方政府があつたが、其の後州制は廢され、現在は此の區劃に政治的・法制的の意味は無い。單に地理的區劃として統計を表示する場合よく用ひられる。實際に地方政治を行ふのは一二九の縣 (County) 及一二八の市 (Borough—縣から獨立す) それに三四の特別町 (Independent Town) 其他英國流の自治制に依つて營造物とサービスを中心とした多數の自治體 (Local Authorities) である。

統計—

新西蘭...政治・國防

受刑者數表 (各年二月末日現在)

年次	刑務所内の人數		人口千人に對する割合	
	刑執行中の者	召喚中、又は審理を待ちつゝある者	刑執行中の者	留置者全部
一九三三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九三九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九四九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九五九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九六九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九七九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九八九	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九〇	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九一	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九二	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九三	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九四	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九五	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九六	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九七	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九八	二二九	一三六	七六九	一七九三
一九九九	二二九	一三六	七六九	一七九三
二〇〇〇	二二九	一三六	七六九	一七九三

受刑者刑期別調表 (各年二月末日現在)

年次	重・輕・懲役		常習犯		計
	三箇月以上一年未満	一年以上	改換せしむる爲の投獄	ボリスタル協會に拘留せられたる者	
一九三三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九三九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九四九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九五九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九六九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九七九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九八九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九一	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九二	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九三	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九四	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九五	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九六	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九七	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九八	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
一九九九	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六
二〇〇〇	六八	一五〇	二七六	一九三	一、二二六

三政 黨

1 概要

新西蘭に於て嘗て英國の如く自由黨・保守黨が相對立して兩政黨間に於て交互に政權の授受をしてゐた。保守黨は一八七六年より一八九〇年に至る間、サー・ハリ・アトキンソン其他の首領の下に内閣を組織したが、一八九一年以來は政權を自由黨に譲つて爾後其の勢威は振はなくなつた。一九〇三年マツセーが首領となつてからトリー黨乃至は保守黨といふ様な名稱は動もすれば國民の誤解を招く恐れありとして、其の名を今日のリフォーム黨(革新黨)に改めた。

自由黨は一八九一年政權を獲得して以來一九一二年に至る迄政權を占め、ベランス、セツドン、ホール、サー・ジョセフ・ワード、マツケンジー等相次いで總理の印綬を帯びたが、一九一二年に至つてリフォーム黨に政權を譲り首領マツセーは苦節二二年の後、政權を獲得した。其の後第一次世界大戦中、學國一致の聲に促され、所謂國民内閣が組織せられ、自由黨よりも首領サー・ジョセフ・ワード其他の之に参加したものであるが、大戦終了と共に一九一九年自由黨員が脱退し、再び純然たるリフォーム黨内閣に還り、以後一九二二年及一九二五年兩度の總選挙に於て相次いで勝利を占め、一九二八年末の總選挙に至る迄前後一六年間の永きに亘つてリフォーム黨は政權を持続した。一九二八年に至つて新西蘭政界に一大轉換期を劃する事態が現はれ

た。それは労働黨の擡頭である。新西蘭政界に労働黨の出現したのは二十世紀以後のことに屬し、一九一一年の總選挙に於て僅に三名の議員を議會に送つたに過ぎなかつたのが、爾來總選挙毎に其の勢力を増し、遂に一九二八年の總選挙に當つてはリフォーム黨並に統一黨の間に介在しキヤスチング・ヴォートを押握る迄黨勢を獲得する迄に至つた。労働黨の擡頭と共に既成政黨の分野にも變化を生ずるに至つた。それはユナイテッド黨(統一黨)の結成で、同黨は一九二七年より二八年に亘り自由黨員とリフォーム黨の一部分子が聯合し、之に労働黨中の右翼を加へ組織せられたもので、自由黨の者宿サー・ジョセフ・ワードを首領とした。

歴史的勝利を博した。即ち労働黨は議席八〇の中五二の絕對多數を得て新西蘭憲政史上始めて労働黨内閣の成立を看したのである。次いで一九三八年一〇月に總選挙があつた結果も労働黨が依然として五二の議席を堅持し、労働黨内閣はフレージャーを總理として戰時對策に執掌してゐる。労働黨が大勝をなし、現に依然として内閣組織を續けてゐる所以を考察するに、一九三五年迄のリフォーム黨、ユナイテッド黨内閣は、緊縮政策及財政均衡實施の爲の増税並に賃金・俸給削減等の執政振りで、漸く一般選挙民に施政の倦意を感せしめ、反對に社會政策的施設殊に失業救済に對する積極的方針並に賃金・俸給の回復断行等を含む盛沢山山政策を掲げた。労働黨は新しきを望む選挙民の嗜好に投ずることとなり、これは健全通貨への正當なる經濟政策的施設が甚しい行詰りに當面してゐた爲に選挙民を納得せしむるを得なかつたからである。

斯くの如く、労働黨の擡頭と統一黨の出現といふ新しい政治情勢の下に行はれた一九二八年の總選挙の結果は、政府黨なるリフォーム黨の不利に展開し、同黨は其の過半数を失ひ、遂に同年末政府の緊急政策に反對した統一黨は、労働黨の支持を得て政權を獲得した。労働黨支持による統一黨の政權保持は其の後一九三二年迄繼續したが、同年統一黨も亦緊縮政策に轉向し、斯くてリフォーム黨との間に政策の一致を來したので、労働黨は斷然其の統一黨支持の態度を放棄し、斯くて統一・リフォーム兩既成政黨の提携を促進した。

3 政綱
現時の新西蘭には労働・國民(統一・リフォーム)の合體したもの(の)の大政黨があり、他に小會派があるが、その勢力は微々として國政に影響しない。

兩黨合同は初めにはリフォーム黨に難色があつたが、労働黨の勢力増大し新しき事態を要求する選挙民の意向を反映して、遂に一九三二年九月二一日合同が成り、聯立内閣の成立を見るに至つた。此の政策は良く時宜に適し、聯立内閣の下に行はれた一九三二年末の總選挙に於てはリフォーム・統一兩黨は一致團結して労働黨を押へ絶對多數を獲得して政權を保持した。

労働黨の政綱
(1) 資源の效用化と國民生活の向上
イ 自治領が包蔵する凡ゆる資源を最大限度に活用すべし
ロ 過去に於る國民黨系政權により萎縮低下せしめられたる生活程度の回復を計るべし
ハ 前兩項の目的達成の爲、生産及労働の繁榮を實現し得る様、國內經濟の組織を改善すべし、右實現の具體的方途の一として差當り左のことを實行す
(2) 酪農業者に對し國內及國外の需要を満足するに足る國産品に關する保障價格の設定
(3) 相當なる生活標準を維持するに足る最低賃金の設定
(4) 但し右は労働に従事する者の特別の組織經驗の價值に従ひ

2 現下に於る政情
統一黨のフォーブス及びリフォーム黨のコーツとの聯立内閣は一九三二年末の總選挙にはよく労働黨を押へて勝利を得たが、其の覇權は何時迄も續かず、一九三六年末の總選挙に於ては遂に一敗地に墮れ、労働黨は

新西蘭...政治・國防

漸進的段階を有すべきこと

- (2) 教育・保健及陶汰の社會政策的改善
 - イ 不具者及不具者家族の扶助
 - ロ 寡婦及其の家族の積極的扶助
 - ハ 國營生命保險を創設し、凡ゆる市民は其の罹病中、醫師の治療を受ける権利をも附與するものとす
 - ニ 滿六十歳を總ての陶汰年齢とし、之に達したるものは勤勞に堪えざる病者・戰傷病者と共に年金を享くるの権利あるものとす
 - ホ 幼稚園より大學に至る凡ゆる程度の教育機關の組織擴充、機能發揮の爲最大の支援を與ふ
- (3) 信用及通貨の國家管理
- (4) 土地開發の國家管理
- (5) 失業救済の組織的積極的なる改善
- (6) 製造工業の繁榮策
- (7) 國際聯盟支授及英帝國內各領土との密接なる關係の増進
- (8) 重税の撤廢

國民黨の政綱

- 1) 緊實財政と豫算平衡
- インフレーション政策の擧げ、國家冗費の節減

- (2) 農・牧業其他個人企業の自由繁榮策
 - イ 金融機關の各種産業資金に對する圓滑なる融資に依る個人企業の助成及不動産會社を政黨的管理外に獨立せしめ、農牧業及其他の産業企業の助長機能を完全に發揮せしむ
 - ロ 政府民間各方面の代表より成る開發委員會の設立に依り、産業企業の改善を圖り土地開發・石油礦業等の諸企業の調査及其の援助に當る
- (3) 失業救済対策
- (4) 國民保護養老扶助政策
- (5) 教育及圖書館制度の改善
- (6) 英帝國各部との協調殊に新西蘭産品の市場開發

四 施政一般

1 實績

新西蘭は國家社會政策を實地に雄々しく施行すること著聞する。一八七二年公共信用局 (Public Trust Office) が設立せられ、その總括的統制に繼起した多くの困難を除去し善處することに非常に役立った。

行政方面では海外貿易や、國內産業や銀行制度の統制に就ての過去の經驗は重要商品の手薄・滞貨を或る限度で調整し得たのである。政府は一八九九年九月英國援助を主要目的とし、その目的達成のため極めて廣汎な權力を國家が掌握するに至つた。議會は進んで政府に對し、人員の徵用、金錢・財産・産業の統制を行ふ權利を與へたのである。原則は物の徵用であつて、是等の廣汎な權限は實際には容易に行使されぬとしても、第一に一切の物が戰時奉仕の犠牲を甘受すること、第二は可能なる限りに於て平常通り社會機能を保護すべしといふに歸するのである。戰爭の最初の段階に於ては英本國に對する全的援助を社會施設及生活水準の維持とを結合した政府の政策は可なり圓滑に運ばれてゐた。然し時を経るにつれて、犠牲が深刻となつて動搖を添へなくせられ、大臣連が屢々民衆に對し警告せねばならぬ様になつた。民衆の購買力と一般消費物資の供給との關係が限界點に迫つた。購買力は全般的の高水準・社會施設・公共事業費・戦費によつて維持された。それと同時に輸入品の供給は追々に中斷さるゝに至つた。輸入品の價格は著しく昂騰し、戰爭勃發以來二七%向上したといはれる。

2 今次大戰後の施政

新西蘭と濠洲とは相携へて英國に軍事的の奉仕を爲すべき責務を負うて居るのであるが、總じて新西蘭の貢獻は裝備といふよりも寧ろ人員そのもの即ち其の人的資源にあつた。現に新西蘭は毎年三千名以上の熟練航空員の送派を英本國より要請されてゐるのであり、又既に一箇師團の遠征軍と或る種の特務部隊をも提供したのである。前大戰に於ては一〇萬人を出征せしめたのであるが、この數は當時の人口一五〇萬前後に對して大きな數字であつた。

如上新西蘭の今次大戰に對する一番大きな寄與は、兵員補給に次いで食料及原料品、主として羊毛及肉類を供給することにあるのであるが、

三年前には年金授與省 (Government Annuities) 及官營生命保險局が設けられ、其の後官營火災保險局も設けられた。又官營による電話の使用普及も徹底してゐる。

母體保護や其他の醫務も官營設備で行はれ、一八九八年からは老年者恩給支給も始まつた。

勞働關係法規としては一八七三年の婦人雇傭法がその嚆矢で、同法によると婦人の勞働は一日八時間とせられてゐる。

一八九一年以來は總ゆる工場に關する法規が整へられ、酷使は嚴に禁ぜられ、最低賃金が設定された。其の上に産業調停法や、仲裁裁判法も完備するに至つた。

現時の勞働黨政府は一九三五年に樹立、一九三八年に再選され、廣汎なる社會改良政策の上に立つて施策し、社會主義が依然としてその究極の目的なので、指導者としての意慾も生活水準の向上を目標とし、民衆の購買力を上昇させることを恒久的繁榮の基準としてゐる爲に、その施策及政策は海外の事象を原因として起る生産物價格の崩落を阻止し、自國をその渦巻から護ることに努めてゐた。

勞働黨政府は國家社會主義の傳統と廣範圍に亘る様になつた國家的統制機關を承け繼いだのであるが、而して、それは購買力を引上げるための直接的の企圖ばかりでなく、更に國家統制の大擴張ともなつた。賃金は不況前の水準に復活され、強制調停が勵行せられ、勞働組合に強制加入を強ひられた。かくて公共事業への支出は大幅に膨脹した。

新中央銀行たる新西蘭貯蓄銀行は半官的組織から全部的に國家のものとなり、政府金融の直接手段となつた。

産業活動を統合する手段として政府指導の下に産業能率令が施行され、一九三八年末に金融恐慌が起つた時には、輸入品の交易統制と管理制度の徹底化が施策されることとなつた。

農民に對する保證賃金制度が定まり、酪農産物の販賣に對して或る程度まで政府出資が保證されることとなつた。この統制の結果は全輸入品

第一次歐洲大戰の僅か二年前、英國艦隊「新西蘭分艦隊」建設の手段が最初に採られた。「分艦隊」は新西蘭の水域に駐在し、一部新西蘭兵を乗せ、平時は絶對的に新西蘭政府によつて支配される。練習艦は現存してゐた遠洲艦隊より引繼がれ、當時建造中であつた一定の艦艇を新西蘭海軍に引渡すこととなつた。第一歐洲大戰のためこの分艦隊の編成は阻害され、後に英國分艦隊を維持し、一定の基地設備を行ひ、新西蘭兵を訓練するといふ戦前の計畫が續行されるようになった。艦隊は先づC級巡洋艦より成り、次いでD級、後には第二D級巡洋艦より成立つてゐたが、最近では最新式レアンダー型二隻に置き換へられた。一九二七年シンガポール基地建設のために一百万磅の支出が議決を見た。各種の海軍・陸軍防備計畫に軍備支出は、戦後一般公衆に批難されもした。労働黨の一派は、武力を強く嫌惡し、同黨は常に國民訓練計畫に強く反對してゐた。同黨は又戰略的竝に一般原則的立場からシンガポール基地建設寄附金をも鋭く非難してゐた。一九二六年労働黨の指導者H. E. ホーランドは、シンガポール建設費寄附提案に關し次の如く演説したのである。

「シンガポールに對する労働黨の態度は、全世界を通じての平和維持を欲することを基礎とする。本提案の如きものに反對することにより、我々は世界平和のため、延ては吾人共有の人道のために最善を盡すものであると云ふのが吾人の偽らざる見解である」と。

國防問題に對するこのやうな労働黨の態度は、當時國際聯盟理想の影響を受けてゐた一般の輿論から強い支持を受けてゐた。更に義務的軍数は社會の人氣悪く、雇主は之を厄介物と考へた。一九三〇年の政治的掛引と不況の開始のために義務制が廢止され、骨抜き的な志願兵制度となつたのは當然である。併し、國防法の義務規定が廢止されたのではなくて、不況が各部の全兵器に大幅の緊縮を行はせたのである。未だ生成期にあり、戦時の機材を雑多に蒐集してゐたのみで、一貫した政策のなかつた空軍ともその例に漏れなかつた。

しかし遠洲に模倣した新西蘭海軍は徐々に整備し來つたと云ひ得る。抑々其の創始は一九一三年に形成された。然し乍ら各種の事情一國の小さなこと、英帝國と出来る限り連繫せんとする強き願望、純新西蘭海軍建設に對する不信一により成長は遅れた。従て海軍政策は多年の間全く英帝國の範であつた。

最近に至るまで、ある一派は國防第一線としての海軍の價値を疑問視し、その代りに空軍に依頼すべしと唱へてゐた。英國に於ける海軍對空軍論争の反響に始まつたこの見解は、航空クラブによつて強く支持された。従て労働黨が政權を握つた當座、海軍(及陸軍)は當然に苦境に立つたかの如く見えた。然しながら、昨年再び英國よりの反響に大部分基因して、輿論に變化が起きた。地中海の諸事件、極東戰の戰略に對する評價の改善により、一時的な批評の多くは姿を消した。現實の新西蘭沿岸防備は、海軍と同様に少くとも陸軍及空軍の關心事であるといふ見解は日に益し強くなつて來た。

3 陸軍志願兵制度

前述の如く一九一〇年から一九三〇年まで陸軍は義務徴兵による市民軍であつたが、それ以後は志願兵となつた。一九三七年政府は、部隊数を相當に減少させ、全兵力約八千人を維持する案を發表した。現在では要塞(沿岸防備)隊と、野戦隊とは明瞭に區別され、前者は正規兵員の率も多く訓練も多い。中等學校での士官候補生訓練は繼續されてゐるが、従來程軍事的立場は明瞭でない。概して政府は輿論を率先して指導しつゝあり、また國民軍募集に懸命となつてゐる。機械化の強調、休暇指導と關聯して三箇月の訓練をうけた青年より成る特別準備隊(季節労働者を吸引するやう計畫されてゐる)の創設はある程度成功した。併し、實力は政府及軍當局の欲してゐるほど強くはなつてゐない。が併し政府は國民軍に再び義務制を導入する意志はないようである。政府の政策は、大陸軍の建設にあるのではなくして、必要の際に指導者の獲得し得るところの高能率の軍隊、沿岸防備に備へるに十分な軍隊の建設にある。英

しかし、間もなく國際的事件の壓迫をうけ防備の全問題は再び考慮に上り、一九三四年には三部門の總ては新しく活動を開始した。一九三五年末労働黨の進出により、この發達も阻害されるのではないかと一般に考へられてゐたが、事實は反對だつた。エチオピア事件により、公衆は武力が聯盟誓約の終局の決定となることを可なり一般的に悟るやうになつた。國際關係が緊張するに従ひ、防衛強化は殆ど完全な公衆の賛同下に加速度的に行はれ、一九三七年には労働黨政府でさへ帝國會議に、シンガポール基地の重要性を認めることを通告したのである。

2 海軍の地位

現在の海軍計畫は、一九一二年最初に作られた案——當領は自己の海軍を建設する。しかし實際の艦艇製造は英國に依頼する——の直接發展したのに始まる。巡洋艦隊は排水量七、〇〇〇噸、六吋砲八門を有するレアンダー型二隻(レアンダー及アチルス)より成立ち、當時は殆ど全將校及其他の兵士の約五〇%を英國海軍に仰いでゐた。しかし一九四五年迄に新西蘭兵を一〇%とするこゝになつてゐた。それは一部は長年の政策が定まらなかつたことに基因し、現在では軍隊基幹定員を純然たる新西蘭人にて占めることは不可能に近い。新西蘭人は海軍力を自治領のものとして考へてゐるらしいが、事實はその一部と雖も自治領のものではなかつたのである。しかし最近では形勢に若干の方向轉換が見られ、政策も具體化したら、又海軍への入隊及士官の訓練問題をも解決せんと努めるやうになつた。修理廠を近代化し、デボンポート、オークランドには訓練所及軍需倉庫を再建する手段も採用されるやうになつた。四主要港で四隊の海軍志願隊が編成され、トロール船ワカクラが掃海及對潜水艦訓練用として豫備軍に維持されるやうになつた。

英海軍省と新西蘭海軍局との間には密接なる連繫が行はれ、一般には海軍を新西蘭が支拂を爲す英海軍分隊に過ぎないと見てゐる。今でも「英海軍新西蘭分艦隊」の公式稱號があるのはこの事を立證してゐる譯である。即ち献金の考へ方が他の形をとつて公衆の表白となつてゐるのである。

本國との技術的連繫は非常に密接である。使用されてゐる訓練教本は英國のものとその儘採用したものであり、又長年の間士官は高等訓練のために英國へ送られてゐるのである。

其の後陸軍の平時政策は相當明瞭に定められ、一般に公衆の諒解するところとなつて來た。その役割は特殊の砲・歩兵部隊(要塞隊)をもつて主要港附近を防禦し、外部要塞地域を各種兵器を備へた少數の野戦軍——その主要役割は、要塞防禦の消極的役割とは反對に野戦にある——を以て維持するといふのである。

然しながら、戦時政策が實際に確立したとは認め難い。新西蘭の實際の沿岸をよりよく防備するために野戦軍を擴張する必要のあることは否定出来ない。一師團(少くとも現在の三倍)への擴張が直ちに起ることもあり得る。併し、遠征軍が派遣されるか否かの問題、かかる偶然を斟酌した準備を平時になし得るや否やの問題は現在に至るまで解決されてゐない。事實知られてゐる限りでは、この問題は確實に擱まれてゐない。飽くまで平和に依頼しようといふ點に反對する一般的感情が疑ひもなく存在すると同時に、再び海外に派兵することに對しての反感も程度は低いが存在してゐる。併し若し英帝國が戦争に従事し斯る兵力を要するところが明かなれば、それに備へる計畫が採られるであらうことは確實である。然し、一九一四年の遠征軍派遣計畫は、敵艦の遊弋する海洋を渡るに適當な護送船團なく、内閣の危機を惹起し、軍用船に對する日本軍の保護を俟つて初めて解決したことを忘れてはゐない。若し戦争が起れば護送の困難は以前よりも甚だしいであらうとは考へてゐる。その爲に輸送の困難は、新西蘭遠征軍を海軍及空軍に限定する傾向を強めたのである。

4 新空軍の實情

一九三四年國防問題が復活して始めて、最新式航空機購入の手配がとられ、政策も形成され始めた。一九三四年から三六年に至る間に現在の基地に大量の建設工事が行はれ、飛行場は擴張され、又少數の雷撃機が

購入された。一九三六年英國空軍將校が、空軍に關する報告任務のため新西蘭に貸與された。當時空軍支出を増額し、他部門の支出を減少させた。將校は任に留まり、地上設備には既に相當な進歩の跡が見られる。然し實際に計畫が完成されるまでには今後二、三年を要する實状である。

一九三七年四月一日空軍は陸軍の一部たる地位を脱し、全く獨立的な存在となつた。空軍の基幹は、全然常備兵員の搭乘する近代式長距離飛行隊二隊より成り、戦時に際しては帝國の他部一即ち濠洲一の空軍と協力することが出来る。之は明確な攻撃力を形成する。空の護り第二線は、主要港灣防護を任務とする國民飛行隊によつて備へられてゐる。この目的のために全く地方的防禦に適した飛行機一已にイギリスで若干の飛行を行つた一を使用してゐる。

航空クラブは補助金の代償として、國民飛行隊乗員の初期訓練を大量に行ひ、強力な豫備軍建設に援助を與へんと企圖してゐる。現在正規飛行隊のための二新作飛行場が準備されつゝあり、現存の航空場は訓練學校及國民飛行隊基地として使用されてゐる。

民間航空は別の長官一行政的には空軍と同一の省にあるが、形式的には支配を行ふ航空局のメンバーでないの下にある。之は航空部門内の戰闘・非戰闘分科間の密接な紐帶保持を目指したためである。然し強力なる國防力を維持する戦時政策は未だ決定してゐない。議會に於る空軍法案辯論の演説に於て、國防相は空軍を二隻の巡洋艦と同視して、英國が戰爭に入つた時には、帝國防衛に對する明確な貢獻となるといつた。従て陸軍が海外に派遣せられない場合でも、正規の飛行隊が狀況によつては遠征軍となり得る可能性があると思つてゐるのであつた。

5 高等組織

最近最も進歩したのは、國防一般を支配する組織の改善問題であつた。第一次歐洲大戰までは、新西蘭には僅か一部門即ち陸軍のみしかなく、國防省の稱號を持つ全部門は陸軍より成立つてゐた。戦後分離した

海軍が出来上り、海軍局がこれを支配した。海軍局は同じく國防相に對し責任をもつが、陸軍一國防省の名稱を繼續す一に對しては全く獨立の立場に立つ。確に國防大臣は存在する。然し、彼は獨立した二部門の長官であり、彼を援助する同格の機關はない。第三の獨立部門として空軍が發生するに及び、陸軍を國防省と呼ぶ不合理は更に甚だしくなつた。現在では、海空陸の各部門が各々二乃至三名の職員及部書記官一海軍の場合には支出官、他の場合は文官一より成立つ局の下に立つてゐる。これら三部門共に一大臣の下に立つてゐるが、濠洲の如き單一の行政的國防省を構成する共通の官房なるものはない。行政上からは結合的官房の必要性は疑はしい。然し政策及戦略上ある種の協調の必要なことは明かである。従て現在では三部門の幕僚長は、英國の委員會と同様の基準によつて、幕僚長委員會で意見の開陳を行ふ。委員會は戦略及政策に對する勸告を任務とする。委員會の決議は國防評議會の名稱を持つ機關で熟議される。之は、首相・國防相・藏相・三幕僚長及首相の總裁する省の常任長官國庫主事並に他の大臣・議員その他首相が時に應じて召喚する人物により適當な協調の存在が確められ、政策上の問題にはその適當な考慮が拂はれる。之は英國の帝國國防委員會によく似た諮問機關である。又同時に、國家安全協會といふ名で知られてゐる機關も作られてゐる。之は實際上、國防に影響を及ぼす問題を非常に廣範圍に調査する委員會の集合したものである。即ち單なる武力の範圍も超え、社會生活一般に影響する問題を調査する委員會の集まりである。之は英國國防委員會の副委員會に相當する。國防評議會及國家安全協會のための小官房が首相の管轄する省内に設けられてゐる。

國防費表

年 度	統一基金			公 債	計	人口一人當り費用
	海軍	陸軍	空軍			
一九三〇—三一	五,四三三,八三七	二,七二七,九一九	一,三二八,二二	八,五九〇,〇一八	〇・一・三	
一九三一—三二	四,四四七,六七四	一,八三〇,八一九	一,三二八,二二	七,六〇六,九一六	〇・一・三	
一九三二—三三	四,六二〇,九四四	二,〇七三,七二七	一,三二八,二二	八,〇二二,八九三	〇・一・三	
一九三三—三四	四,九七九,八八四	二,一四七,七二四	一,三二八,二二	八,四五五,八三〇	〇・一・三	
一九三四—三五	五,三二九,四〇〇	二,二一五,六四一	一,三二八,二二	八,八七三,二六三	〇・一・三	
一九三五—三六	五,六三三,四四五	二,二八一,八一	一,三二八,二二	九,二四二,九七八	〇・一・三	
一九三六—三七	六,〇三〇,〇三二	二,三四七,二二五	一,三二八,二二	九,七〇五,四七九	〇・一・三	
一九三七—三八	七,〇〇三,三三九	二,四一三,三三三	一,三二八,二二	一〇,七四四,九〇一	一・一・四	
一九三八—三九	八,〇〇三,三三九	二,四七九,三三三	一,三二八,二二	一〇,八一一,〇〇一	一・一・四	
一九三九—四〇	八,〇〇三,三三九	二,四七九,三三三	一,三二八,二二	一〇,八一一,〇〇一	一・一・四	

(註) (1) シンガポール海軍基地建設寄附金を含む。
(2) 民間航空關係も含む。

第四章 財政・金融

財政(金融(銀行(保險(統計)

第一節 財政

一 概要

新西蘭は國家社會設備の發達した國である爲に、政府は多額の經費を必要とする。従てこの國の税金は他國の比率よりも多額に上つて居り、その税金は純然たる累加税で、且つ國家税であり、地方税はない。

一九三五年度に於る稅收額はこの國の生産品額の約四分の一に達する巨額である。之を一人當りの計算にすれば約一〇磅であるから、我が國の圓に換算して約一八〇圓内外となり、當時の米國の三倍、獨逸の四分の七倍に當つてゐる。その上當國は多額の外債(即ち一九四〇年度には一二、三〇〇萬磅)を有し、之を一人當りに計算すれば一九六磅一五志九片の重責を背負つてゐる。この利子のみでもロンドンでこの國のバタ賣上額の八割に近いものを支拂はねばならぬと云はれるから、税金に加ふるにこの外債の重荷は決して生優しいものではない。

國庫歳出入は左の通りで、就中歳入は税金が主で、稅收額の三分の一は稅關收入に依つてゐる。以下財政年度は何れも三月末日終了年度である。

政府歳出入決算表 (各年三月末日現在)

年次	歳入	歳出	過不足(△)
一九三五	一六、二二六、〇九四	二四、四九九、五九五	一六、二二六、〇九四
一九三六	二六、一七三、三六八	二五、八〇〇、五六八	二、三七三、八〇〇
一九三七	三二、一四七、一七七	三〇、七五五、一五六	一、三九二、〇二一
一九三八	三五、〇五九、四四三	三五、四八八、六一一	一、〇六八、一六八

單位：千磅

二 歳計

歳入内譯表 (各年三月末日現在)

科	目	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇	
課税	登記稅	二五、一三九、〇	二七、一九四、一	二九、〇一〇、四	三〇、八二二、八	
	海關稅	一四、七四八、〇	一六、三七八、八	一六、七八五、〇	一五、九四九、六	
	公債償還基金利息	三、八五八、五	四、六三六、六	三、九二四、六	四、四四五、六	
	鐵道資本債務利息	九、〇三八、八	六、三二七、九	七、〇一〇、六	一、一八九、〇	
	郵便電信資本債務利息	五、六〇〇、〇	五、九〇〇、〇	五、八〇〇、〇	六、三三九、〇	
	其他の公金利息	五、三二四、五	四、五七三、〇	四、四八八、九	六、三三九、〇	
	準備銀行利益	一、〇三〇、二	四、七二四、三	一、九五一、一	二、五〇二、六	
	郵便貯金銀行利益	四、〇〇〇、〇	六、五〇〇、〇	一、九五一、一	一、六六七、五	
	遊覽保養地收益	三、二九八、〇	二、五五、八	二、九二二、九	二、九二二、九	
	遊覽保養地收益	一、〇一八、〇	一、一七九、五	一、一七九、五	一、一七九、五	
	其他地方收入	二、九八八、二	二、九〇九、四	三、一四三、四	三、九五四、九	
	各省收入	五、九七六、七	七、五九七、四	七、七五五、九	七、〇一六、二	
	其他收入	二、四六二、一	二、九六四、五	二、六六九、〇	一、〇〇六、三	
	計		三二、四七二、七	三六、〇五九、四	三六、五八二、四	三七、九四一、五

項目別稅收入額表

單位：千磅

項目	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
關稅收入	八、二六二、二	九、四九三、五	一〇、七五八、七	一〇、六五〇、四	九、九四六、八
其他稅	七、一五〇、四	八、四一五、四	九、〇七三、七	一〇、七六七、九	一三、八八九、九

科目	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
自働車稅	二、二四一、〇〇〇	二、八三三、七一一	三、〇五九、九八八	三、九七七、四四一
地租	四、五八八、三三三	一、〇四七、八七七	一、〇三〇、〇〇〇	一、〇八〇、八〇〇
所得稅	四、五八一、三六八	九、〇七三、七三三	九、三〇三、四九五	一〇、七七一、三五三
相續稅	一、六一五、四七九	一、七五二、三三三	一、八七三、七三三	一、六五八、六四五
銀行戻金	三、三六九、	一、四二八、八	—	—
利子收入	二、七二七、四一	三、四七三、七三	三、九三三、六八	三、七二九、九〇
物品稅	三、七八八、五一	五、〇三三、五五	五、五八八、七四	七、八七四、一八
賭博稅	五、六五〇、七	七、〇五六、四	九、二九三、九	九、六四四、四
玩具稅	四、七三〇、三	五、〇八二、六七	四、四二一、一	五、〇四八、五
其他印刷稅	六、〇六五、七	七、一〇九、九	八、二二七、七	九、三二一、七
借用稅	三、四三三、三	三、四九三、一	三、五五三、九	三、五〇三、〇
販賣稅	一、〇六九、七	一、〇八七、九	一、〇〇一、一	一、一六八、九
金輸出稅	四、三三三、	四、〇七九、九	四、〇七九、九	—
利得稅	五、七	五、八	五、七	—
剩餘金	二、二五五、三九七	二、六九九、三三三	三、一〇〇、三七〇	三、二八〇、八八八

政府經常歳出内譯表

單位：千磅

科目	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
皇室費	二、八四七、三	二、八四七、三	三、〇一三、七	二、七〇三、三
公債	七、六〇〇、四九九	七、六三三、七七一	七、五〇〇、五五五	七、九八二、五〇五
減債基金	一、七〇一、四八七	一、七四三、四三七	一、七四三、四三七	二、一五五、五六八
經營管理費	八、一五五、三三	四、九八八、八	四、〇一一、一	三、三〇〇、六
保證金支拂	二、二五五、〇	七、三九九、九	一、五五五、〇	二、二一一、三
教育費	九、五五五、五	九、九五四、〇	一〇、一七二、一	—
公路費補助金	二、三三三、七三三	二、三三三、七三三	二、三三三、七三三	二、三三三、七三三
地方政府に対するカン	一、五五五、五	一、六三三、七	一、七〇〇、〇	一、八二二、七〇

新西蘭 財政・金融

科	目	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
爲替準備基金(の移讓)	其他	一、四八八、三	一、四八八、三	一、四八八、三	一、四八八、三
	行政費	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	行内	二、七五〇、一	二、七五〇、一	二、七五〇、一	二、七五〇、一
	内務	四、〇八四、九	四、〇八四、九	四、〇八四、九	四、〇八四、九
	關稅	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四
	稅務	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四	一、〇六八、四

一一一五

新西蘭... 財政・金融

工・商務及觀光弘報局	一七六八八	三八五五五	四四四二六	三五〇八八
科 山 學 院	九七五七	一三〇〇七	一五八八五	一五七〇四
運 輸 局	二八八三三	三二〇三二	三三七一六	七四四八五
保 健 局	二八〇八八	六三二一三	八一九九九	八三〇六三
精 神 病 院	九六六四〇	一〇〇九七四	一三三三三七	一五二九三
教 育 局	三三三六六	三三九四四	四七四八三	三〇三三三
年 金 局	三三九三三	三六七七七	四〇九七四	四七一八〇
社 會 救 護 會	五〇七二五	六四六六六	六九三三九	二〇一六八
官 營 互 助 協 會	一一三五四	一一三七八	一一三九五	一一〇〇〇
官 署 工 業 損 失 保 證	一一三五四	一一三七八	一一三九五	一一〇〇〇
其 他 雜 事 業	三六七一	八六六三	九七七〇	一九九八
年 度 費 計	一六五八六	一九六二八	二二四〇一	一九八二二
總 計	三〇六七五	三三三三三	三三三三三	三三三三三

三公債

年 次	公債在 高	一人當り 負擔額
一九三五	二八〇五八	一七九四一
一九三六	二八二五六	一七九〇六
一九三七	二八七六七	一八一四〇
一九三八	二九〇一〇	一八〇一七
一九三九	二九〇七二	一八七一一
一九四〇	三〇〇七二	一九六一九

公債種類内譯表

事項別	計	一人當り
一般	一九二〇	一九四〇
戰事(一九四一)	九五四八	七三二一

公債利子表 (一九三九年三月末日現在)

利率別	滿期債	計
滿期未償還額	一六六五	一六六五
一分二厘五毛	五三三三〇	六六六八七
二分	一〇〇〇〇〇	二二〇〇〇
二分五厘	一一七九九	二九三三三
三分	三三三三三	一七二七七
三分二厘五毛	五〇〇〇〇	一六五五七
三分五厘	二六八八八	一三五八四
三分七厘五毛	三五八八八	一三三三三
四分	一一四七二	二八七九九
四分五厘	一七九一〇	三三三三三
四分九厘	一七九一〇	三三三三三
五分	八三三〇〇	一三三三三
五分五厘	七九〇〇〇	一一一〇〇
計	一四六三三	一七四九七

四 稅 制

收入税や地租税は數倍的に倍加する事は勿論であつて、遺産相続税等も重く二種以上を支拂はねばならぬ事となつてゐる。一は遺産税で、一は相続税である。自動車税の中には自動車税、タイヤ及チューブ等の輸入税、ガソリン一ガロンに六片づゝの税金を含み、主にこの歳入は道路費に用ひられてゐる。その他失業救済税があり、競馬税は賞金の一割、娛樂税は娛樂場への入場料一志六片より二志迄は三片、二志より三志迄は四片、三志六片迄は五片、それ以上は一志毎に一片となつてゐる。販賣税は物品販賣額の

一一六

退 役 軍 人	一一二〇〇〇	四八一〇五	八二九九	二二二八
戰 時 (一九四一)	一四四七八	三〇八六〇	一一二四一	一一二七七
國 營 貸 付	一〇一七〇七	三三三三三	一六三三三	一六三三三
計	二六八四八	一〇八〇〇	一六三三三	一六三三三

公債費途明細表 (二八一九四〇年三月末日現在)

事 項	公債額	事 項	公債額
全 公 債 額	三三三三三	新西蘭銀行株	八七五〇〇
鐵 道	七二四二二	新西蘭準備銀行株	一六三三三
水 力 電 氣	一四一七二	國有開發會社投資	三三〇〇〇
郵 便 電 信	一五九六三	ナウル島、ホシア	二八四四五
公 共 建 物 ・ 學 校	一七九五五	鳥嶺酸鹽業投資	一〇八〇〇
道 路 ・ 公 路	二六四一五	鐵 山 開 發	一〇八〇〇
港 灣 ・ 燈 臺	二一三三七	觀 光 者 慰 安 地	七四六〇
國 有 林 地	二八八八八	移 民	三三三三三
家 屋 開 拓 改 良	二六六八八	軍 事 國 防	六五九二七
未償還公債現在高表	二六六八八	雜 種 事 業	七五七二二
金 額 (磅)	二六六八八	手 持 現 金 ・ 投 資	九三三三三
比 率 (%)	二六六八八		

五%をかけられるのであるが、大概卸賣商から小賣商に販賣せらるゝ時に附せられる事となつてゐる。

遺産・相続・贈與税收入表

年 度	遺 産 税	相 續 税	贈 與 税	計
一九三六	一一九八〇	三三三三三	一〇四六六	一六六八〇
一九三七	一三〇〇〇	三三三三三	一〇八八八	一七二二一
一九三八	一三〇〇〇	三三三三三	一〇八八八	一七二二一
一九三九	一三〇〇〇	三三三三三	一〇八八八	一七二二一
一九四〇	一三〇〇〇	三三三三三	一〇八八八	一七二二一

第二節 金融

一 銀 行

新西蘭に於ては小資本の銀行は無い。左の六銀行が金融業を支配してゐる。就中、新西蘭系の銀行はナショナル・バンク・オブ・ニュージランド(新西蘭國立銀行)がある。之は基本銀行で本店をロンドンに有する。バンク・オブ・ニュージランド(新西蘭銀行)は半官半民銀行であつて、各地に二二〇の支店を有し、濠洲、フィジー、ロンドンにも支店を有してゐる。その他の銀行は皆濠洲系の銀行である。各銀行の資本金額は次の如くである。銀行預金は當座預金には利子無く、定期預金は三箇月より六箇月迄は二歩四分の一、六箇月より十二箇月迄は二歩四分の三、一年より二年間は二歩四分の一、それ以上二歩半となつてゐる。此の外に學校貯蓄銀行、郵便局經營貯蓄銀行、信託貯蓄銀行がある。夫等の銀行の業績は次の如くである。

銀行資産状態表 (一九三九年二月末日現在)

銀行名	拂込資本金	年配當率 及賞與率	準備金
新西蘭銀行	5,000,000	10	
王室向發行の優先株 (一九三〇年の法律)	1,275,000	7.5/3	
A 同 優 先 株	3,333,333	6	1,674,969
B 長期擔保株	4,687,500	7.5	
C 長期擔保株	4,687,500	7.5	
D 長期擔保株	3,750,000	7.5	
普通株	4,000,000	10	5,007,551
濠洲聯合銀行	4,000,000	7	6,341,035
ニューサウスウェールズ銀行	4,780,000	6	6,341,035
オーストララシア銀行	4,500,000	8	4,849,918
新西蘭國立銀行	3,000,000	4	1,615,533
濠洲商業銀行	2,000,000	7-12	2,359,910
優 先 通 株	2,117,750	7	

銀行債務金額表

年度	銀行債券手形		他銀行へ		預金額	總務總額
	流通額	流通額	の残高	預金額		
一九三〇	6,235,717	2,692,944	1,032,963	5,645,000	6,398,441	12,096,382
一九三一	5,723,354	1,914,217	1,788,375	5,364,500	6,146,303	11,510,803
一九三二	5,958,268	1,588,666	1,566,107	5,385,176	6,049,308	11,434,474
一九三三	6,335,439	1,744,377	1,119,979	5,763,033	6,518,137	12,253,170
一九三四	4,844,626	1,978,822	5,686,635	6,341,035	6,959,921	13,705,556

銀行預金及貸付金額表

年度	預 金		貸 付 金	
	總 額	一人當り	總 額	預金に對する比率
一九三五	6,147,451	3,970	4,466,541	72.6%
一九三六	6,515,972	4,173	4,918,433	75.6%
一九三七	6,682,292	4,241	4,919,592	73.6%
一九三八	6,538,890	4,097	5,965,065	85.5%
一九三九	6,717,445	4,163	5,474,580	81.3%

郵便貯金銀行業績表 (各年三月末日現在)

年度	預金者數	預金總額	拂戻總額	拂戻に對する預金超過額	支拂利子	各年末現在貸出總額
一九三五	8,174	2,417,957	2,094,563	323,394	1,330,348	4,943,714
一九三六	8,406	2,561,975	2,353,596	208,379	1,404,459	5,191,653
一九三七	8,857	2,676,949	2,702,003	26,054	1,514,100	5,806,538
一九三八	9,285	3,041,022	2,929,074	111,948	1,698,384	6,314,693
一九三九	9,463	3,043,392	3,597,078	41,686	1,736,574	6,071,087
一九四〇	9,545	3,151,287	3,942,288	211,155	1,803,666	5,810,003

信託貯蓄銀行業績表 (一九三九年)

銀行名	預金者數	預金額	拂戻總額	餘額又は不足(△)	支拂利子	各年末現在貸出總額
オークランド銀行	1,898	5,197,081	5,222,488	25,407	2,222,110	8,929,191
ニユープリマス銀行	1,775	6,976,679	6,283,355	693,324	2,991,818	10,786,628
ホキテカ銀行	2,125	5,998,848	7,999,171	1,999,323	4,747,111	15,688,222
ダネデン銀行	3,854	9,666,111	9,632,555	33,556	5,243,368	22,270,884
インペリアル銀行	2,077	1,544,713	1,545,346	633	2,915,544	11,748,670
計	10,539	28,382,432	28,447,068	64,636	14,807,586	53,865,676

年度別信託貯蓄銀行業績表 (各年三月末日現在)

年度	預金者數	預金總額	拂戻總額	拂戻額に對する預金超過額	支拂利子	年度末預金總額
一九三五	22,795	61,992,111	60,734,447	1,257,664	32,258,891	112,251,002
一九三六	23,810	66,515,325	64,872,821	1,642,504	33,173,777	117,424,779
一九三七	24,937	72,093,344	72,440,419	652,925	33,769,848	124,194,627
一九三八	26,109	81,374,472	76,368,830	4,995,642	36,042,919	133,244,546
一九三九	26,935	85,780,688	84,300,667	1,479,021	37,865,679	138,656,776
一九四〇	27,447	88,144,124	85,232,164	2,911,960	38,046,600	139,073,376

學校貯金銀行業績表 (各年三月末日現在)

年度	預金者數	預金總額	拂戻總額	拂戻額に對する預金超過額	支拂利子	年度末預金總額
一九三五	82	3,951	1,517	2,434	1	11,334
一九三六	189	18,993	14,543	4,450	5	13,780
一九三七	388	24,880	22,179	2,701	1	18,326
一九三八	559	35,093	33,970	1,123	6	24,000
一九三九	744	39,387	38,851	536	15	27,666
一九四〇	905	37,000	36,809	191	19	29,007

二 保 險

1 生命保險・産業保險

新西蘭に於る生命保險に關する法制上の規定は、主として生命保險法及終身年金譲渡禁止法・國家生命保險法に據つてゐる。

生命保險會社は、總て五千磅—五萬磅の法定上の金銀又は證券を公共信託局に預入れなければならない。

一九三九年に一五の生命保險會社が營業してゐたが、その内の二社はもはや新規契約をしてゐない。

2 災害保險
一九〇八年の災害保險會社法に據るもので、法人組織たる否とを問はず總ゆる社團によつて證券發行を爲し得ることとなつてゐる。

3 火災保險
火災保險會社は四種類に區別せられてゐる。

- 1 傷害・疾病又は精神的若くは身體的の無能力
2 成文法又は慣習法に基く雇傭主の債務
3 不動産上の負擔、抵當權又は法的に成立する負擔等に優先すること
この労働者報償法に基く負擔

4 諸 統 計

(2) 同様の設立方法による英國會社
(3) 相互火災保險協會
(4) 新西蘭國外で設立せられた外國保險會社
地方保險會社は、有限責任會社として組織せらるべく會社法に定められ、此の種の會社は五萬磅の完全拂込済資本を必要とし、これ以下に低下したときは、該會社が無責任會社にならぬ限りは營業を休止せらるべきものとなつてゐる。

生命・産業保險表

Table with columns: 年度, 死亡, 満期, 譲渡, 消滅, 其他, 計. Rows for 一九三三 to 一九三五.

二、産業保險

保險證券數

Table with columns: 年度, 火災, 被火災, 總保險額, 總損失額, 損失率. Rows for 一九三三 to 一九三五.

火災及損失保險表

Table with columns: 年度, 火災(1)大火災, 被火災, 總保險額, 總損失額, 損失率. Rows for 一九三三 to 一九三五.

主要都市及其他の地域火災表 (一九三三—三八年)

Table with columns: 地域, 火災(1)大火災, 被火災, 總保險額, 總損失額, 損失率. Rows for 北, 市地域, 都市地域.

新西蘭... 財政・金融

Table with columns: 第二次都市地域, 南, 北, 其他, 計. Rows for 一九三三 to 一九三五.

火災の原因表 (一九三三—三八年)

Table with columns: 都市地域, 其他の地域, 計. Rows for 火災の原因, 暖爐の尖光, 不完全な煙突, etc.

第五章 産業

農業—畜産業—林業—水産業—鑛業—工業

第一節 農業

新西蘭に於ては、農業・畜産業が産業の中樞を構成してゐるのであつて、即ち全面積六六、四〇〇、〇〇〇エーカーの中、一九、六五九、三四九エーカー（二九四〇年）が耕作されてゐる。

其中一六、六三二、六〇八エーカーが牧草地であり、約一一、二一九五エーカーが休耕地である。糧秣用の作物を除いて穀類や豆類の作付地は約四〇萬エーカーであるから、新西蘭は農業地と言ふより寧ろ牧場地である。農産物中重要な地位を占めるものは小麦・燕麥・大麥・玉蜀黍等で、其の中小麥はカンタベリー平原に、燕麥は同平原並にオタゴ及北島に成育してゐる。其他亞麻は濕氣の多い諸地方に於る野生植物から得られ、人為的にはウエリントン地方に於て特に栽培されてゐる。左に新西蘭土地利用別を表示すれば次の如くである。

耕地面積比較表

年 度	耕地面積比較表		全耕地面積
	(1) 牧草地	(2) 植林地	
一九三四年	一六、六三二、六〇八	七、五三六、八四〇	二四、一六九、四四八
一九三五年	一六、五五七、七五〇	七、七九八、七七七	二四、三五六、五二七
一九三六年	一六、六〇九、〇三三	七、八七九、九五五	二四、四八八、九八八
一九三七年	一六、七二二、六〇七	八、〇四六、七四四	二四、七六九、三五五
一九三八年	一六、七八三、三三二	八、四四四、四三三	二五、二二七、七六五
一九三九年	一六、六三三、〇〇八	八、九一九、〇九六	二五、六五二、一〇四

単位：エーカー

主要農作物植付面積表

種 別	主要農作物植付面積表		
	一九三五—三六	一九三六—三七	一九三七—三八
小麦	一、九三五、一三六	一、九三六、一三七	一、九三八、一三九
燕麥	一、五三三、三三三	一、五三三、三三三	一、五三三、三三三
大麥	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七
豆類	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七
豌豆	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七
玉蜀黍	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七
其他	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七	一、七二七、七二七

単位：エーカー

(註) (1) 牧草地面積中には、乾草・保蔵飼料として刈られた緑草・クローバーの植付面積を含みます、是等は養育地中に編入してある。(2) 一九三四年以前には廣大なる面積の森林地が統計から脱落してゐた。

上記の如く断然と畜産に使用せられてゐる面積が多い。中でも綿羊に用ひられてゐる面積は七割に近く、新西蘭の農業は畜産農業であるといつて過言ではない。尙農業經營の収入高を見ても畜産農業の収入が他より擧んでゐる。即ち次の通りである。

農業經營總収入高表

年 次	農業經營總収入高表		
	農産物	畜産物	計
一九二八—二九	七三	三、一四	三、二一三
一九三〇—三一	六〇	二、一八	二、二四八
一九三二—三三	七四	二、六五	二、七二四
一九三三—三四	七二	二、七五	二、八二二
一九三四—三五	七三	二、八九	三、〇六一
一九三五—三六	七三	二、九一	三、〇八四
一九三六—三七	七三	二、九一	三、〇八四
一九三七—三八	七三	二、九一	三、〇八四
一九三八—三九	七三	二、九一	三、〇八四

単位：百萬磅

果樹栽培地は南・北兩島に均等に配分されてをり、ネルソン、ノースオークランド、オタゴ、ホーク灣沿岸、カンタベリー、オークランドの六地域でこの國全栽培地面積の九〇%を占める。

主産地別果樹園數・面積表

新西蘭...産業

種 別	果樹結實本數・果實生産販賣數量表 (一九三九—四〇年)		栽培面積	均一戸當り平均經營面積
	結實樹數	果實生産量		
林 檜	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇
梨	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇
桃	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇
油 桃	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇
杏 桃	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇
洋 李	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇	一、一八七、〇〇〇

櫻桃	1,420,000	11,000	11,000	1,431,000
椪	10,400	1,700	1,700	12,100
スイートオレンジ	1,190,000	7,000	7,000	1,197,000
プアーマンオレンジ	1,550,000	1,000	1,000	1,551,000
レモン	4,700,000	6,000	6,000	4,706,000
その他の柑橘類	900	500	500	1,400
計	1,211,100	21,800	21,800	1,232,900

家畜飼養数表

年次	鶏	鴨	鵞	鳥	七面鳥	計
一九〇六	2,784,269	2,199,999	4,433,000	7,710,1	2,187,666	13,215,035
一九一六	3,141,354	2,300,608	4,695,55	5,652,1	2,346,636	15,935,248
一九二六	3,100,834	2,552,030	4,387,9	7,685,2	2,782,145	17,508,200
一九三六	3,488,526	2,777,791	4,666,67	8,610,2	3,019,076	19,562,272

(備考) 一九三六年國勢調査による家畜飼養数は在来の最高記録を示しているが、人口一人當り飼養数は一九一一年以来逐年減少を示し、一九三六年には一人當り二・六羽で一八六四年以来の最少記録となつてゐる。

蜂蜜輸出高表

年次	輸出数量 (封筒)	輸出金額 (磅)
一九三三	1,255,347	3,278,8
一九三六	739,956	2,018,44
一九三九	3,186,211	9,099
一九四二	1,853,111	5,030,0
一九四五	4,112,778	11,237,8

第二節 畜産業

畜産業は新西蘭最大の産業の一端に羊と牛とが最も多く飼養され、豚と馬とが之に次いでゐる。

一九三八年には羊三二、三七八、七七四頭、牛四、五〇六、〇八二頭、豚七五、四六六頭、馬二七八、一六七頭に上つてゐる。

エリス種の牡羊を使用してゐる。又メリノ、ロングウール兩雜種の組織的混種法により、今日では世界的に著名なコリデル種を産出してゐる。北島では、ロムニー・マーシユ種が自然の情況に適してゐるので、一般的に飼育されてゐる。此の外舉ぐべきものは、ボーダー・レイスター、イングリッシュ・ニュー・レイスター等の種類である。

新西蘭は羊の飼育頭数に於ては世界第七位である。又羊毛生産量に於ては世界第四位、羊毛輸出の點に於ては將に世界第二の位置を占めてゐる。而して其の頭数は現在三千百萬頭と稱せられ、濠洲の一億一千万頭に比し約三分の一に相當する。

2 品種

新西蘭に飼育されてゐる羊の品種別は次の如くであるが、その内で頭数の最も大なるものはロムニー・マーシユ種である。この種の綿羊は主として南島に飼育されるが、その主なる理由は南島の氣候・風土がこの飼育に最も適してゐるからである。之に強いてはコリデル種、メリノ種、サウスタウン種、ボーダー・レイスター種、イングリッシュ・ニュー・レイスター種、リンカーン種、シュロップシャイア種、ライランド種、其他の順となつて居るが、その品種の大部分が英國種綿羊であることは、濠洲に飼育されてゐる綿羊が大部分メリノ種であるのと著しく趣を異にしてゐる。コリデル種は新西蘭で創始されたもので、メリノ種とリンカーン種との混血種を近親交配させて固定したものに始まり、その産毛は紡績番手にして五〇―五六番手の極めて利用の多い羊毛であり、夫にその肉は量と質とに優秀で、所謂毛・肉兼用種である。

1 概要

牛は肉用及酪用に多數飼育され、乳酪業及牛肉製造業は北島の獨占する所で、同島は新西蘭に於る牛の八五%を産出し、其の中酪農業用牛は八五%を占めて居る。肉用牛は主として北島のオークランド、ホーク湾

一羊

1 概要

羊は最も飼養に適し濠洲に於ると同様、若干の地方が羊毛用或は肉用と言ふやうに特種化し、例へば南島の丘陵地方や低地地方は夙にメリノ種を飼育し、近年に至りメリノ種と英種との混種に依て世界的に有名なコリデル種を造り出し、之が多くカンタベリー平原に生育し、濕潤な北島に於てはロムニー、マーシユ種が一般的であるが、其の他數量的には他の種が多い。この新西蘭の牧羊業の發達は、一八四三年及翌四四年に亘つて、ビッドウイルと稱する者がサー・チャールズ・クリフオードと共に家畜類を大規模に輸入したのを嚆矢とするが、三年後には前記クリフオードとウエルドなる者が、共同で南島のカンタベリーの北方平原及ポート・アンダーウッドに至る地域に牧羊業を開始し、一八五〇年には彼等のブラツクスポーンの牧場には一萬一千頭の羊を算するに至り、此の時代に及んで漸く輸出品として羊毛を擧げ得るに至つたのである。爾來同じく南島のオタゴ、マルボロー等の大草原に、斯業の發達を見今日に及んでゐるが、北島に於ては主にイーストチーフよりウエリントンに至る山岳の東側に發達してゐる。この地は中央の山岳で遮られるためタスマン海より來る濕氣がなく、従て氣候乾燥、牧草の成長も速かでないため牧羊に適してゐる。之に反して西側は牧羊に適してゐる。斯の如き山岳及降雨の狀況に基き、新西蘭北島に於ては大體に於て國の東側は牧羊業、西側は牧牛業と區別されてゐる。

新西蘭の牧羊業は、濠洲の如く廣大なる牧場を有して、數十萬若くは數百萬の大群羊を有することは絶對に無く、大體に於て一萬五千頭見當のものが多い。又牧場の大きさも二千エーカー若くはそれ以下のものが普通とせられる。

品種に就ては前述した通りメリノ種を飼育したが、近年メリノ種の混種用としてリンカーン種を使用し、更に右混種の牡羊に對しブラツクス

沿岸、タラナキ、パーマーストン・ノース等、南島では、カンタベリー、オタゴ、サウストランド等を主産地とし、オークランドはバターを生産に、タラナキ、ウエリントンはチーズの産に於て特種化してゐる。

一體、新西蘭の養牛業は牧羊場維持のために必要である。即ち牧草に肥料を供給する必要上牛を飼ふのである。又一面最近に於ては既述の如くバター、チーズ等の製造業が股販を極め、製造業者が其の副産物を飼料として利用するため養豚業を開始したので、酪農業と養豚業とは又密接な關係を結ぶに至つた。

2 分布狀況

新西蘭に飼育されてゐる畜牛數とその地方別分布を見ると、乳牛・肉牛はその約八割六分が北島に飼育されてゐる。即ち次の通りとなる。

地域・種類別牛頭數表 (一九四〇年一月末日現在)	乳牛	肉・役牛	計
ノース・オークランド地方	3,612,733	3,446,999	7,059,732
オタゴ地方	6,218,407	5,460,400	11,678,807
ギズボーン地方	5,035,210	2,950,311	7,985,521
ホーク湾地方	6,310,608	3,400,658	9,711,266
タラナキ地方	1,630,351	1,671,111	3,301,462
ウエリントン地方	1,232,588	6,333,995	7,566,583
マルボロー地方	1,411,210	2,270,990	3,682,200
ネルソン地方	3,442,844	3,758,855	7,201,699
ウエストランド地方	1,445,550	3,134,111	4,579,661
カンタベリー地方	7,335,561	1,052,293	8,387,854
オタゴ地方	4,770,011	6,919,900	11,689,911
サウストランド地方	6,565,531	8,236,311	14,801,842
計	1,250,071	2,682,961	3,933,032

3 品種

新西蘭はその開國の初期には畜牛として短角ダーラム種が輸入され、肉用に重點を置いて飼育されてきたが、後にエアリーシャヤ種が入り更にジャージー種が入つて漸次増加した。其の後ホルスタイン種が入り、爾來ホルスタイン種とジャージー種、乳用短角種を中心として乳牛の繁殖が行はれてゐる。一九二八年に於る品種及頭数は次の通りである。

種別牛頭数表

Table with 3 columns: 品種名 (Breed Name), 頭数 (Number of Heads), and 種別 (Category). Lists various breeds like Jersey, Friesian, etc., and their counts.

4 世界産牛頭数

世界に於る主要飼育國に於る畜牛總数の最新統計は次の如くである。

Table showing world cattle production by country. Columns include 國別 (Country), 飼育數 (Production), and 國別 (Country) again for reference.

三馬

馬は廣く駄用及農耕用として利用されてゐるが、一九一一年以來その數を減じつゝある。恐らく、之は自動車及機械的農具の使用が増大したことに基くものであらう。

今新西蘭に於る馬匹の飼育頭数の推移を見ると一九一二年が最高を示して四〇四、二八四頭、一九一六年三七一、三三一頭、一九二一年三三七、二五九頭、一九二六年三一四、八六七頭と漸次減少してゐる。最近五箇年に於る馬匹統計を見ると次の如くである。

Table showing horse statistics by category and year. Columns include 種別 (Category), 一九三六 (1936), 一九三九 (1939), and 一九四〇 (1940).

新西蘭に於る競争用馬匹は、その地味・牧草・氣候等の關係よりして極めて優秀なるものを産し、濠洲と相並んで南半球に於る屈指の競争馬の産出地となつてゐる。

四豚

豚の数は相當多數に上つてゐるが、其の繁殖振りは羊及牛程に進行してゐない。併し乍ら前述の如く近年は養豚業も頓に發達し、從て冷凍豚

五統計

家畜頭數表

Table showing livestock head counts by species and year. Columns include 種別 (Category), 一九三六 (1936), 一九三九 (1939), and 一九四〇 (1940).

内の輸出も過去一〇年間に四倍にまで増進するに至つた。年々豚肉の輸出は二九、〇〇〇噸と稱せられ、此の數字は牝牛一頭に對して豚一頭の標語の下に獎勵されて得られた數字ではあるが、斯る標語なしとする間もなく倍加されるであらうと言はれてゐる。今全島内に飼育される家豚頭数を擧げると次の如くである。

Table showing pig statistics by age group and year. Columns include 年度 (Year), 生後六箇月未滿 (Under 6 months), 六箇月一歳以下 (6 months to 1 year), and 一歳以上 (Over 1 year).

その品種は主としてパークシャ種、ヨークシャ種、タムウオース種、ライジホワイト種、ミドルホワイト種、及ライジブラック種等であるが頭數的には是等のもの、雜種が絕對多數を占めてゐる。

(備考) 馬・乳牛・畜牛・豚に就ては一月末日現在、剪毛された羊及仔羊、切毛された仔羊に關しては一九三九、一九四〇年全期間中のもの、尙編羊總數は一九四〇年四月末日現在の數字である。

一九四〇 七九七五九 二七八四五 八二七六四 四八三〇〇
 以上五箇年計 七九五〇五 一八六九四 五、四一七五 五、二二七〇〇

畜肉屠殺及輸出高表

年 度	屠殺數		輸出高
	屠殺場にて	農場にて	
一九三六	一〇、四八三	一、〇六三	一、〇〇六
一九三七	一〇、四八二	一、〇五五	一、〇〇三
一九三八	一〇、四九七	一、〇六三	一、〇〇三
一九三九	一〇、四九七	一、〇六三	一、〇〇三
一九四〇	一〇、四九七	一、〇六三	一、〇〇三
以上五箇年計	五二、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇

第三節 林 業

自然的植物は豊富で且つ多種な植物景観があり、濕潤な地方に於る常緑森林と殆ど亜熱帯的な森林とが低地と山地の低い斜面に於る典型的な植物景観をなし、是等の森林の中には多くの羊齒及木性羊齒が繁り、世界的な風景を作り、主として南方の掬から成る山地森林は低地に至る迄續き、又叢林を伴つた草地は北島の火山臺地や南島の平原に多く存在してゐる。

新西蘭の殆ど五分の一は森林地帯で其中五一〇萬エーカーが商品的價值を有する木材の地帯であつて、現今有名なカウリ松は極めて僅に残存し、主要な軟材はリムとかカヒカテアで、その他堅材も繁り、大なる資源となつてゐる。

併し乍ら、斯る森林面積もその大半を機拂ひ伐採して、現在では森林は全面積の一・九一%即ち一、二六〇萬エーカーとなり、之がため材木の不足や、土砂流出・洪水等の被害に曝されてゐる。

茲に於て、政府は逸早く法律を設けて森林保護に務め、植林を奨し、

林業省を獨立せしめ、カンタベリー大學に林業科を設置する等大いに施策に腐心してゐる。

一 木材の種類

この國の樹木は約八六種程あるが、その中木材として價值を有するものは僅か數種類で、カウリ、トタラ、リム、カイカテア、マタイ、ピーチ、ラタ、タワ等である。

以上の中更に主たる木材に就いてその特徴を記せば次の通りである。

1 柔質木材

イ カヒカテア *Kahikatea* 又は *White pine* (*Podocarpus daurycoides*)

産地 全国中に見出さる。

大 長さ一二〇呎、直徑三二吋

特徴 用ひ易く芯は固いが他は害蟲に冒される危険あり

用途 パター・チーゾの箱等

ロ タイ *Matai* 又は *Black pine* (*Podocarpus spicatus*)

産地 南北島を通じての森林に産す

大 長さ六〇呎、直徑二四吋

色 薄黄・茶色

特徴 土中には大して強くないが外部には強く用ひ易い

用途 外部用、床用として世界有数の木材

ハリム *Rimu* 又は *Red pine* (*Daeridium cupressinum*)

産地 南北島、ピーチを除く森林

大 長さ一〇〇呎、直徑三〇吋

色 赤茶色、薄茶色に變化す

用途 家屋建築用、ドア、家具等

2 硬質木材

イ レルム・ビーチ *Silver beech* (*Nathozenenfrirsi*)

用途 家屋内部用、床用、バルブ(紙用)

ハラタ *Rata*

産地 北ラタ、北島二、〇〇〇呎以下の所、南島ではマルバラ、ネルン

ン 南ラタ、南島及スチューワート島

大 長さ五〇呎、直徑二〇吋

色 赤茶色

特徴 固く、重く、強く、地上にて持久力あり

用途 電柱の腕木、車輪心棒用等

單位 一ボード・メジャー(一吋×二吋×一吋)

産地 北島中部以南より南島にかけて、主に南島西部に産す
 大 長さ八〇呎、直徑二呎
 色 桃色、後薄茶色に變化す
 特徴 用ひ易く、強し、土中に弱い
 用途 家具、自動車用農業機械用、靴の底(女用)及チーゾの箱等
 ロ タワ *Tawa* (*Podocarpus totia tawa*)
 産地 北島全部、一、七〇〇呎の高さ迄發見す、南島北部海岸にも少々あり
 色 薄茶白色

三 統 計

種 類	一九三六—三五	一九三五—三六
カウリ	五、五二五八〇	七、三三三三三
リム	二、五八八二八	一、五三二二二
カヒカテア	五、三一九四〇	五、三〇七四九
マタイ	一、八七九六六	一、九〇六八八
ピーチ	八、八七三三三	一、一七七八八
トタラ	七、七三三三三	八、八五五五五
ハラタ	二、二二二二二	二、二二二二二
計	二、二二二二二	二、二二二二二

植林苗種及樹木數並に面積表 (一九三七—三八年)

苗 種	樹木數		一九三八 年三月末 日現在總 植付面積 ヘクタール
	補充用	新規植付面積	
ビヌス・ラヂアタ	五、三三三三三	一、二二二二二	二、二二二二二
(インレングニス・バイン)	二、二二二二二	一、二二二二二	二、二二二二二

種 類	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九	一九三九—四〇
カウリ	七、七三三三三	一、一五五五五	六、三三三三三	一、八八八八八
リム	二、二二二二二	一、一五五五五	一、八八八八八	一、八八八八八
カヒカテア	四、六六六六六	四、六六六六六	三、三三三三三	三、三三三三三
マタイ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
ピーチ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
トタラ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
ハラタ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
計	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五

種 類	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九	一九三九—四〇
ビヌス・ボンデロサ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
ビヌス・ラヂアタ	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
レッドウッド	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
ダグラス松	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五
ボ ン	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五	一、一五五五五

牡蠣 (罐詰)	度	17,845
ト(ホロア) (罐詰)	度	6,444
白魚 (罐詰)	度	3,433
其他 (罐詰)	度	2,688
計	度	24,410

淡水魚異名表

日本名又は歐名	マオリ人による呼稱	最大の長さ
鱒	イナ	10
ガチエオン	コ	1
泥魚(カンタベリ産)	タ	5
泥	ワ	6
キウリウ	バ	6
グレイリ	ア	8
鰻(ヒレの短いもの)	バ	6
鰻(ヒレの長いもの)	ア	6
ヤツメウナギ	コ	4

第五節 鑛業

一 概 要

れてから、一時所謂ゴールド・ラッシュを極めた。併し一八六五年以後は漸次金産の減少を來し、現在に於る金産地は、南島西海岸ホキチカ附近と、南島ワカチブ湖附近と、北島オークランド東南約七〇哩餘のワイヒ地方のみである。金産額は左の通りである。方法としては石英採掘、ドレッヂ採掘及洗滌採掘の三種である。

銀は主にハウラキ鑛山より採掘せられ、その他銀の産出で利益を得てゐる所は無い。次は金塊及見積金分の産額を示したもので近年生産價額の多大の増加は金價格が非常に高騰したことを示すものである。因に見積産額は左の如くである。

年	次	見積産銀額	年	次	見積産銀額
1913	三	1,673,340	1913	三	1,673,340
1912	二	1,045,543	1912	二	1,045,543
1911	一	1,018,487	1911	一	1,018,487
1910	四	1,158,077	1910	四	1,158,077
1909	三	1,243,552	1909	三	1,243,552
1908	二	1,231,278	1908	二	1,231,278
1907	一	1,279,893	1907	一	1,279,893
1906	四	1,262,799	1906	四	1,262,799
1905	三	1,530,857	1905	三	1,530,857
1904	二	1,749,555	1904	二	1,749,555
1903	一	1,749,555	1903	一	1,749,555
1902	四	1,749,555	1902	四	1,749,555
1901	三	1,749,555	1901	三	1,749,555
1900	二	1,749,555	1900	二	1,749,555
1899	一	1,749,555	1899	一	1,749,555

産地は南島ネルソン地方、ゴールドン灣にあるオネカカ(Onetake)地区に於る鐵鑛と、他にもあるが主としてタラナキ濱に集中してゐる砂鐵とである。

新西蘭...産業

3,177,747	2,044,400	1,817,451	2,977,640
1,279,974	1,045,543	935,549	1,577,570
3,177,747	2,044,400	1,817,451	2,977,640
1,279,974	1,045,543	935,549	1,577,570
3,177,747	2,044,400	1,817,451	2,977,640
1,279,974	1,045,543	935,549	1,577,570
3,177,747	2,044,400	1,817,451	2,977,640
1,279,974	1,045,543	935,549	1,577,570
3,177,747	2,044,400	1,817,451	2,977,640
1,279,974	1,045,543	935,549	1,577,570

多種の鑛物が少量に廣く分布してゐるが、商業的重要性を有つものは唯二、三のものに過ぎない。金は嘗て多數の黄金狂の殺到を招來した重要資源であり、從て採金業は初期に於ては同國の進歩及定住に大いに貢獻したが、其の産額は數年に亘つて降下し來つた。併し最近再び金の騰貴に依り活況を呈するに至つてゐる。主としてケーゾルビル半島に於る鑛脈から得られ、石英の鑛脈からの金鑛は大概銀を伴つてゐる。新西蘭には小炭田が諸處に在り、相當に産出される。殊に西海岸に於るグレイマウスやウエストポート附近に多い。併し殆ど石炭は全部國內消費に充てられるので、輸出鑛産物とされては居ない。又廣大な鐵鑛床はネルソン地方及其他に存在し、オナカカに於て精鍊されて居る。オークランド地方に於る往時のカウリ森林のあつた土壌から化石ゴム、即ちカウリゴムが発掘され、一九三三年から一九三七年に亘る五箇年間の平均を見ても年約三、〇〇〇噸以上を輸出して居る。一九二七年に於ては四、六〇〇噸を超え其の價額は二八萬磅に達した。

二 主要鑛産物

1 金・銀

その昔新西蘭の河川には、多くの砂金が發見せられた。即ち一八五七年にはネルソンに、一八六一年にはオタゴ地方に砂金及金山が發見せられた。砂金は北島タラナキ地方に五千萬噸以上が海濱に分布してゐるが、化學的には相當の銑鐵が作り出される事は實驗済であるが、中止されてゐる。鐵は磁氣で分離が出来、磁鐵分平均五〇%といはれてゐる。

3 タングステン

産地は南方オタゴ地方ワカチブ湖の西グレノキイ附近と、南島マルバラ地方ワカチブ谷方面で、一九一〇—一九一一年の間は、年平均二六、〇〇〇磅の輸出額があつたが、市價低落に依り採掘を中止してゐた。所が一九三四年に再開して、一九三八年精鍊鐵四五噸、價額八、六〇四磅、一九三九年には四一噸、價額六、二四〇磅となつてゐる。而して一八五三年より一九三九年二月末日迄の累計は輸出數量二、七二四噸、價額三五、八九三磅である。

4 銅

三二箇所から發見せられる。主にオークランドの入口グレート・バリア島、カワウ島に於る銅埋藏量が再び調査せられ始めつゝある。一九三九年迄には一九、三九七磅の輸出であつた。

5 マンガン

北島オークランドより北のベイ・オブ・アイルランドや北島東岸のワイロア、オタウ、ブルア、マンガバイ、オトンガ、ワイヘケ島、タイエリ河口に産するが、市場の不安定より餘り盛とならない。一九三五年迄に輸出された量は一九、三八七噸で金額は六二、〇一一磅に上つてゐる。一九三九年ボンベイで約四八六噸が探掘せられた。一九三九年中に輸出されたマンガンは數量一九、四六八噸、價額六二、一九六磅であつた。

6 白金

金と共に主として南島より産し、極々少量であるが輸出せられる。一九三五年には一四オンスを、一九三七年には五五・二オンスを發見してゐる。

7 石炭

主に南島西海岸のグリマウスを中心とし、無煙炭より褐炭まで種々産し

てゐる。一九三五年に於る全産額の五八%餘は瀝青炭、三五%は褐炭、無煙炭は六%餘である。

石炭資源埋蔵・稼行量表

Table with columns: 種別 (種別), 確定埋蔵量 (確定埋蔵量), 推定埋蔵量 (推定埋蔵量), 稼行可能量 (稼行可能量), 現状稼行量 (現状稼行量). Rows include 無煙炭, 有煙炭, 褐炭, 計.

新西蘭の石炭は炭礦業經營に最適良のものではないとされ、その理由として 一 斷層・地裂の構造状態の悪いこと

三 統計

炭礦稼行状態表

Table with columns: 年次 (年次), 産出高 (産出高), 従業員 (従業員), 一人當り稼行量 (一人當り稼行量), 死亡者 (死亡者). Rows include 一九二九年以前累計, 一九三〇, 一九三一年, 一九三二年, 一九三三年, 一九三四年, 一九三五年, 計.

石炭産出量内譯表 (一九三九年)

Table with columns: 種別 (種別), 北部(北島) (北部(北島)), 西部(南島) (西部(南島)), 南部(南島) (南部(南島)), 計 (計). Rows include 有煙炭・半有煙炭, 褐炭, 楊色炭, 楊炭, 一九三九年計, 一九三八年計.

礦物生産高表

Table with columns: 種別 (種別), 数量 (数量), 金額 (金額). Rows include 石炭, 金, 銀, 銅, 鉛, 鋅, 鉄, 錳, タングステン, 軽石, 雲母, 石油, 水, マンガン, 珪砂, 珪, 白土, 雲母, 計.

礦物輸出額表

Table with columns: 種別 (種別), 一九三七年, 一九三八年, 一九三九年, 計 (計). Rows include 金, 銀, タングステン, アンチモン, 銅, 鉛, 鋅, 鉄, 錳, 水, 其他, カウリゴム, 石炭, 計.

第六節 工業

新西蘭は原料國である爲、その原料に附屬した農業・工業或は初期工業と目すべきバター・チーズ・カゼイン・煉乳・粉乳等の工業・羊肉の冷凍工業・羊毛工業等は早くより工業界に進出してゐるが、重工業とも目すべきものはオネカカの製鐵所や、少数の農具工場、自動車工場の外殆ど見出せない。

又石炭は豊富であり水力利用に至便であるが、一面人口は製造工業の

大發達を許すに未だ十分ではない。次に代表的な工業を一瞥すると、左の通りである。

一 主要工業品

1 冷凍羊肉

一八八二年二月シオー・サピル汽船會社のダネデン號がロンドンに向ひ航海をした時、四、三一頭の羊肉と五九八頭のラム(仔羊肉)とを冷凍室に入れていたのである。この第一回冷凍羊肉がロンドンで好評を博し、相當の値段に賣却される幸運を得、茲に本工業は開かれ爾來盛業を極めるに至つた。

現在では約一箇年に一千萬頭の冷凍羊を輸出してゐる。年別に之を表すれば次の如くである。

羊肉輸出頭數表

年次	羊頭	ラム羊頭
一九三二	二、三三三、四八六	七、五七四、二四七
一九三三	二、五五四、一八四	九、五五〇、七二
一九三四	二、〇〇〇、八四	八、七一九、三〇一
一九三五	二、〇八八、八二	九、三三三、〇八一
一九三六	一、八〇〇、五三	八、五五五、四三三

屠殺される羊は一年に約一千萬頭餘で、一日に一工場に付先づ千頭位の程度である。總従業員數は一九三八—三九年度に於て七、八九七人で、全生産額は二〇、六五三、〇七四磅に上つてゐる。

2 羊毛工業

全羊毛生産額の二・三%は自國工業用に用ひてゐる。是等の工場は比較的上等級のハーフブレッド、クロスブレッド級の羊毛を用ゐる爲に、良い製品を製造する。殊に新西蘭産毛布・膝掛は世界的な優良品を以て聞えてゐる。主な工場は、カイアポイ(クライストチャーチ)、オネンガ(オ

ークランド)、ローズリン(ダネデン)、ビートン(ウエリントン)等であるが、羊毛工場は全部で一二あり、従業員は二、七九二人で、皆日本の小工場に相當する。其の全生産額は左の如くである。

年次	金額	年次	金額
一九三二	八、八八五、四八六	一九三六	一、三三〇、八二九
一九三三	九、七六八、二二	一九三七	一、三三三、三三〇
一九三四	一〇、四八八、四九九	一九三八	一、五〇〇、七六〇
一九三五	一〇、五八三、〇	一九三九	一、三三九、一四〇

3 乳製品

現在最も盛なる産業の一つとなり、世界有数の乳製品輸出國となつてゐる。一九三六—三七年に於てはバター工場一九七、チーズ工場二六一、チーズ及バター工場四二總従業員三、七八七人を數へ一九三七—三八年總工場四三八、従業員四、二四四人、一九三八—三九年度には總工場四二九、従業員三、九四四人である。而して製産國としてバターは世界第六位、チーズは世界第五位に達し、輸出國としてはバターはデンマークに次で世界第二、チーズは世界第一となつてゐる。因に其の平均生産高は次の如くである。

年次	金額
一九三六	一、四六、八五一噸
一九三七	八四、九七一噸

4 カセイン

バターはクリームより製し、チーズは全乳より製し、カセインの多くは、クリウムを取つた後のスキムミルクより製せられる。カセインは製紙用・ベニア板及飛行機プロペラの糊付等に用ひられる。カセイン製造は、ハミルトンの新西蘭乳製品株式會社やタラナキ乳製品株式會社、そ

の他オークランド牛乳會社等で製造され、その年産額は約四、〇〇〇噸であつて、主に英國に輸出せられてゐるが、我が國にも少量輸入せられてゐる。

5 製菓工業

ビスケットが有名で、工場はオークランド、ワンガヌイ、ウエリントン、クライストチャーチ、ダネデンにあるが、就中ダネデンのハドソンのビスケットが一番良いと言はれる。その工場數は一九三八—三九年度には五五、従業員數は三、一九〇人、一箇年の製産高は、一、九〇五、一〇四磅である。

6 其他の工業

其他の工業に於る工場數と従業員數及生産額を挙げれば左の如くである。

種別	工場數	従業員數	生産額
製粉工業	四七	七三八	二、二八三、一〇三
ソーダ・ビツクル工業	一九	二六二	二、六二〇、五
果實ジャム工業	一九	五五三	五、六二一、九二
石鹼・ローソク工業	一九	五二〇	五、四二一、八一
醸造工業	五〇	一、二四三	二、九八八、三三
飲料水工業	二八	五六一	四、九九九、六

種別工場・従業員數及生産額表 (一九三八—三九)

種別
動物性食料
植物性食料
飲料・睡眠・刺戟劑
其他の動物性物質

種別	一九三四—三五	一九三五—三六	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九	一九三九—四〇
動物性食料	三、五八四、〇九四	四、一八六、四二二	四、八九二、九九九	五、〇三六、四四九	四、九四三、六七一	四、四四七、四四八
植物性食料	五、三〇七、七六〇	五、六二一、七七七	六、〇九〇、四八八	六、三九九、四九五	六、四四七、四四八	四、二七二、〇三三
飲料・睡眠・刺戟劑	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三
其他の動物性物質	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

新西蘭の産業

一二四一

毛織物	1,213,333
バッグ等袋類	62,527
ガソリン	1,841,933
重油	6,780,000
錫張板	7,759,433
鐵管	7,337,555
鐵線	6,444,952
雜物類	6,032,957
金機類	2,878,433
電機器具	2,043,933
新聞及印刷紙	7,359,933
以外の紙	8,400,853
自動車	6,700,000
自働車	6,700,000
タイヤ及チノープ	6,700,000

五大類別輸出額表

一年	1,085,124
二	1,014,651
三	1,732,456
四	3,364,127
五	1,505,583
六	1,460,913
七	1,460,913
八	1,460,913
九	1,460,913
十	1,460,913

品種別輸出額表 (一九三九—四〇年)

品種	輸出額	再輸出額
品	3,903,448	1,421,000
食用動物(生畜類を除く)	9,180,000	5,121,000
食用植物及食鹽	6,121,000	2,051,000
飲料品(アルコール類を除く)	1,213,333	1,213,333

3 正貨輸出入

正貨輸出入額表	正貨輸入	正貨輸出	入出超
一年	3,612,121	5,200,000	1,587,879
二	3,660,000	4,524,455	8,644,455
三	3,185,000	3,500,000	3,315,000
四	3,127,433	3,180,853	5,311,000
五	2,532,644	2,779,500	2,246,856

4 品別輸出

品別輸出	既製品	雜品	地金	計
一年	1,494,255	3,456,118	5,888,805	4,940,517
二	1,309,660	3,575,561	1,544,257	4,429,478
三	1,334,704	4,437,733	1,460,718	5,675,190
四	1,327,848	4,295,114	1,477,366	6,677,337
五	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113
六	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113
七	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113
八	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113
九	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113
十	1,327,333	4,254,848	1,399,918	5,832,113

單位：新西蘭磅

5 主要品國別輸入

主要品輸入額表	單位：噸				
國別・年度	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
菓子類	2,557,333	5,645,111	4,912,644	1,695,844	1,695,844
イギリス	2,557,333	5,645,111	4,912,644	1,695,844	1,695,844

カナダ	4,111	2,950,000	1,558,805	8,644,455
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
英領西印度諸島	7,522,888	6,668,211	8,649,400	2,860,333
南アフリカ	1,064,555	7,533,000	1,064,555	1,596,333
南アフリカ諸島	4,544,111	6,110,100	1,010,555	8,169,211
西インド諸島	4,905,555	6,173,333	5,733,000	4,348,666
アメリカ	2,557,333	3,660,000	4,037,000	6,811,000
其他	2,969,933	3,935,111	5,103,000	3,700,000
計	8,499,933	11,788,844	15,103,000	11,411,111
英領西印度諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,000	2,500,000	3,077,879
英領西印度諸島	1,641,111	2,355,000	2,477,000	1,327,333
カナダ	9,418,555	1,721,211	3,410,666	1,646,611
南アフリカ	2,000,000	1,910,000	6,568,805	4,429,478
南アフリカ諸島	1,784,611	1,417,00		

Table with columns for categories like 煙草・同製品, 茶, 雜物類, and 靴. Rows list countries such as 英國, 澳洲, 日本, 美國, 加拿大, 印度, 支那, 日本, 美國, 其他. Values are listed in columns.

Table with columns for categories like 帽子及婦人裝身具, 雜裝身具類・既製衣類. Rows list countries such as 英國, 澳洲, 日本, 美國, 加拿大, 印度, 支那, 日本, 美國, 其他. Values are listed in columns.

Table with columns for categories like 雜物類, 靴. Rows list countries such as 英國, 澳洲, 日本, 美國, 加拿大, 印度, 支那, 日本, 美國, 其他. Values are listed in columns.

Table with columns for categories like 雜裝身具類・既製衣類, 羊毛反物. Rows list countries such as 英國, 澳洲, 日本, 美國, 加拿大, 印度, 支那, 日本, 美國, 其他. Values are listed in columns.

イギリス	六九四四六	一一三三三	八〇〇〇一	四八〇五五
アメリカ	七〇一四七	一一三七一	八〇〇九九	四八〇九二
その他	—	—	—	—
計	七〇一四七	一一三七一	八〇〇九九	四八〇九二
自動車	—	—	—	—
貨物・乗合自動車類	—	—	—	—
イギリス	三〇〇九一	二八五〇七	二八〇〇八	二〇六五五
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	三〇〇九一	二八五〇七	二八〇〇八	二〇六五五
自動車用タイヤ・チューブ及カバー	—	—	—	—
イギリス	三六九〇三	三三三七五	四〇八二九	四九五九〇
アメリカ	二六八〇七	四二九四四	三九四六五	三二二五八
その他	—	—	—	—
計	六三七一〇	七六三一九	八〇二九四	七六八四八
ガソリン	六六九七三	—	—	—
その他	—	—	—	—
東印度諸島	—	—	—	—
計	六六九七三	—	—	—

イギリス	二八六三三	二七六〇九	三〇三〇五	二五五〇〇
アメリカ	三三三三三	三三三三三	三三三三三	三三三三三
その他	—	—	—	—
計	六二〇〇〇	六〇九四二	六三六三八	五八八三三
印刷紙	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—

イギリス	二二二七〇	一五二七五	一三九八四	一〇三三七
アメリカ	九三三九	一一八九三	一一〇一八	八〇〇〇
その他	—	—	—	—
計	三二六〇九	二七一六八	二四九九二	一八三三七
小間物及玩具	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—

イギリス	一〇五九六	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	一〇五九六	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
イギリス	—	—	—	—
アメリカ	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—

第七章 交通

陸運—海運—空運

第一節 陸 運

一九四〇年三月末の調査に據れば、國有鐵道の延長は三、三九〇哩、私鐵一八〇哩、計三、五七〇哩で殆ど總ての軌間は三呎六吋である。

鐵道の方向は著しく地貌に制約せられ、ジスボロン、ネルソン及ブレンドンハイムの諸中心が夫々隔離されてゐることは注目し得る。從て沿岸汽船の往來が交通系統に於て大なる役割を演じてゐる。道路は自動車交通の發達と共に大なる進歩を示し、既設道路の延長は八萬呎以上に達し、その中六・四萬呎が舗裝されてゐる。

1 道 路

道路は一九三九年三月末日現在、全長五二、八〇二¹/₄哩、此の外に車馬道五、九〇二³/₄哩、非公路一七、二六五¹/₂哩であつた。

單位：哩

事 項	道 路 狀 態 表 (一九三九年三月末日現在)		
	州	市 區	町 區
公 路・街 路(四輪車通行可能)	一四四 ³ / ₄	二六五 ¹ / ₄	四 ³ / ₄
瀝青又はセメントコンクリート舗裝	二六〇 ³ / ₄	一五七 ³ / ₄	八〇 ¹ / ₄
瀝青又はタール舗裝	三五五 ¹ / ₂	二四七 ³ / ₄	三三 ³ / ₄
砂 利 舗 裝	九五七 ³ / ₄	一七三 ¹ / ₄	六五 ¹ / ₂
公 路・街 路(四輪車通行可能未舗裝)	四〇〇 ³ / ₄	三三一	四八 ¹ / ₄
非 公 道	五七七 ¹ / ₂	二二 ¹ / ₂	四 ³ / ₄
車 馬 道	一六六 ³ / ₄	三三 ³ / ₄	五 ¹ / ₄
公 路 計	七〇七 ¹ / ₄	四〇〇 ¹ / ₄	一〇七 ¹ / ₄
橋 梁 種 類	狀 態 表 (一九三九年三月末日現在) (但し長さ二五呎以上の橋梁を示す)		
コンクリート又は石橋	七六六	四四	九
鐵筋コンクリート橋	四八〇	五八	三
鐵筋コンクリート及木橋	三三七	一五五	二五
鐵 及 木 橋	四八八	四七	一
漆 洲 産 堅 木 橋	二〇七 ³ / ₄	九四 ³ / ₄	二
橋 梁 計	一、九〇九	二〇八	二八
全 長	一五七、七二七	三、七〇六	七、六五
計	二、一七二、九一八	一、〇〇	二、三、七四

道路維持費負擔額及率表

事 項・年 次	一九三五—三六	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九	一九三九—四〇
公路委員會維持費(額)	一、二九、一七九	九〇、七三三	一、〇七、四一一	一、三三、三三〇	一、四〇、九一一
地方當局維持費(同)	二、八四、四三三	一、六〇、〇三三	一、五三、四四三	一、五三、七三〇	一、五三、一八八
公路委員會建設費(同)	四、八〇、〇四〇	一、四〇、一八一	一、三三、八〇〇	三、〇五、八三四	三、七九、七一一〇
地方當局建設費(同)	七、六三、二六三	一、〇八、一七五	一、〇八、一七五	一、三三、三九九	一、七二、八三九
計	一、九〇、九四九	二、〇七、一七五	三、六五、四三〇	四、六五、六七五	四、九三、二一九
公路委員會維持費(率)	八〇・七%	八二・一%	八七・五%	八九・六%	八九・六%
地方當局維持費(同)	一九・三%	一七・九%	一二・五%	一〇・四%	一〇・四%
公路委員會建設費(同)	八四・五%	九三・九%	九三・五%	九三・八%	九三・一%
地方當局建設費(同)	一五・五%	六・一%	八・五%	八・二%	九・三%
計	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%	一〇〇・〇%

道路維持費負擔及自動車數率表 (百分比)

事 項	一九三五—三六	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九	一九三九—四〇
北 島	六四・八〇	六六・八二	六六・四六	六九・二六	六八・二八
南 島	四四・八四	四五・三〇	四五・七〇	四五・八九	六五・九三
自 動 車 數	三、五、一〇	三、三、一八	三、三、五〇	三、〇、七四	三、一、七三
自 動 車 費	三、五、一六	三、四、七〇	三、四、三〇	三、四、一一	三、四、〇七

主要公路哩數及維持費表 (一九三九—四〇年度)

事 項	主要公路哩數 (哩)			維持費 (磅)		
	完全舗裝	砂利舗裝	輕石舗裝	公路委員會	地方當局	計
北 島	三、三、八八	五、七、八八	三、三、八八	八、八、九〇〇	九、六、五〇〇	一八、五、四〇〇
南 島	九、九、九	五、四、四	七	五、三、〇一一	五、四、八二八	一〇、七、八四〇
計	三、三、八八	五、七、八八	三、三、八八	一四、二、〇一一	一五、一、三二八	二九、三、三三九
新西蘭……交通						一一、五、三

新西蘭...交通

道路事故數表

事故別	一九三	一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	一九〇
衝突事故數	三	四	五	六	七	八	九	一〇
歩行者	一	二	三	四	五	六	七	八
自動車	二	三	四	五	六	七	八	九
列車	三	四	五	六	七	八	九	一〇
電車	四	五	六	七	八	九	一〇	一一
自轉車	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二
馬車又は馬	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
固定物	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四
迷ひ出た家畜	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五
堤防乗上	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六

表 (各年三月末)

其	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二
計	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二
鐵道	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二
其他	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

國有鐵道延長哩數表 (一九四〇年三月末日現在)

管區名	全長	管區名	全長
北島幹線及支線	一五六一	南島幹線支線	二六〇四
カイトフ線	三〇	ウエストポート線	三六
ギスポーン線	四九	ネルソン線	六〇
北島計	一六三四	ピクトン線	五五
		南島計	七五九

北島	一九四〇年	一九三六	一九三七
線	三月末日現在	一九三六	一九三七
工	投資額	一九三六	一九三七
其	哩平均	一九三六	一九三七
補	費	一九三六	一九三七
ワ	共	一九三六	一九三七
カ	運	一九三六	一九三七
チ	目	一九三六	一九三七
プ	鐵	一九三六	一九三七
湖	道	一九三六	一九三七
汽	建	一九三六	一九三七
車	設	一九三六	一九三七
道	費	一九三六	一九三七
他	表	一九三六	一九三七
業		一九三六	一九三七
船		一九三六	一九三七
道		一九三六	一九三七
鐵		一九三六	一九三七
道		一九三六	一九三七
投		一九三六	一九三七
資		一九三六	一九三七
收		一九三六	一九三七
入		一九三六	一九三七
調		一九三六	一九三七
表		一九三六	一九三七

北島	一九四〇年	一九三六	一九三七
線	三月末日現在	一九三六	一九三七
工	投資額	一九三六	一九三七
其	哩平均	一九三六	一九三七
補	費	一九三六	一九三七
ワ	共	一九三六	一九三七
カ	運	一九三六	一九三七
チ	目	一九三六	一九三七
プ	鐵	一九三六	一九三七
湖	道	一九三六	一九三七
汽	建	一九三六	一九三七
車	設	一九三六	一九三七
道	費	一九三六	一九三七
他	表	一九三六	一九三七
業		一九三六	一九三七
船		一九三六	一九三七
道		一九三六	一九三七
鐵		一九三六	一九三七
道		一九三六	一九三七
投		一九三六	一九三七
資		一九三六	一九三七
收		一九三六	一九三七
入		一九三六	一九三七
調		一九三六	一九三七
表		一九三六	一九三七

鐵道收支狀態表 (附帶事業を含む)

年次	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
總收入	七五、一五七	六八、二八〇	六八、八七二	六八、七九三	六八、七九三
支出	六五、〇八八	五九、〇九五	五九、〇九五	五九、〇九五	五九、〇九五
純收入	一〇、〇六九	九、一八五	九、七七七	九、六九八	九、六九八

單位：千磅
資本費に對する純收入の百分比

鐵道從業者數表 (但し本表中数字印は機關車に含まる)

新西蘭...交通

年次	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇
一般運輸	一四八八	一四八八	一四八八	一四八八	一四八八
保險	三七八	三七八	三七八	三七八	三七八
機關車工場	六九〇	六九〇	六九〇	六九〇	六九〇
計	二五〇四	二五〇四	二五〇四	二五〇四	二五〇四

電車事業開設年及軌道延長數表 (一九四〇年三月末日現在)

市別	開設年度	複線	單線	沿線受益人口推定
オークランド	一九〇二	四六〇	一八七〇	一八、〇〇〇
ニュージーランド	一九一六	六三〇	七五〇	一七、〇〇〇
ワイタング	一九一八	一四〇	一六四〇	一四、〇〇〇
ウエリントン	一九〇四	三三〇	三、三三〇	三三、〇〇〇
クライストチャーチ	一九〇五	四三〇	五、六三〇	五六、三〇〇

新西蘭……交通

ダネ	一九〇三	一六五三	二八七六	七五〇〇〇
インバーカー	一九一三	七四〇	九四〇	二四〇〇〇

電車經營事業概況表

年次	線經營	従業員數	乗客乘車數	乗客總數	一哩當り乗客數
一九三六	七	二五八	一五七、七五七	一、六五二、三九五	八四〇
一九三七	七	二八七	一五七、五八六	一、六二二、二五六	八六六
一九三八	七	二八二	一五八、六八〇	一、四〇、一八九一	八九四
一九三九	七	二九四	一五九、二六五	一、四四三、三三六	九〇六
一九四〇	七	二九六	一六三、六八七	一、四九七、六一九	九一三

走行一哩平均收支關係はその事業の成否を知る上に興味深いものである。之を表示すると次の如きものとなる。

電車走行哩當平均收支關係表 (一九三九—四〇年) 單位：片

電車系統別	總收入	營業費	資本負擔	其他經費	總支出
オー・クラランド	二五三〇	一七四〇	七一八	〇四五	二五〇三

登録港名 表 (一九三九年二月末日現在)

登録港名	帆船			汽船			モーター船		
	隻數	總噸數	純噸數	隻數	總噸數	純噸數	隻數	總噸數	純噸數
オー・クラランド	三三	11,000	1,000	五	1,375	670	111	1,650	800
ナウピ	10	1,400	1,000	九	889	429	11	2,790	1,511
ウエリントン	1	1	1	四	1,855	593	二六	1,083	569
ネメルソン	1	1	1	七	5,555	1,233	13	11,333	1,133
リッテル	1	1	1	二	4,286	1,599	10	11,269	1,185
チマ	1	1	1	一	943	488	1	11	11

沿岸・外洋船舶表 (一九三九年)

目的地	沿岸就航船			沿岸・外洋兩用船			外國貿易船		
	隻數	純噸數	噸數	隻數	純噸數	噸數	隻數	純噸數	噸數
英	九三	六〇、六五九	一一七	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	二	七、三〇九	八、七〇九
カナ	四七	三、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	四	一、四〇〇	二、〇〇〇
フ	二七	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
ナ	一七	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
ギ	一〇	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
バ	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
ベ	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
西	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
日	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
佛	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
東	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
印度	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
本	一	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三
計	二四	一、三三三	一一	一一	一、四〇〇	二、〇〇〇	九	一一、三三三	一二、七三三

到着地別外國出入船舶表

目的地	一九三七			一九三八		
	隻數	噸數	純噸數	隻數	噸數	純噸數
英	九三	六〇、六五九	一一七	八九	六〇、〇八八	一一一
カナ	四七	三、三三三	一一	四三	三、三三三	一一
フ	二七	一、三三三	一一	二七	一、三三三	一一
ナ	一七	一、三三三	一一	一七	一、三三三	一一
ギ	一〇	一、三三三	一一	一〇	一、三三三	一一
バ	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
ベ	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
西	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
日	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
佛	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
東	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
印度	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
本	一	一、三三三	一一	一	一、三三三	一一
計	二四	一、三三三	一一	二四	一、三三三	一一

新西蘭……交通

一一五七

第二節 海運

オー・クラランドは新西蘭の小舟艇群の登録港であり、其の登録船數は三七隻、平均一隻噸數は僅に五三噸に過ぎない。ウエリントン、ダネデンの登録船中には英國又は新西蘭合同汽船會社の所有船が多く、此の汽船會社船中には英國又は新西蘭に登録されてゐるものも數隻ある。

一九三九年の英國船舶は外國船舶總數の中、隻數に於て八五%、噸數七五%を占め、第三國船は總隻數の一五%、總噸數の二一%を占めてゐる。英國船舶の平均一隻噸數は四、二九〇噸、第三國船は六、八七六噸である。

一一五六

目的地	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八
ニュープリマス	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三
ウエリントン	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三
クライストチャーチ	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三
ダネデ	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三
インバーカー	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三
平均	一、二五五	一、二五三	一、二五三	一、二五三

新西蘭...交通

米	五	三、七三二	四	四
ニユーカレドニア	一	三、三三二	四	四
其他	二	八、五五三	一七	一七
計	六三	二、九二八〇	六〇	六〇

第三節 空 運

1 航 空 路

汎米航空會社の第二の太平洋横断大航路は桑港・オークランド間の新西蘭線である。今までの所、旅客輸送はしてゐなかつたが、既に數回の試験飛行が實施された。一九三七年末第一回の定期航空として桑港を出發したサモアン・クリツパー艇の痛ましい遭難は一時此の計畫を頓座させたが、愈々新造ボーイング三一四型大型飛行艇を以て再開された。先づ初めにハロルド・ゲツタイ氏(コスト氏の第一回世界一周飛行の

會社名 使用機

新西蘭空輸株式會社	三、DD.HH.フオックスモス	インチボニーホキチカIIフランツヨセフ水河	週三回
東海岸航空株式會社	二、D.H.H.スタンダード・ドラゴン	ホキチカIIハーストIIオクル	週一回
クック海峽航空株式會社	四、D.H.H.	ギスボーンIIネビルIIバーマストン・ノース	毎 日
ユニオン航空株式會社	三、D.H.H.ハ	ネルソンIIウエリントンIIプレナム	【毎日數回 週三回】
	四、ロツキ	ネルソンIIホキチカ	毎 日
		バーマストン・ノースIIプレナムIIクライ	
		ストチャーチIIダネデン、オークランドIIニユープリマス	
		IIバーマストン・ノースIIウエリントン	

2 定期航空事業

是等の空路は政府の航空郵便を扱ふ事は勿論であるが、一九三六年一月一日より一九三八年六月三〇日迄の旅客・貨物及郵便取扱数は次の如くである。勿論航空業には政府の補助がある。

哩 數	旅客數	貨 物	郵便物
一、二五七、七六六	二八、六三〇	三三、七六九	一八九、五六三

3 國際航空事業

(1) タスマン帝國航空會社

開 業 期	一九四〇年四月末日
所有飛行機數	二機(シヨートエムパイアS・三〇型)
座 席 總 數	三八
航空路及回数	オークランド・シドニー間 通常週一回往復

二、九二四八八	四八	三、七四二	四八	三、四〇八五〇
一、四五四三	四	七、四二九	八	一、七六九九
五、六五四三	二八	一〇、九五九	二二	六、五四七七
二、九二五七九	六六〇	三、〇八七〇五	六五六	三、〇七〇五七

際(航空士)が新西蘭に派遣され、オークランドの水上基地建设に關して新西蘭政府と折衝した。

航空路は第一航程桑港・ホノルル間約三、八五〇軒、次は約一、六六〇軒離れたキングマン・リーフ島。此の島は環礁であり、陸上飛行場を設ける事も出来ない様な小さな島である爲、その島の側に「スクーナ船」を碇泊せしめて、補助設備としてゐる。次は約二、五〇〇軒離れた東サモア群島中のバゴバゴ島。最後に約二、八八〇軒離れた新西蘭の首府オークランドに達する。總飛行距離一〇、九一五軒である。

航 路

第八章 其 他

第一節 主要都市

一 北 島

ウエリントン

ウエリントン(首都)は羊毛・羊肉・バター・チーズ等の貨物集散地である。パナマを通過して英國へ三週間で達し、南島のリツテルトン、ネルソンへはユニオン汽船會社の連絡船が就航してゐる。鐵道はオークランドに達するものがある。汽車は狭軌で、幾多のトンネルを通過する。又バスの發達は驚くべきものがあり、何處の地方にも通じてゐる利便が多い。近時は新西蘭空輸會社とユニオン航空會社、クック海峽航空會社があつて、ウエリントン・オークランドへ、南島ブレノン、ネルソンへと航空の便が開けてゐる。

ウエリントンは一八六五年より新西蘭の首府となつた所、こゝに第一回の移民が來たのは一八四〇年であつたから、一九四〇年には開拓百年祭が行はれた。

市街は丘陵の急な斜面を切り拓いて建てられ、其の中心街及主なる建築物は岡の麓と海岸との間に在る。町の中央からは山の上迄、ケイブルカーが設備せられ、市内を俯視し得る。政廳・議事堂があり、アレキサンダー・ターンプル圖書館は六萬冊の蔵書で名を得ており、オタリ植物園は新西蘭全土の植物を聚集してゐるので參觀者が多い。西部の山の中腹にはウイクトリア大學があり、附近のパツクル街には前大戦を記念する鐘の塔が建てられて、日曜の朝には美しい弔ひの音楽が町中に響きわたるのである。日本の領事館は昭和十三年に開設され、大阪商船、山下汽船の各貨物船が寄港し、又三井、山下、兼松、伴野の出張所もあつた。

(2) 汎米航空會社

第一回飛行 一九四〇年六月

飛行機	クリツパー機
航 路	サンフランシスコ、ホノルル、キングマンリーフ、バゴバゴ、オークランド

免許證・證明書發行數 (一九四〇年三月末日現在)

A級飛行士免許證	四四七	飛行場許可證	四二
B級飛行士免許證	二六	登録證明書(飛行機)	三九
飛行航海士免許證	九	耐航空性證明書	二五
地上整備員免許證	六四		

オークランド

人口は二二萬で、新西蘭最大の都會で前首府の地である整然たる町。丘の縁の公園及街路はすべてアメリカ式の様相を示してゐる。こゝは米國・カナダ・英國及濠洲・我が國へと船舶の發着の多い港である。自動車道路が四方に拓け、鐵道も至便のところである。

ハミルトン

ワイカト地方の乳產品の中心地で、新西蘭最大の組合會社新西蘭コーポレーター・デイリー株式會社の所在地である。この會社は一萬人の百姓株主からなつてゐる組合組織の會社で、一五のバター工場、一八のチーズ工場、他に木箱・罐製造所、カセイン煉乳工場等をもつてゐる。

溫泉地ロトルア

オークランドからハミルトンを経て、鐵路六時間の後に達する所にロトルアの溫泉地がある。溫泉はロトルアの周圍に泉となり、開飲泉となつて湧いており、溫泉は硫黃性でリニューマチス、神経痛、皮膚病によいとされてゐる。

ワイトモ鍾乳洞

ロトルアより南下し、ハミルトンより二五哩の地點に、ワイトモ鍾乳洞がある。石灰岩の一大洞窟で螢の如き夜光蟲が輝き美觀であるといはれる。

トンガロ公園

大湖タウポの附近にトンガロ公園がある。六萬陌の廣大な面積を有し、山中の原始林に包まれ、高原・湖があり、海拔三、六〇〇呎に在つて活火山ナルホへを望む光景は眞に威觀である。

二南 島

クライストチャーチ

カンタベリーの平原の中であり、落付いた英國風の町である。この邊一帶の平原に住む住民は英國で非常に嚴選された人々と技術者の子孫

で、新西蘭に於ても今にもつとも文化高く教育深い人々とされてゐる。

ダネデン

オタゴ地方にあり、英國北方のスコットランドの移民によつて建てられた町である。こゝのオタゴ大學は移民開始の時に大學の教授も、移民團中にあり、移住地で大學創立の計畫を以て來島したのであつて移住二〇年後に開講するに至つたと云はれる。移民の教育程度が如何に高かつたかが想察されるであらう。

第二節 文献目録

一 般

- Mules, Mary & Butchers, A. G. :- Bibliography of New Zealand education. 1936.
- New Zealand. *Census and statistics dept.* :- Pocket compendium of New Zealand statistics, issue 1940.
- : Results of a census of the Dominion of New Zealand, 1921. 1925.
- The New Zealand official year-book. (Annual)
- Year books of the Dominion of New Zealand.
- Williams, Herbert William :- Bibliography of printed Maori to 1900. 1924.
- 政治・法律・圖書
- Anderson, Harry Evelyn & Dalgleish, Douglas James :- The law relating to companies in New Zealand. 1934.
- Duncan, W. G. K. & Jones, G. V. ed. :- The future of immigration into Australia and New Zealand. 1937.
- Foden, Norman Arthur :- The constitutional development of New Zealand, 1839-1849. 1938.

- Hetherington, Jessie Isabel :- New Zealand: its political connection with Gt. Britain. 1921.
- Hight, James & Bamford, H. D. :- The constitutional history and law of New Zealand. 1914.
- Jourdain, William Robert :- Land legislation and settlement in New Zealand. 1925.
- Macdonald, John William :- Macdonald's law relating to workers' compensation in New Zealand. 1925.
- Marris, Johannes Stephans :- Colonization of New Zealand. 1927.
- Milner, Ian F. G. :- New Zealand's interests and politics in the Far East. 1940. (I. P. R. inquiry series)
- Mining law of British Empire. vol. 10. New Zealand. 1931.
- Morrell, William Parker :- The provincial system of government in New Zealand. 1932.
- Ross, I. Clunies. ed. :- Australia and the Far East: diplomatic and trade relations. 1936.
- Treadwell, Charles Archibald L. :- Notable New Zealand trials. 1936.
- Waddy, Percival R. :- Mercantile law of New Zealand. 5 ed. 1939.
- 譯著・叢書・社説・風俗及習慣
- Belslaw, Horace :- Recovery measures in New Zealand: a comparison with the new deal in the United States. 1936.
- Butchers, Arthur Gordon :- Young New Zealand. 1939.
- Coad, Nellie Euphemia :- Dominion civics. 1924.
- Del Mar, F. :- A year among the Maoris. 1924.
- Gt. Brit. *Dept. of overseas trade* :- Report on the economic and commercial conditions in the Dominion of New Zealand, 1924/26, 37. 1927-37. 2v.
- Hartop, Angus John :- England and New Zealand. 1926.

- Hutchinson, Robert H. :- The "socialism" of New Zealand. 1916.
- Lee, John Alexander :- Socialism in New Zealand. 1938.
- Lusk, Hugh Hart :- Social welfare in New Zealand. 1913.
- Marris, J. S. :- The colonisation of New Zealand. 1927.
- Moore, B. A. & Barton, J. S. :- Banking in New Zealand. 1935.
- Neale, Edward Percy :- Guide to New Zealand official statistics. 1938.
- Powles, G. R. and others ed. :- Contemporary New Zealand. 1938.
- Sutch, William Ball :- Price fixing in New Zealand. 1932.
- : Recent economic changes in New Zealand. 1936.
- Wilson, Ethel Wilson :- Land problems of the forties. 1936.
- 譯 業 (農・牧・林・水・工)
- Belslaw, Horace and others :- Agricultural organization in New Zealand. 1936.
- Birks, Lawrence :- Hydro-electric power development in New Zealand. 1925.
- Bosworth, G. E. :- Shoe and leather trade in New Zealand. 1917.
- (U. S. Dept. of commerce. Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series. no. 151)
- Connell, J. A. :- The breeding of live stock. 1931.
- Cunningham, Gordon Herriott :- Fungus diseases of fruit-trees in New Zealand. 1925.
- Duncan, George Andrew :- The New Zealand dairy industry. 1933.
- Hilgenloerb, Frederick William :- Pasture plants and pastures of New Zealand. 1932.
- : Wheat in New Zealand. 1939.
- Horns, Juan :- Agricultural implements and machinery in Australia

and New Zealand. 1918. (U. S. Dept. of commerce. Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series. no. 166)

Leslie, Allan:- Diseases of breeding ewes. 1938.

Indquist, R. A.:- Electrical goods in New Zealand. 1917. (U. S. Dept. of commerce. Bureau of foreign and domestic commerce. special agents series, no. 147)

New Zealand. *Census and statistics dept.*:- Statistical report on the agricultural and pastoral production of the Dominion of New Zealand, 1937-38. 1939.

Philpott, Harold G.:- A history of the New Zealand dairy industry. 1937.

Rowley, Forlescue William :- The industrial situation in New Zealand. 1931.

Scholefield, Guy H.:- New Zealand in evolution: industrial economic and political. 1916.

Smith, W. Millar :- The marketing of Australian and New Zealand primary products. 1936.

State forest service :- Pulping and paper-making properties of selected New Zealand woods. 1928.

益田豊彦 :- 濠洲・新西蘭の産業事情 昭和15(アジア問題講座第6巻ノ内) 南洋協會臺灣支那部 :- 新西蘭羊業概況 大正9 (南洋叢書第13巻) 櫻葉・秋野良郎編

Brett, Henry :- White wings. 1928.

Eaddy, Percy Allen :- Neath swaying spurs. 1939.

Gardiner, Hugh :- Skyways of Maoriland. 1934.

Philatelic society of New Zealand :- The postage stamps of New Zealand. 1939.

Rhea, Frank :- Railway materials, equipment and supplies in

Australia and New Zealand. 1918. (U. S. Dept. of commerce. Bureau of foreign and domestic commerce: special agents series, no. 156)

Verne, Collins & co. :- Illustrated and priced catalogue of the stamps of New Zealand. 1931.

蘭城・豊記

Andersen, Johannes Carl :- Jubilee history of South Canterbury. 1916.

Akaroa & Banks :- Peninsula (1840-1940): Romantic story of Canterbury's first settlement. 1940.

Babbage, S. B. :- Hautauism: an episode in the Maori wars. 1866. 1937.

Baker, J. H. :- Recollections of a surveyor in New Zealand, 1857-1896. 1932.

Beaghole, John Gawte :- Captain Holson and the New Zealand company: a study in colonial administration. 1928.

— :- New Zealand : a short history. 1936.

Becker, O. E. H. :- Königin der Südsee: ein Biographie Neu-Seelands

Brown, Anne Earncliff :- The farmer's wife: a country woman's calendar. 1939.

Buick, Thomas Lindsay :- New Zealand's first war. 1926.

Cambridge history of British Empire. vol. 7, part 2. New Zealand. 1933.

Coad, Nellie Euphemia :- New Zealand from Tasmann to Massey. 1934.

Condiffe, John Bell :- New Zealand in the making. 1930.

— :- Short history of New Zealand. 1925.

Cox, A. :- Men of mark in New Zealand. vol. 1. 1886.

Cowan, James :- The New Zealand wars: a history of the Maori campaigns and the pioneering period. 1923. 2v.

Elder, John Rawson :- New Zealand: an outline history. 1923.

— :- The pioneer explorers of New Zealand. 1929.

Gifford, W. H. & Williams, H. B. :- A centennial history of Tarannga. 1940.

Gilkison, Robert :- Early days in central Otago. 1930.

Grace, Thomas Samuel :- A pioneer missionary among the Maoris, 1850-1879, being letters and journals of Thomas S. Grace. 1928.

Harrap, Angus John :- England and Maori wars. 1937.

— :- England and New Zealand from Tasmann to the Taranaki war. 1926.

Henry, G. A. :- Maori and settler: story of New Zealand war(1854-73). 1937.

Historical records of New Zealand. 1908-14. 2v.

Hocken, T. M. :- Contribution to the early history of New Zealand. 1898.

Irvine, R. F. & Alpers, O. T. J. :- Progress of New Zealand in the century. 1902.

McClernont, W. G. :- The exploration of New Zealand. 1940. (historical surveys, centennial surveys. no. 3)

Makereti, M. P. :- The old time Maori. 1933.

Manning, Frederick Edward :- Old New Zealand. 1933.

Morton, H. B. :- Recollections of early New Zealand. 1926.

Parsons, F. :- The story of New Zealand. 1904.

Playne, S. :- New Zealand: its history, commerce and industrial resources. 1912.

Pratt, Albert Rugby :- Pioneering days of southern Maoriland.

1932.

Reischek, Andreas :- Yesterdays in Maoriland: New Zealand in teh eighties; tr. by H. E. L. Priday. 1930.

Ruschen, G. W. :- History of New Zealand. 1935. 3v.

Scholefield, Guy Hardy :- A dictionary of New Zealand biography. 1940. 2v.

— :- Who's who in New Zealand and the western Pacific. 3 ed. 1932.

Shrimpton, Arnold Wilfred & Mulgan, Alan Edward :- A narrative of outstanding events; 2 ed. 1930.

— :- Maori and Pakeha; a history of New Zealand. 1921.

Skinner, William Henry & Leatham, H. B. :- Pioneer medical men of Taranaki, 1834-1880. 1933.

Smith, S. P. :- Maori wars of the 19th century. 1907.

White, J. :- Ancient history of the Maori: his mythology and traditions. 1887-89. 4v.

岩間良平

Andersen, Johannes Carl :- Place names in New Zealand. 1934. (New Zealand geographic board pub.)

— :- Place names of Banks Peninsula. 1927.

Glyde, Constance :- New Zealand: country and people. 1925.

Coad, Nellie Euphemia :- Geography of the Pacific. 1926.

Cowan, James :- Travel in New Zealand. 1926. 2v.

Cowie, Donald :- New Zealand from within. 1937.

Douglas, Sir Arthur P. :- The Dominion of New Zealand. 1911.

Gooding, Paul :- Picturesque New Zealand. 1913.

Guthrie-Smith, William Herbert :- Tutira: the story of a New Zealand sheep-station. 1921.

- Hertz, Max :- New Zealand: the country and the people.
 Marshall, P. :- Geography of New Zealand. 1904.
 Moreland, A. M. :- Through South Westland. 1911.
 Morrell, W. P. :- New Zealand. 1935. (Modern world ser.)
 Mulgan, Alan Edward :- A pilgrims way in New Zealand. 1935.
 New Zealand. *Honorary geographic board*:- Place-names in New Zealand. 1934.
 New Zealand index of every place in New Zealand. 1936.
 Odell, Robert Sydney :- Handbook of arthur pass national park. 1935.
 Oxford survey of the British Empire :- Australasian territories. vol. 5. 1914.
 Pascoe, John Dobree :- Unclimbed New Zealand. 1939.
 Playne, Somerset and others :- New Zealand; its history, commerce, and industrial resources. 1913.
 Pospisil, Bohuml :- Wandering on the islands of wonders. 1935.
 Rees, Rosemary :- New Zealand holiday. 1933.
 Reeves, William Pember :- New Zealand. 3 ed. 1935.
 Roberts, E. :- New Zealand: land of my choice. 1935.
 Robin, J. :- Trip to Maoriland. 1907.
 Senior, W. :- Travel and trout in the Antipodes. 1879.
 Zeyler, J. W. :- Trip through New Zealand. 1910.
- ◀ 譯 著
- Andersen, Johannes Carl :- Maori music with its Polynesian background. 1934.
 —:—: Maori string figures. 1927.
 Best, Elsdon :- Fishing methods and devices of the Maori. 1929. (Dominion museum bulletin. no. 12)

- :—: Games and pastimes of Maori. 1925. (Dominion museum bulletin. no. 8)
 —:—: The Maori. 1924. 2v.
 —:—: The Maori as he was. 1925.
 —:—: The Maori canoe. 1925. (Dominion museum bulletin. no. 7)
 —:—: Maori storehouses and kindred structure. 1916. (Dominion museum bulletin. no. 5)
 —:—: Maori myth and religion: spiritual and mental concepts of the Maori. 1922. (Dominion museum bulletin. no. 1-4)
 —:—: Maori mythology and religion. 1922. (Dominion museum bulletin. no. 10)
 —:—: The Maori system of agriculture. 1925. (Dominion museum bulletin. no. 9)
 —:—: The Pa Maori. 1927. (Dominion museum bulletin. no. 6)
 —:—: Polynesian voyagers: Maori schools of learning. 1923. (Dominion museum bulletin. no. 5, 6)
 —:—: Tuloe, the children of the Mist. 1925. 2v.
 —:—: The Whare Kōhanga and its lore. 1929. (Dominion museum bulletin. no. 13)
 Brown, John Macmillan :- Peoples and problems of the Pacific. 1927.
 Bruck, Peter Henry :- The evolution of Maori clothing. 1927.
 —:—: Vikings of the sunrise. 1938.
 Buick, Thomas Lindsay: the discovery of dinosaurs. 1936.
 —:—: The Moa hunters. 1937.
 —:—: The mystery of the Moa. 1931.
 Cowan, James :- The Maori yesterday and today. 1930.
 Firth, Raymond :- Primitive economics of the New Zealand Maori.

1929.
 Keesing, Felix Maxwell :- The changing Maori. 1928. (Board of Maori ethnological research memoir. vol. 4)
 Papakura, Maggie :- The old-time Maori. 1933.
 Rowe, W. Page :- Maori artistry. 1928. (Board of Maori ethnological research memoir. vol. 3)
 Smith, Stephenson Percy :- Hawaiki: the whence of Maori. 1921.
 —:—: Lore of the Whare Wananga. 1913-15. 2v. (Memoir of the Polynesian society. vol. 3, 4)
 Sutherland, Ivan Lorren George :- The Maori situation. 1935.
 —:—: ed. :- The Maori people today: a general survey. 1940.
- 編 譯 著 • 著 譯
- Allan, Harry Howard Barton :- New Zealand trees and shrubs. 1928.
 Andersen, Johannes Carl :- Bird-song and New Zealand song-birds. 1926.
 Atkinson, Esmond H. :- Phormium tenax
 Cheesman, Thomas F. :- Manual of New Zealand flora. 2 ed. 1925.
 Cockayne, Leonard :- The cultivation of New Zealand plants. 1923.
 —:—: New Zealand plants and their story. 3 ed. 1927.
 —:—: The vegetation of New Zealand. 2 ed. 1928.
 Cotton, Charles Andrew :- The geomorphology of New Zealand. 1922.
 Dobbie, Herbert B. :- New Zealand ferns. 3 ed. 1931.
 Guthrie-Smith, William Herbert :- Bird life on island and shore. 1925.
 —:—: Mutton-birds and other birds. 1914.
 —:—: Sorrow and joys of a New Zealand naturalist. 1936.
 Herbert, Arthur Stanley :- The hot springs of New Zealand. 1921.

- Hudson, George Vernon :- Beetles of New Zealand. 1934.
 —:—: The butterflies and moths of New Zealand. 1928.
 Hutton, Frederick Wollarton, & Drummond, James :- The animals of New Zealand. 4 ed. 1923.
 Laing-Robert M. & Blackwell, Ellen W. :- Plants of New Zealand. 3 ed. 1927.
 Marshall, Patrick :- The geology of New Zealand. 1912.
 Martin, William :- The New Zealand nature book. 1929. 2v.
 Moncreff, Perrine :- New Zealand birds and how to identify them. 1925.
 Oliver, Walter Reginald Brook :- The genus coprosma. 1935.
 —:—: New Zealand birds. 1930.
 Report of the Hawke's Bay earthquake. 1933. (New Zealand Dept. of scient. and industrial research. bulletin. no. 43)
 Simmonds, Joseph Henry :- Trees from other lands for shelter and timber in New Zealand-eucalyptus. 1927.
 Speight, Robert, and others ed. :- Natural history of Canterbury. 1927.
 Stear, Edgar F. :- The life histories of New Zealand birds. 1932.
 Thomson, George Malcolm :- The naturalization of animals and plants in New Zealand. 1922.
 Thomson, Robert P. :- A natural history of Australia, New Zealand and the adjacent island. 1917.
 Tillyard, Robin John :- The insects of Australia and New Zealand. 1926.
- 編 譯 • 著 撰
- Bryson, Elizabeth :- Learning to live. 1938
 Smith, George McCall :- Notes from a backblock hospital. 1938.
- 編 譯 • 著 撰 • 著 撰

- Allen, Charles Richards, *ed.* :- Tales by New Zealanders. 1938.
 Andersen, Johannes Carl :- Myths and legends of Polynesians. 1928.
 Art in New Zealand. 1938.
 Beaglehole, John Gawte :- A school of political studies. 1938.
 —:- The univ. of New Zealand. 1937.
 Beeby, Clarence Edward :- The education of the adolescent. 1937.
 —:- Intermediate schools of New Zealand. 1938.
 Best, Elsdon :- Maori religion and mythology. 1924.
 Campbell, Arnord Everitt & Bailey, Colin Lennie :- Modern trends in education. 1938.
 Caston, H. E. Towner :- Speckled nomads: a tale of trout in two rivers. 1938.
 Donne, Thomas Elward :- Rod-fishing in New Zealand waters. 1927.
 Grey, Zane :- Tales of the angler's eldorado, New Zealand. 1926.
 Hintz, O. S. :- The New Zealanders in England. 1931.
 Jackson, Patrick, *ed.* :- The Maori and education. 1931.
 Jenkins, David Ross :- Social attitudes in New Zealand school journal. 1939.
 Leckie, Frank Maxwell :- Early history of Wellington College. 1934.
 Kandel, Isaac Leon :- Impressions of education New Zealand, and the problem of education. 1937.
 —:- Types of administration, with particular reference to the educational systems of New Zealand and Australia. 1938.
 Ngata, Sir Apirama Turupa :- Maori grammar. 1938.
 Pomare, Sir Maui, & Cowan, James :- Legends of the Maori. 1930.
 2v.
 Pope, G. Quentin, *ed.* :- Kowhai gold: an anthology of contemporary New Zealand verse. 1930.
- Reese, Thomas W. :- New Zealand cricket, 1914-1933. 1936.
 Thomas, W. *and others* :- Entrance to the university, in 3 parts. 1939.
 Vaile, E. Earle :- Pioneering the punice. c1939.
 Webb, Leicester Chisholm :- Control of education in New Zealand. 1937.
 Wild, Leonard John :- An experiment in self-government. 1938.
 Williams, Herbert William :- A dictionary of Maori language. 1917.
 Wilson, Charles A. :- Legends and mysteries of the Maori. 1932.

太平洋諸島

太平洋諸島 目次

I 米領太平洋諸島

第一章	ハワイ諸島	二六八
第二章	グアム諸島	二七三
第三章	其他の米領諸島	二七六

II 英領太平洋諸島

第一章	フィジー島	二七六
第二章	ギルバート及エリス諸島	二七九
第三章	ソロモン群島	二八〇
第四章	トンガ諸島	二八〇
第五章	ナウル島	二八二
第六章	クック諸島	二八二
第七章	西サモア諸島	二八三
第八章	ニューヘブライズ諸島	二八三
第九章	其他の英領諸島	二八三

太平洋諸島……目次

III 佛領太平洋諸島

第一章	ニューカレドニア	二八六
第二章	其他の佛領諸島	二八九

III 文献目録

太平洋諸島

〔米領太平洋諸島 英領太平洋諸島 佛領太平洋諸島〕

抑々西洋人が初めて太平洋を認識したのは、西暦一五一三年にスペインのバルボアが中米の地峡を横切り、太平洋岸に達した時であつて、次で一五二〇年マゼランが南米大陸の南端を西に航し、そこに當時大西洋に比して静穏な大洋を発見し、太平洋と名付けた事に始まるのである。この廣大な太平洋上には無数の島嶼や小大陸が存在してゐる。是等の諸島がある爲に太平洋は價值付けられ、又世界列國の政治上・經濟上の種々な交渉があり、太平洋諸島を繞る諸問題が論ぜられるのである。我が國に於ても上古よりこの太平洋の存在を知つてゐたのであつて、我が「日本書紀」神代の卷には、今日の太平洋を「滄溟」或は「滄海」と共にアヲウナバラと呼んでゐた。従て是等の諸島も我が邦人によつて夙に發見占領される筈のものであつたが、徳川幕府三百年の鎖國の間に、或は我が國と支那との修交の間に、遠きスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス等の進出に依りて發見され、占領されてしまつたのである。殊に十七世紀より十八世紀の間に、多くの熱帯太平洋諸島は發見され

た。然るに十九世紀に入るや、俄然アメリカの太平洋進出は目覺しく、即ち大西洋岸から次第に領土を擴張してカリフォルニアの海岸に到着し、更に此處を基地として西太平洋に野心を抱き、一八九八年にはハワイ王國を亡し、次で米西戦争に乗じて一舉にしてミドウェー、ウエーク、グアムを飛石傳ひにフィリピンに直行し、僅々一箇年にして太平洋横斷に成功し、一方南に向つてはサモアを占領して對濠洲進出に一石を打ち、殊にパナマ運河を開鑿して大西洋岸より太平洋岸への急速な重心移動を

可能ならしめるやうに努めたのであつた。

今や太平洋諸島の重大性は有ゆる角度より眺められ、殊に列國の必須とする金・銀・ニッケル・オスミン・石油・燐鐵等の總ゆる礦物資源、水産及林産の資源も亦多く、殊に無電・海底線及航空基地並に中繼所として極めて重要な役割を有してゐる。

茲に於て太平洋諸島は全く世界各國の垂涎的である。況んや如何なる小島嶼と雖も、これを交通聯絡或は戰略上より見て大なる價值あらむるべく、各國は競つて様々の施設を企圖してゐるのである。

かゝる廣範圍に亘る地域の地理上の分割は學者に依り其の説は區々であるが、今茲に便宜上熱帯太平洋のメラネシア (Melanesia)、ミクロネシア (Micronesia) 及ポリネシア (Polynesia) と三大別に就て述べれば、メラネシアとは、濠洲大陸の北方及其の東北方に、將又赤道の南に存在する多數の島々の名であつて、全面積は九五萬平方哩、ニューギニア、ビスマーク、ソロモン等の諸島がある。ミクロネシアも亦地理的の呼稱であつて、即ち小さい島の義である。我が委任統治諸島及グアム等を包含してゐる。ポリネシアは熱帯太平洋の東部を占め、佛領オセアニア、ハワイ、クック、サモアの諸群島を言ひ、面積は約三〇〇萬平方哩、住民は體格概して良く、稀に高さ二米に達するものがある。然るに白人其の他の接觸より来る種々な原因に依りて逐年人口を減じ、密度は一人に過ぎないが、曾て太平洋諸島中最も優れた文化を持つて居た大民族であり、今尚ほ巨石文化の跡が諸所に存在して居る。

I 米領太平洋諸島

第一章 ハワイ諸島

地理—歴史—人口—住民—政治—教育—産業—農林—其他—「貿易」—交通—主要島嶼

一 地理

1 位置・面積

ハワイ諸島は北緯一八度五四分から二二度一六分まで、西經一五四度一分から一六〇度三三分に至る範圍の海面にある島嶼から成る。最大の島のハワイ島を始め、マウイ島、カフラウエ島、ラナイ島、モロカイ島、オアフ島、カウアイ島及ニイハウ島の八大島嶼が並び、此の外に無人島の四小島と珊瑚礁を加へて總面積は一六、七二八平方マイルである。

島嶼名	面積	島嶼名	面積
ハワイ	10,356	オアフ	1,550
マウイ	1,816	カウアイ	1,040
カフラウエ	1,010	ニイハウ	250
ラナイ	350	計	16,728
モロカイ	280		

2 地勢

全島火山岩を以て成り、熱帯の海に圍まれて多くの珊瑚礁が附加されてゐる。火山はこの八大島に集中し、その總数は四〇の多數に及んでゐる。現在は最南東端のハワイ島に於てのみ火山活動を見ることが出来る。

ハワイ諸島はかゝる情勢の中に、一五二七年スペイン人のアルバロ・デ・サーベドラ (Alvaro de Saavedra) によつて發見されたと云はれる。併し、其の後一七七八年一月一八日、キャプテン・ジエームス・クック (Captain James Cook) により、彼の第三回目の太平洋探検の途次に發見せられた。

其の後長い間、本群島は獨立の王國として存在してゐたが、一八九三年女皇リリオアハの歿後、共和國となり、遂に一八九八年米國のマツキントレー大統領によつて併合されてしまつた。

三 人口・住民

十九世紀になつて白人の勢力が侵入し、東洋人も移住を始め、原住民は反つて減少の傾向を示して、現在では移住民を以て主とする國である。人口は一九三九年現在四一、九九二人、密度は一方マイルに付二五人である。

次に一九三九年六月に於る人種別人口統計を挙げれば次の通りである。

人種	人口	人種	人口
日本	15,500	白人	6,700
比律賓	5,100	ハワイ人	22,250
支那	2,600	白人ハワイ人混血	2,100
歐米	6,700	アジア人ハワイ混血	2,200
スペイン人	1,200	其他	900
ポルトガル人	300	計	41,992
ポルトリコ人	770		

言ふ迄もなく、東洋人・西洋人の侵入に依り漸次先住民族も壓迫を受け、一九三四年では著しい減少を現はし、原住民は二一、一六五人、アジア系及歐洲系の混血ハワイ原住民が合せて四三、六九三人を數へるに過ぎない状態である。ハワイ原住民の血統は決して滅びないであらうが、將來は移住民である他民族の血に融合して新しいハワイ人の形成が當然のことと考へられる。

太平洋諸島……米領太平洋諸島

高度はハワイ島のマウナケアが最高で四、二〇八米、マウナロアが之に次ぎ四、一六八米で、マウナロアの東腹には高度一、二三五米のキラウエア山があるが、この頂上には周圍一四軒の火口があり、中にハレマウマウその他の熔岩湖を湛へ、特異の景觀を持つてゐる。

火山が斯の如く特異の形態を示す外に、島々に卓越する北東貿易風と多量の降雨とは、海岸或は島内に種々の地形の變化を現はし、熱帯特有の植物に蔽はれて、自然景觀を彌が上に絶妙の物たらしめ、各所に觀光施設の整備並に産業の發達を促してゐる。

3 氣象

諸島は北回歸線以南の大洋上にあり、略我が臺灣南端の位置に相當する。今試にホノルルに於る氣温(攝氏)の狀況を見るに、一、二月が最低で二一・九度を示し、八月は最高にして二五・七度である。夏季の氣温較差も僅かに三・八度で、一年を通じて暑熱は大したことはない。併し島々はその面積が比較的小さく、海洋の影響を受け易いので、氣温の示すのは別に概して凌ぎ易く、概ね健康に適する状態である。

尤も北東側の火山の高所では特に多量の降雨が見られる所もある。殊にアツサム丘陵南斜面のチェラフンジの一、〇〇〇耗は、世界の最多雨地としての記録を有するものである。

二 歴史

ハワイの島々は古くは無人の島で、漸く五世紀の頃にポリネシア人の移住が行はれたが、廣大な海洋の故に世界の文化圏からは遙かにかけ離れてゐた。そこには少數の原住民が溫暖な氣候と、海・山に得られる豊富な食料資源を持つて、極めて安易な生活を営んでゐたことが考へられる。十六世紀になつて航海術の進歩したヨーロッパの諸國に未知の世界を探索する仕事が増盛になると共に、青海原の太平洋も次第にその探求の圏内に登場して來たのである。

我が國人が最も多く、フイリツピン人・ポルトガル人・支那人等が之に次いで多く、恰も人種の展覽會場の觀を有し、各國の言語が使用され、夫々の國人は自國語の新聞を讀み、人情・風俗等に異つた特色を發揮してゐる。

ハワイ諸島の産業開發に邦人の寄與した功績は決して輕いものではないが、今後日米國際關係の新たな展開となつて一時在留邦人は危殆に瀕せしめられるに至つた。從來邦人の社會的地位は決して高いものではなく、二世の多くは言語・風習共に英米式に變りつゝあつたことが心痛されてゐたのである。

宗教は殆ど佛教で、東・西兩本願寺を始め各宗派の寺院がその特異の建築様式を以て、オアフ、ハワイ、マウイ、カウアイ、モロカイ、ラナイの各島に建立されてゐる。

四 政治・教育

1 政治
議員投票権を有する有権者數(一九三六年現在)は、原住民二一、六六五名、アメリカ人一二、四六名、イギリス人七五六名、合計七五、〇五九名である。議會は、上下兩院より成り、上院議員數一五名、任期四箇年、下院議員數三〇名、任期二箇年となつてゐる。

2 教育
学校教育は盛んであつて、一九三七年の調査によれば、小學校の數は一八六校で、就學兒童の數八萬六千餘、外に師範學校・教員養成所・商業學校・手藝學校・盲啞學校・虛弱兒童のための特種學校・感化院等があり、ハワイ大學には七九人の教授、一、九〇〇人の學生が居り、遜逸仙は英語學校の出身である。日本人小學校の就學兒童數は四四、〇〇〇餘人、支那人小學校には約六、六〇〇人の兒童が就學して居た。

五 産業

1 農業

代表的な作物は第一が甘蔗、次いでバナナツプルで、この二つは諸島の経済上最重要の位置を占めてゐる。その他にはコーヒ、バナナ等がある。甘蔗は貿易風の風上の山麓では高温と多雨に恵まれて、灌漑の必要なく良好な生育を見せるが、多量の生産は島々の西南側の乾燥地に灌漑して行はれる。主要産地はハワイ島、マウイ島、オアフ島、カウアイ島等で、オアフ島のパール溝沿岸は特に重要である。
砂糖―砂糖生産は、既に一七七八年クックの発見當時から原住民間に行はれて歴史の古いものである。近年の産額は一九三〇年前後は略々九〇萬噸であつたが、面積の狭い島嶼の生産としては極めて優秀な成績である。

バナナツプル―他の熱帯地域よりも此のハワイ諸島によく出来る。特にオアフ島には特殊な栽培法を以て盛に栽培される。米國は最大の市場であるが、腐敗し易く従て生果の多くでは送り難く、安い砂糖を使つて罐詰に製造したり、乾燥バナナツプルにして積出す。

バナナ―バナナは主として米國大西洋岸の市場向に生産されるが、大部分は島内の消費に向けられる。

米・玉蜀黍―これらは重要な生産で、邦人も盛に其の栽培に従事してゐるが、米は日本人・支那人による消費多く、生産は常に不足し、年々カリフォルニア州方面から多量の輸入を必要としてゐる。

コーヒ―殆ど邦人の手で栽培されるが、その品質の優良なるにも拘らず、米國市場では價格の廉い中南米の商品に押され勝ちである。

2 其他

畜産物は牛が主で、島内消費の乳及肉を供給する。又工業は糖業・罐詰製造業等の外特に見るべきものはない。

六 貿易

米國の領有後に於るハワイ諸島の生産は、アメリカに於る生産・消費

との關係に於て大きく連結されてゐる。従てその貿易は直接外國との關係に於ては少く、僅に四―二%で、大部分がアメリカとの間に行はれてゐる。

ハワイの輸出品は島内の重要生産である粗糖が五〇%以上を占め、之に次いでバナナツプル罐詰・同汁等で、總輸出額の一〇分の九以上を占めてゐる。輸入品としては食料品・綿製品・鐵及同製品、石油及製品等で、自動車・工業機械等も少くない。我國との貿易は極めて僅少で、年額一千萬圓(邦貨換算)程であるが、その金額・種類共に人口の三九%以上を占める日本人の需要に關係する。即ち我國からの輸入品は、食料品・織物等で、輸出品としては鐵類特に屑鐵に限られてゐた。

即ち輸入二八一萬餘弗、輸出八萬一千餘弗であり、砂糖の總輸出額は六、八〇〇萬弗に上つてゐた。

輸出入額表

年次	輸入	輸出	輸出超過
一九一三	三三五	四七五	一四〇
一九一四	八八一	二九五	一六〇
一九一五	九二四	一〇八四	一六〇
一九一六	九二二	一〇〇九	九八
一九一七	八六九	一〇二七	一五八
一九一八	六三二	八四四	二一二
一九一九	六三二	九四三	三一一
一九二〇	六三二	九四三	三一一
一九二一	六三二	九四三	三一一
一九二二	六三二	九四三	三一一
一九二三	六三二	九四三	三一一
一九二四	六三二	九四三	三一一
一九二五	六三二	九四三	三一一
一九二六	六三二	九四三	三一一
一九二七	六三二	九四三	三一一
一九二八	六三二	九四三	三一一
一九二九	六三二	九四三	三一一
一九三〇	六三二	九四三	三一一
一九三一	六三二	九四三	三一一
一九三二	六三二	九四三	三一一
一九三三	六三二	九四三	三一一
一九三四	六三二	九四三	三一一
一九三五	六三二	九四三	三一一
一九三六	六三二	九四三	三一一
一九三七	六三二	九四三	三一一
一九三八	六三二	九四三	三一一
一九三九	六三二	九四三	三一一
一九四〇	六三二	九四三	三一一
一九四一	六三二	九四三	三一一
一九四二	六三二	九四三	三一一
一九四三	六三二	九四三	三一一
一九四四	六三二	九四三	三一一
一九四五	六三二	九四三	三一一
一九四六	六三二	九四三	三一一
一九四七	六三二	九四三	三一一
一九四八	六三二	九四三	三一一
一九四九	六三二	九四三	三一一
一九五〇	六三二	九四三	三一一

對米國貿易額表

年次	輸入	輸出
一九三三	六三三、七六六	九八、九七九
一九三四	七八、九二七	八五、七四三
一九三五	八五、七四三	一三、五七五
一九三六	一〇四、一八〇	一三、一八二
一九三七	一〇四、一八〇	九、六五五
一九三八	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九三九	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四〇	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四一	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四二	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四三	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四四	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四五	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四六	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四七	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四八	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九四九	一〇四、一八〇	二、二〇六
一九五〇	一〇四、一八〇	二、二〇六

七 交通

オアフ島のホノルル港を中心に、米・亞・濠との間に航路・航空路がある。米國との航路は國內航路として取扱ひ、外國船は貨客の取扱が出来ないが、最も頻繁に汽船の連絡がある。ダラー汽船、日本郵船、オセアニック・スチームシップ、カナダ・濠洲汽船、ジョンソン・ライン等の諸會社はこの港を經由して太平洋横断航路を有する。

ホノルルが太平洋中重要な位置にあることは既述したが、こゝではハワイ産の砂糖・果實の外にカナダ、米國、バナナ、日本、支那、フィリッピン、濠洲、新西蘭及南米西岸の各港からの船舶が輻輳するので、中太平洋諸島…米領太平洋諸島

續港として随時に貨客を集めることの出来る利益がある。

航空路はサンフランシスコ港―ホノルル港―ミドウェイ島―ウエイク島―グアム島―マニラ港を經由して、香港に至る一三、〇〇〇軒に及ぶ世界一の海洋横断航空路がこの地を經由してゐた。

なほ一九三九年に於る鐵道は三三三哩、就中一六八哩がオアフ島にある。

又最近に於る自動車登録臺数は左の如くである。ハワイ縣内に於ては一九三九年一月末日現在六六、四一〇臺(この内オアフ島―ホノルルの所在する―には四四、五五一臺)で、この外一、三四二臺の免稅車(領事館・合衆國市郡縣各官廳用及警察用)及數千臺に上る陸海軍用自動車並にトラック等は含まれてゐない。而して人口六人に付一臺の割合となつてゐる。

八 主要島嶼

1 ハワイ島

諸島中最大の島で總面積の三分の二を占める。水深五、〇〇〇米の海底に出現した最新の火山島で、マウナケア、バウナロアの海拔四、〇〇〇米以上の火山を有する。

一九一一年に政府はキラウエアに火山研究所を作り、一九一六年にはキラウエア、マウナロアを含む國立公園を設けたが、キラウエアを訪れる觀光客は例年六萬人に達すると言ふ。

活火山は觀光の價値の優なるものであるが、こゝに尙多數の鍋狀火口・硫黃堆・輕石層・熔岩隧道・樹型等各種の熔岩模型と、熔岩鑛乳石・火山

毛、或は熱帯林と鳥、硫黄泉等が夫々特筆に値する。ヒロは殆ど邦人の居住で占められ、附近に甘蕉・バナナツプル等の生産が多く、又製糖業が行はれる。西岸のカイルアは舊都で、その南方に探検家クックの遺難地がある。

2 マウイ島

ハワイ島の北西にあり、アレヌイハ海峡を以て隔てゝゐる。婦人の頭又は半身像の様な形で、二つの大きな火山から成る。その中間の地峡部は低平な砂洲で、南方のハレアカラ火山には大火山があり、頂上からの展望は最も雄大である。

3 モロカイ島

こゝにも二火山が並び、東北海岸は侵蝕が進んで、観光地として知られる。

4 ラナイ、カフラウエ島

此の二島は単一の火山島である。北東側はマウイ、モロカイ二島のために静かな海面を有し、南西岸には海崖の發達がある。

5 オアフ島

曾て二つの巨大な火山の島であつたが、侵蝕の結果コウラウ、ワイアナエの二平行山脈に分れてゐる。

南岸のホノルル(人口一三・八萬人)は海岸に沿ふて約一〇哩の區域を占め、背後の山と谷とに延びて、六〇〇乃至七〇〇米の高さまで達してゐる。市域の中央部に港と商業區と中心街がある。背後にパンチボール火山があり、東端はダイアモンド・ヘッドの火山口になる。

港は島嶼間の交通の中心で、海底電信・無線電信の要衝に當り、オアフ島内にも電車の便がある。動力・ガス・電燈・電話・水道等の文化施設は完備してゐる。都心には廣い公園があり、その附近には公共建築物・地方廳・裁判所・圖書館等がある。海水浴場として世界人に知られたワイキキとダイアモンド・ヘッドとの間には運動場其の他の施設があり、ワイキキの水族館も名高い。

第二章 グアム島

地理—歴史—人口—住民—政治—教育—産業—貿易—交通

一 地理

1 位置・面積・人口

原名をグアヤン島といふ。本島は、北緯一三度二六分、東經一四四度四三分、マリアナ群島の南端に在り、當時米國海軍省の直轄で、知事は大統領から親任された海軍士官を以て充てられてゐた。長さ三二哩、幅四乃至一〇哩、面積は二二五平方哩で、一九四〇年に於ける本島人口は原住民二一、五〇二人、非原住民七七八八、その他海軍關係者七七八八、合計二三、〇六七人となつてゐる。

(而して今次大東亞戰爭勃發當初即ち昭和十六年十二月十日未明皇軍は同島アラ港に進撃し、十二日同島を完全に占領し現在は大宮島と稱してゐる。)

2 地質・河川・海岸線・氣候

本島はミクロナシア最大の島である。島は錐礁により圍繞せられ、陸地は平地少く一般に山地に富んでゐる。北部と南部は地質を異にし、従てその自然景觀も全く趣を異にしてゐる。即ち島の北部は珊瑚石灰岩で數段の段丘をなし、その面はロクノ夫と著しい類似が見られる。最も廣い面は海拔一八〇米で、其處は全く不毛の地である。

中部以南は安山岩質で、山地に富み、三〇〇乃至四〇〇米の丘陵地が連續し、平地は海岸と河川の下流の流域地のみ存在する。河川の發達は中部以南に限られてゐることは北部が浸透性の隆起珊瑚礁地帯である以上當然であらう。南部の河川は何れも灌溉用水として耕作に使用されて居るが、舟楫に供せられる程の川はない。

眞珠灣(パール湾)はホノルルの北西一一軒にあり、太平洋に於る米國最大の海軍根據地である。

6 ニイハウ島

カウアイ島の西二四軒にある小島で東部にはバニアウ(三九七米)の山地があり、西方は隆起珊瑚礁の平坦地である。牧羊が行はれるが、住民は少い。

7 カウアイ島

最も古い火山島で、解析が進んで濃緑の森林に蔽はれてゐる。ワイメアの大峽谷は一、〇〇〇米の深さで、コロラドのグランド・キャニオンに匹敵し風景に勝れてゐる。

8 ミドウェイ島

一八六七年、アメリカ領となつた本島はハワイ諸島の西北端即ち北緯約二八度、西經一七七度半附近にある極めて小さな珊瑚島であるが、サンフランシスコからホノルル經由のグアム島に通ずる海底電信の中繼所であり、且つ又空港として重要視されて居る。

本島は軍事上、飛行艇及潜水艦基地として使用に適し、最近ではアメリカ海軍が約五〇〇萬弗を以てこの島に空軍の基地と潜水艦の根據地を設けてゐた。

尙附近には多數のアジツシ、軍艦鳥や塘鵝類の海鳥等が棲息し、ミドウェイ島の一つの名物となつてゐる。

海岸線は屈曲少く、僅に西側にオロテ半島が突出してゐるに過ぎず、従て港灣として利用されるのは、この半島と堡礁により形造られてゐるアラ港のみで、タロフオフは沿岸用小艇の發着以上にはなり難い。所謂アジア季節風地帯に屬する高温多雨で、一年のうち六箇月は北東及東北東の貿易風が卓越する。乾燥期は、大體四月で、六月から一月にかけては南西の季節風が吹く。雨期に於ける降雨量は月平均五乃至一五吋で、年平均は八一吋である。氣温は年中殆ど一定で平均八一度(華氏)、最高氣温は平均八八度、最低は七二度である。

二 歴史

グアム島は一五二二年三月六日、フェルジナンド・マゼランが彼の歴史的な世界周航の途中發見した島で、ミクロナシアに於て最も早く世に知られた島である。

其の後一五六六年一月二日スペイン人レガスピが國王フィリッパ二世の命を受け、三隻の船體を率ゐて此の島に來航、この時以後グアムはスペイン領となつた。

一六六五年偶々マキノコよりマエラに巡行中のジェスイット派の神父サン・ヴィトレスは無智な原住民の境遇を憐みてこの地に定住し、専ら布教に力を盡したが、程なく原住民との衝突があり、サン・ヴィトレスを始め多くの殉教者を出した。茲に於て政府は之が膺懲の爲出兵し、遂に民政官を常置して統治を行ふやうになり、こゝに於てグアムは名實共にスペイン領となつたのである。爾來本島が米領となるまで、其の間治績として見るべきものは全く無かつた。

一八九八年、米西戰爭の結果、マリアナ群島の中、このグアム島のみが米國の領有になつたのであるが、このことはグアムが他のミクロナシアの島々に比して一段と有力なものであつたと言ふことに他ならない。

三 人口・住民

住民の根幹をなすものは言ふまでもなく原住民のチャモロ族で、一九三七年には二〇、六六二人を数へ、アメリカ人其他一、四五人合計二二、一三七人である。

原住民以外ではアメリカ人の居住者が多く、アメリカ海軍の將校及兵卒・海軍看護婦・アメリカ事業会社の業務員等で、その数は八八三人であつた。尙ほアメリカ人でチャモロの女と結婚して定住した者も七〇人近くあるが、彼等は猶ど嘗てはアメリカ海軍の軍籍にあつた者である。アメリカ人以外の白人は八〇人、その中ではスペイン人が最も多いことは以前スペイン領であつたことに因る。日本人は當時四三人で商業に従事してゐたが、その地位は現在極めて不安定であつた。比律賓人の定住者は相當あり當時一九八名であるが、大部分はタガログ族の者らしく、中にはスペイン領時代原住民軍として比律賓からこの島に駐屯を命ぜられた者が、その儘チャモロ化した者もある。比律賓人の数は實際にはもつと多いだらうと思はれる。大體グアム在住の比律賓人は本土との往來が頻繁であるため其の数は一定してゐない。彼等は大部分官廳や會社の事務員として働いてゐた。尙ほ支那人は僅か二名に過ぎない。

四 政治・教育及軍備

1 政治

一八九九年以來、米國大統領の任命にかゝる長官の支配下にあり、この長官には代々海軍將校が任命せられてゐた。グアム島に於ける行政は特に軍政と言ふ譯ではないが、長官は立法權を行使し、法律に等しい效力を有する行政命令を發する權能を持つてゐるので、かなり權力は強い。住民のチャモロ人は殆ど一切のアメリカ市民權を享有してゐるが、義務は餘り課せられてゐない様である。主要な収入は、この島の海軍根據地の爲に消費される費用で、一九三八年度には九五九、八九五弗の聯邦資金が消費され、同年のグアム島總収入は三一、〇七二弗であつた。

島内に於る學校数は小學校十六、中學校一、高等學校一、米人のみの爲の學校が一枚ある。

3 軍備

アメリカはグアム島を以て前進海軍根據地とし、アラバ灣に近いアガナに政廳を置き、海陸兼用の空港を設け無電塔を建て、一九三九年一月には五百萬弗を投じてアラバ灣の浚渫擴張・格納庫・兵舍等を作らんとする軍備豫算が近來二回に亘り米國議會に提出され、大統領の承認を求めた。これに對してイギリスは徒らにグアム島防備の強化に油を注ぎ世辭を振替くの愚をなして居る。本島は飛行艇基地であつて目下特務艦三隻を配備して警備に任じてゐるが、更に潜水艦及水上機基地の施設を進める計畫をして居た。

五 産 業

1 農 業

グアムの産業中主要なものは農業で就中古々椰子の栽培である。従てコブラ・椰子油が主要な輸出品となつてゐる。ココアの栽培も十分成功して居り、その生産品はマニラに於て高價に取引されてゐる。

其の他コーヒーはスペイン人によつて齎されたアラビカ種が島の各地に栽培されてゐるが、島内消費以上の生産は出でゐない。

甘蔗の栽培も近年盛になつたが、これも量的には未だ問題とならない。米・麥は原住民の主食物なので相當栽培され、殊に島の南部は河川の灌漑により米作が盛に行はれてゐた。

2 家 畜

牛の三千頭、水牛の九百頭、豚・羊の飼育も行はれ、その数は人口の割に多いやうである。

3 鑛 産

マリアナ群島の他の島と同じく燐鐵石の埋藏が豫想されるが、現在ま

チャモロ人の享有してゐる諸便益の多くはグアム島自體の收入で支辨されるのではなく、聯邦資金によつて支辨されてゐる。是等諸便益の主なるものは、首都アガニヤの道路・上下水道・電氣・電話・海軍病院・衛生局等である。

島には數個の病院や診療所が設けられてゐるが、何れも大したものではなく、グアムで病院と言へば海軍病院だけと言つても良いし、醫者は殆ど海軍醫官と言へる。海軍病院の設備は極めて完備し、チャモロ人に對しては無料で醫藥を與へたり手術を行つてゐる。その費用はアメリカ海軍當局から支出されると共に二萬弗の特別資金が充てられてゐた。衛生状態は大體良好で、マラリア・黄熱病及コレラは存在せず、癩病も癩患者を比律賓のキエリオンに隔離して以來その跡を絶つた。

このやうな衛生に對する當局の努力はチャモロ人の人口の増加、即ち一九二八年の二〇、六一七人から一九三四年の一八、九九四人、更に一九三七年の二〇、六六二人になつたことによつても證明される。

2 教 育

當時グアム島に於る教育も醫療機關と同様整備されてゐる。即ち初等教育等は義務制で、約二千の生徒が就學してゐた。そこでは英語により手藝や農業が教へられてゐた。

更に専門的に農業を教へる農學校があり、別に中等程度の教育を行ふものがあるが、之は隔日に夜間開校し日中勞働に従事する學生をも收容してゐたのは興味深い。是等の學校の優秀な卒業生は官廳に奉職する機會が與へられてゐたが、教師になる者も少くない。

當時一〇名以上の原住民の教師が居り、その俸給は一日六〇仙から一弗二五仙の間であるからその待遇は悪くない。尙ほ他に二つのミツシヨン・スクールがあり、一つはローマ・カトリック他はバプテスタ經營のものであつた。上層階級の裕福なチャモロ人の子弟にはマニラ、香港或はアメリカの學校で學んだ者もあり、その成績は比律賓人と大差ない模様である。

で鑛産資源の調査は全く行はれてゐない。

六 貿 易

主としてアメリカ及比律賓との間に行はれてゐたが、輸入品の中、雜貨類は日本から相當行つて居り、一九三六年に於る日本品の輸入は約七萬弗であつた。

輸出入貿易額表

年次	輸 入	輸 出
一九三一年	五三、二九五	一、〇八一
一九三二年	七、四二四	一、一、一〇一
一九三三年	六、三五一	一、五、〇四〇
一九三四年	六、五九六	一、二、一七二
一九三五年	六、四二九	一、〇、一七二

主要品別輸入額表 (一九三六年)

品 別	價 額	品 別	價 額
食 料	一、三、九三二	靴及スリッパ	一、四、四二六
綿 織 品	二、九〇八	精 製 糖	一、八、九四五
自動車・自轉車	七、四六七	木 材	五、八六四
石油・石油産品	一、九、六〇七	金屬・金屬製品	一、七、九五五
葉卷、巻煙草	二、五五三	絹 織 品	二、〇七九
葉 煙 草	六、六七一	葉 子 類	六、六七一
各種文具類	三、七三三	燒物・硝子器	二、七三四
各種家具類	七、九六五	セ メ ン ト	一、九四七

七 交 通

交通機關としては比律賓・支那・ハワイ及米國本土との間に定期航路があり、ダラー汽船が三箇月に一回の割に就航し、主として米國陸海軍の要求する物品資材の運搬に當つてゐた。

一九三六年までは二隻の日本小汽船が横濱リグナム間を往復し、雜貨類の輸出に當つて居たが、最近は邦船の寄港は禁じられてゐた。島西南部のアブラ港が是等船舶に開放された唯一の港である。島内の交通は主として自動車であるが、島民は小ボートによる沿岸傳ひの交通も行つてゐる。自動車道路はアメリカ領だけあつて、而も軍事的目的もあるもので、その發達は他の施設に比し著しく、主要部落間及沿岸の道路は自動車道路として申分のないものであらう。

第三章 其他の米領諸島

米領サモア諸島…其他の島嶼

一 米領サモア諸島

1 位置・面積・人口

本諸島は、英領サモア諸島の東、南緯一四度半、西經一七一一度に在つて全面積六六平方哩、左の島嶼から成つて居る。一九三七年の人口は一、九〇六人である。

島嶼名	面積	人口
ツツイラ島	四〇	九、三〇〇
マヌア群島	一八	二、四五〇
スワイン島	一・五	一、二六

2 沿革

本諸島の歴史は英領サモアと略同一で重複する爲省略する一八八九年、英・獨・米三國が協約して一時中立地帯として獨立を認めたとがあつたが、屢々内亂があつたので、遂に西サモア群島は獨逸領に、東サモア諸島は米領に歸してしまつた。スワイン島はゲンテ・ヘルモサ島又はオロセンガ島と呼ばれ、曾ては英領であつたが、一八七〇年米人エリ・ジェンニングが來島して、酋長の娘を娶つたことがあつたので、此の事實を認めて、終に米領となつたのである。

バゴバゴはツツイラ島にあつて、一八七二年米國に讓渡され、現在は軍港となつて居る。

本諸島中の最東端に在るロース島は無人の環礁であるが、飛行艇基地としての價値は、ツツイラ島のバゴバゴよりも勝れてゐると言はれて居る。

3 行政

長官は大統領これを任命し、一海軍大尉を以て之に充て、群島を六區に分ち統治させて居る。土地の賣買讓渡は禁止され、又飲酒は禁じられて居り、租借權は四十年を限り許可されて居る。一九三六年の輸出は一九、二四〇弗、輸入は三七、四七〇弗である。

二 其他の島嶼

1 大島島(ウエイク島)

北緯一九度一八分、東經一六六度三五分に在り、鰐魚を以て有名なると共に飛行艇及潜水艦基地として米國は大規模の設備を施して居た。

2 ハウランド島

北緯一〇度、西經一七六度、フェニックス諸島の北三〇〇哩、我が委任統治マーシャル群島の東南約八〇〇哩にある面積約四〇〇エーカーの小島である。今より約五十年前の地圖には英領と記されてあるが、英國は此の島を何等開發せず永らく放置してあつた爲、一九三五年五月米國は突然領有を宣し航空基地を設けた。一九三八年米國女流飛行家イヤ・ハート女史の濠洲飛行に際し陸上飛行場を建設し、又無線電信所がある。

3 ベーカー島

ハウランド島の東南四〇哩、殆ど赤道直下にある海拔二五呎、長さ一哩計りの珊瑚礁である。一八三二年捕鯨船長ミカエル・ベーカーが本島を發見し、次いで一八三五年ジャービス島を發見して兩島の米領たることを宣した。本島は曾て少量の燐礦を産したが掘盡して今日は皆無である。

4 カントン島

フェニックス諸島の一島でマリー島とも言ふ。英領か米領か其の所屬は未定である。一九三六年英國短樺帆船レイス號が來て英國旗を樹立し、翌年再航してクリスマス島に無電柱を設けた。同年六月英國艦ウエリントン號は日領觀測隊員を乗せて本島に寄港した。

太平洋諸島…米領太平洋諸島

之と殆ど同時に米艦アボセツト號も同目的で本島に來泊し、米領たることを主張し、其の後著々施設を進め、カントン島の使用を汎米空輸會社に許可したと言はれる。

本島は曾て燐礦を天産したが掘盡して了つた。島の長さ八哩、幅四哩、少量の椰子を産す。

5 ジャービス島

南緯三度、西經一六〇度に在る無人島で少量の燐礦を産す。一八八九年英艦コルモラント號が來て英領とし、其の後一九三五年に米艦が占領したが、英國は之に對し別に抗議を申入れなかつた。

6 パルミラ島

北緯六度、西經一六二度半に在る面積僅に一平方哩半の小島である。一八〇二年パルミラ號船長米人ソールの發見に係る故に、此の名を附せられたものである。

7 ジョンストン島

北緯一七度、西經一七〇度に在る。一八五九年頃迄は多少燐礦を産したため英國は之を原住民から借りて居たが、一八九二年遂に併合して了つた。然るに其の後之を放棄しハワイ群島の一部として顧みなかつた。一九三四年に米國はウエイク島、サンド島、キングマン礁と共に占領して海軍省の直轄とし、飛行艇の基地とした。

II 英領太平洋諸島

第一章 フィジー島

地理—歴史—人口—住民—政治—産業—貿易

一 地理

1 位置・面積

本諸島は我が委任統治マーシャル群島の東南一、五〇〇哩、子午線を挟んで南緯一七度附近にある。約二五〇の火山岩島嶼から成り、内一八〇島は無人居、面積は七、〇八三平方哩である。

2 島嶼

主なる島嶼としてはウイテレブ、ヴァヌア・レブ、ヤサワ、タビウニ、カンダブ、トトヤ、ロトマ、オバラウ、ウアト島等がある。

二 歴史

西暦一六四三年スペイン人デ・キロス及オランダ人タスマン発見、一七六九年キャプテン・クック來航、一七八九年キャプテン・ブライはパウンター號にてヤサワ島に上陸、部下の反抗に遇ひ、舟に乗つてパタピアに逃走した。其の後原住民との間に活闘を生じたが、一八七四年に至り、遂にイギリスに併せられた。

三 人口・住民

一九三八年に於る住民總数は二〇五、三九七名で、この内譯は左の如くである。

ヨーロッパ人	四、三三六	原住民	九九、五九五
混血人	四、七五八	ローツマ人	二、九一五

他島人	一、五七七	其計	一、二五六
印度人	八九、三三三		三〇、五三七
支那人	一、八三七		

となつて居り、原住民メラネシア族はポリネシア人の血統を受け、容貌魁偉、性兇暴、未だに折々首狩の蕃風を有し、老幼の病者は無用物として打殺すといふ。

四 政治

英國皇帝親任の西太平洋民政長官は本島に在つて、その下に七人の行政官と、三人の立法官を置き、全島を一七の行政区に別ち、土語コロタイなる稱號を有する酋長格をして島民の統治に當らしめて居る。

五 産業・貿易

本群島は、會て棉花栽培が盛んであつたが間もなく衰微し、これに代ふるに甘蔗を以てし、印度から多數の契約移民を募集移住せしめた。現在本群島内には四〇有餘の製糖工場があり、一九三七年中砂糖の輸出高は百萬噸を超過して居る。この外椰子・棉花・煙草・ゴム・玉蜀黍・コーヒ・カボック・パイナップル・バナナ・米・ココア・牛酪・木材・家畜及少量の金がある。バナナの如きは、僅か一エーカーの土地にて三萬封度の收穫があるといふ。

尙一九三八年に於ける輸入額は一、七六一千磅、輸出額は二、二一三磅に及んでゐる。

第二章 ギルバート及エリス諸島

一 ギルバート諸島

1 位置・面積

本諸島は我が委任統治マーシャル群島の東南僅に二〇〇哩、赤道を南北に挟み、東經一七三度附近にあつて、南北に羅列する一六の小島から成つて居る。面積一六六平方哩。

最初の発見者は英船長バイロンであつて、一七六四年東端の島を発見し、次で英船長ギルバート及マーシャルの兩人は、北方の諸島を発見したといふ。

2 人口・住民

一九三六年に於ては二六、三四〇人、熱帯太平洋群島中最も人口稠密の島で俗にキングス・ミル群島と呼ばれて居る。

住民中、ハワイに出稼ぎして居るものが多いが、成績は良くない模様である。一九二一年中に留白人数は二六四人、支那人三五〇人となつて居るが、今日は著しく減少を示してゐる。原住民は多くの方言を有し、會ては部落と部落、島と島とが互に闘ひ、刳木舟を操つて遠征し首狩を行つたものであつたが、今日は最早そのやうな事はなく、良く基督教化されて居る。

二 エリス諸島

本群島は一七八一年スペイン人マウレリアにより発見され、次で一八一九年、島の南部は英人船長ビーターによつて発見された。一八九二年ギルバート島と共に英領となつた。フナフテ島に政廳及牢獄が設けられて居り、イギリス植民省に直轄されて居る。本群島の位置は、我がマーシャル群島の東南八〇〇哩、南緯五度乃至一〇度半、東經約一七六度乃至一八〇度にあつて、面積僅に一四平方哩、人口四、一二三（但し一九三

六年）人、九つの小島から成り、島は低く海拔數米を出でない。島民は悉く基督教化されて居る。又今日エリス人と言はれて居る四千餘の島民は、サモア人の血統を受けて居るものばかりであると言はれてゐる。

第三章 ソロモン群島

1 位置・面積

本群島はイギリス植民省直轄植民地である。我が委任統治マダガスカル島の南五〇〇哩、東經約一一五度乃至一七〇度、南緯五度乃至一二度半に位し、西北より東南に二列に並ぶ。東にサンタクルス島、東南にニューヘブライズ諸島、西にニューブリテン及ニューギニアの諸島があり、面積一四、六〇〇平方哩である。

2 人口

一九三七年の人口は九四、〇九四人（内原住民九三、四一五—内譯メラネシア人八九、五六八、ポリネシア人三、八四七—支那人一九二、歐人四七八、その他九）であつて、メライタ島に四〇、〇〇〇人、ブーゲンビル島に四七、〇〇〇人の集團をなしてゐる。

3 住民

本群島の原住民は數十の方言を有し、兇暴なるメラネシアの首狩食人種であると報道された爲、宣教師は布教に躊躇して居るが、實狀は夫程でもなく、一度蕃人から信用を受ければ、襲撃されるといふやうなことは滅多にない。然るにメライタ島の蕃人のみは、昔も今も同様に白人を憎惡し、白人と見ると忽ち襲ひ掛つて首を取らなければ止まないといふ。要するに、會て白人が來て掠奪をしたり、婦女を姦したり、殺したりした罪の報ひであらう。

4 主要島嶼

ガダルカナル、ニュージョージア、ショートランサンクリストバル、

ド、ブーゲンビル、オントン、ジャワ、シヨアセーユ、マライタ、ラツセル、イサベル、シキアナ、サボ。

これ等の島々には海拔二、〇〇〇米餘の山が高く聳え、草木繁茂す。殊に南部の諸島は牛馬の放牧に適し、各島間は水清く深い海盆にして山紫水明、所謂龍宮の觀があり、旅人の賞嘆措く能はざるものがある。

5 其他

ガダルカナル島には原住民の藝術指導の爲公立工藝學校の設けがあり、又教會堂で必要とする什器が製作されて居る。マライタ及ガダルカナル島には、多數の癩患者が居り、小規模ながら病院及藥局の設備がある。群島一般にマラリア及熱帯赤痢病患者が多い。曾て濠洲から一人の探検隊が来てマライタ島に上陸したが、原住民から殺された。今その殉難紀念碑が建つて居る。

第四章 トンガ諸島

一 地理

1 位置・面積

我が委任統治マーシャル群島の東南約一、八〇〇哩、南緯一五度乃至二三度半、西經一七三乃至一七七度に在り、一名フレンドリー群島とも呼ばれ、島數約八〇〇、面積約二五〇平方哩となつてゐる。

2 主要島嶼

トンガタブ、ノムカ、トフオア、フアルコン、ハーバイ、エウア、ウオバウ、ニウアトプトンブ、アタ、フオヌアレ、カアファ、フンガハ、アバイ。

二 歴史

一六一六年、オランダ人レ・マイアール及シユハウテンの兩人が初めて

ニウアトプトンブ即ちケツベル島に寄港し、一七六七年サムエル・ウォーリスが來島した。一六四三年タスマンはトンガタブ及ノムカ島に來航して之にアムステルダム島及ミッドルブルヒ島と命名した。

本群島は熱帯太平洋に於る唯一の君主國であつて、一千年以上の歴史を有する。

三 人口・住民

1 人口

一九三八年の人口は三三、七九五名（内歐人四〇七、混血兒四七七、原住民三二、四九〇餘、その他四一人）である。フィジー島スバ政廳の管轄下に置かれてゐる。一九〇〇年五月英國保護領となり、立憲政治を布き女王の下に英人理事官が居る。

2 住民

ポリネシア族にして基督教信者約二萬、モルモン宗を信奉するもの約二千と言はれる。

四 行政

女王はトンガ全群島を支配し、總理大臣以下六大臣を以て内閣を組織して居る。辨務官、司法・土木及財務の各長官と、檢事總長等は、イギリス人である。而して又クアロファに政廳を置き、二名の議員の外、數名の行政及立法委員が居て政治に參與してゐる。陸海の軍備なく、又公債を有せず、専ら英貨を使用し、學校教員の給與及衛生費は一切官費を以て之を支辨す。一九二四年には一〇六の小學校があり、五、〇〇〇の就學兒童がゐた。首府には王宮があり、電燈・電話及無電設備等がある。要するに事實上、イギリスの植民地であると言へよう。

五 産業・貿易

數名の邦人漁夫が居て海鼠を漁つて居る。群島の北方約四〇〇哩附近

では、魚族が豊富に漁獲されるといはれて居る。貿易としては年額三〇萬磅の椰子を産し、一九三七年の輸出一六四、六〇〇磅、輸入一三七、四〇〇磅である。

第五章 ナウル島

(舊獨領—英國濠洲及新西蘭共同委任統治領)

一 地理

前歐洲大戰後、英國・濠洲聯邦及新西蘭の三つによつて共同委任統治されて居る。我がマーシャル群島の南端エボン島から三〇〇餘哩、赤道を南に越ゆる僅に二六哩。東經一六六度五六分に在る。東百數十哩に燐礦石で有名なオシアン島がある。島の周圍一二哩、面積八平方哩餘で、オシアン島と大同小異である。一九三九年(四月一日現在)の人口は原住民一、六五二、白人一八七、支那人一、五一六、其他二九で、合計三、三八三人となつてゐる。

二 歴史

本島の發見者は一七九八年獨逸人船長フアーンであつて、一八八八年獨逸領となり、獨逸ニューギニアの管内に置かれた。第一次歐洲大戰の起るや、濠洲艦隊はラバウルを攻略し、次で直に本島を占領した。

三 其他

本島には支那人が多く、彼等は主として坑夫、或は商人として多く入込み、商人は靴・煙草・布地等を原住民に販賣して居る。燐礦石の採掘は一九〇〇年頃から始まり、一九三六年には五四七、三〇〇噸、一九三七年六八八、九〇〇噸、一九三八年八四一、〇五〇噸(價額五四六、六八三磅)を輸出し、この中濠洲は六二六、九五〇噸、新西蘭は一、九〇、九五〇噸の輸入を仰いで居る。

第六章 クック諸島

一 地理

本諸島はハーベイ群島とも稱し、新西蘭の統治下にあり、東にツサイエター群島、西にトンガ及フィジー群島があり、概ね南緯二〇度、西經一六〇度附近に位し、我が委任統治マーシャル群島の東南約二、三〇〇哩の所に在る。島數凡そ一五、南北の兩群島より成り、火山岩を以て構成される。面積一一一平方哩となつてゐる。

二 人口

一九三九年の人口は一二、二四六名、その内譯は左の通りである。

各島の人口	
ラロトンガ島	五四三
マンガイア島	一、五八一
アイツタキ島	一、九〇〇
アテウ島	二、二六六
ミテアロ島	二、九六六
マウケ島	七二二
ブカブカ島	一、二九〇
其他	一、二九〇

就中、マンガイア(二七平方哩)及ラロトンガ島(二六平方哩)を最大とする。島民はポリネシア族にして、昔サモア島から移住したものと云はれて居る。一八八八年一〇月イギリス領となる。

三 歴史

傳説—原住民の傳説によると、昔カリタ及タンギタといふ二人の勇士がゐて、刳木舟に乗つて海洋へ出て互に覇を争つたことがある。或る島に近くなつた頃、二人は互に其の勇を誇つて闘はんとしたが、其の愚なることを知つて、兩人力を協せ、遂にクック島に上陸して、酋長の娘を娶り、遂に一人は島王となつたと言ふ。

歴史—本島は英船長ハーベいの発見に係り、これにハーベイ島の名を冠したが、その後キャプテン・クックが來航し、遂に全島にクック諸島の名を用ひるやうになつた。

四 其他

島民の殆ど全部が基督教信者である。一九〇一年新西蘭の統治下となつた。

産物としては、柑橘・バナナ・椰子・トマト・高瀬貝・蝶貝等を主要物産とし、一九三七年の輸出總額八六、三〇〇餘磅、輸入總額八六、五〇〇餘磅、我が國から二、三六八磅の輸入があつた。

クック群島の西、凡そ五八〇哩にニウエ島がある。面積一〇〇方哩、人口約四、一〇〇、バナナ・帽子・椰子等を輸出す。一七七四年クックは之を發見しサベージ島の名を冠した。新西蘭領に屬し、海拔六〇〇米の山があり林産資源に富んで居る。群島内六箇所に無電塔の設けがある。

第七章 西サモア諸島

(舊獨領—新西蘭委任統治領)

一 地 理

我が南洋群島ヤルト島の東南約一、六〇〇哩、南緯一三乃至一四度、西經一七一乃至一七三度にあつて、曾て獨逸領であつたが、歐洲大戦後英領となり、新西蘭に委任統治されて居る。東に米領サモア群島がある。依てこれを西サモアとも云つて居る。面積は一、一四〇平方哩である。

二 人口・住民

人口は一九三九年(三月末推定)に於て五九、三〇六人、この内譯原

住民五五、五五八人、混血兒二、九〇七人、歐人四、二二八人、支那人三四八人、その他(メラネシア人労働者)八一人であつた。嘗て一九一四年の頃、支那人の数は約四、〇〇〇にも達したが今日では激減した。而も尙商權は専ら彼等が獲得して居る。首都はウボル島アピアである。

原住民はマオリ族と祖先を一にするポリネシア族であつて、體格魁偉、容貌も亦美しいが、性甚だ懶惰、政府は十七歳以上の男子に五エーカーの土地を與へ、自作を強制して居る。

而して本群島の最初の發見者は一七七二年オランダ人ヤコブ・ロツグヘーベンであると言はれてゐる。其の後一八一二年佛人ボーガンビエ來航し、原住民が多數の刳木舟を操縦して集り來つたのを見て、ネビグートル島の名を冠した。即ち今の東サモア群島を指すのである。

三 産業・貿易

本島は所謂太平洋の樂園の名に背かず、七〇三平方哩のサボイ、四三〇平方哩のウボル、その他數個の小嶼から成り、カカオ、椰子・ゴム・棉花・バナナを主要の物産とする。

一九三六年の輸出は一五一、四〇〇磅、輸入は一三三、二〇〇磅、一九三七年中、わが國より三九、〇〇〇磅の輸入を仰いだ。

第八章 ニューヘブライズ諸島

(英佛共同委任統治領)

一 地 理

本諸島は我が南洋群島クサイ島の南一、三〇〇哩、東經一六七度、南緯一六度に在り、約八〇の島嶼から成り火山岩を以て構成され、面積五、七〇〇平方哩、一九三八年の人口約四一、〇〇〇、内イギリス人二六〇フランス人七五〇、安南人一、〇五〇、其の他原住民である。

ニユーヘブライズ群島一九三六年の輸入は、イギリスから一二三、八〇〇磅、フランスから一〇、〇五六、〇〇〇フラン、輸出總額は僅に一二二、〇〇〇磅餘に過ぎない。

椰子・ココア・コーヒル・棉花及白檀油等を重要物産とする。

第九章 其他の英領諸島

一 トーレス海峡諸島

北はバブア、南は濠洲、その間のトーレス海峡即ちアラフラ海と、クインズランド海に散在する百數十の島嶼並に岩礁の總稱である。その大部分は、濠洲の統治下に置かれてあり、北はバブア海洋を去る三哩を離れた所を以てバブアと濠洲統治の境界線として居る。主なる島嶼としては木曜島、サイバイ島、ジャトビス島、マーレイ島、タルナゲン島、ダーインレー島、ボイグ島、デリベランス島、プリンスウエルズ島、ホーイン島、パウアン島、ヨーク島等がある。

是等の島々は、南緯一〇度線を南と北へ各々五〇哩餘、東經約一四一乃至一四四度の熱帯海洋中に在つて、概ね火山岩より成り、曾ては最も兇惡な首狩食人種が住んで居たが、今日は宗教の教化によつて文明を知り、住民の多くは眞珠貝の漁獲に従事して居る。

木曜島は面積小であるが、人口約一、七〇〇の中白人數五〇〇、曾て邦人が潜水夫となつて眞珠を漁獲した名所であるが、今日は英官憲の壓迫を受け、事業は頗る振はない。

此の邊一帶に怪奇の海獸人魚が棲息する。是等の島嶼は悉く英領であり、住民は濠洲系メラネシアで、陸には、鳥や蝴蝶が多く、住民の數は判然しないが、就學兒童の數は一、四〇〇となつて居る。尙木曜島の附近に、水曜島、クッド、ハンモンド、金曜島、プリンスウエルズ島等の小島があるが、特記すべき程のものはない。

二 歴 史

トーレス島、俗稱アバカ島がある。土語ではヴァウア島と言ひ、一六〇六年フランス人ボーガンビエが發見し、エフアテ島にはヴィラとハノーバーの兩港があり、タンナ島には病院が設けられてある。

バンクス群島—トーレス群島の東にバンクス群島がある。一七九三年イギリス人ブライの發見に依り、少量の硫黄を産す。モタ、ヴァルア、メリギ、ヴァヌア、ラバ等の小嶼から成り、孰れも英佛共同統治領である。

メレナ、アンブリム、エロマンゴ、タンナ、アネイティム、マリコロ、フトナ、エフアテ、アビ、アオバ島等あり、右の中メレナ島はエスピリト・サント島とも稱し、面積一、五〇〇平方哩、一六〇六年スペイン人デ・キロスは大體と誤認してこれを發見、聖オーストラリアと呼んで暫らく此の島に住んだことがある。その後一七六八年佛人ボーガンビエは南寄りの諸島を巡航し、一七七四年キャプテン・クックは全島を周航した。

又一七八八年、フランス政府はラ・ペローズを隊長として探検隊を派遣した。彼は此の島にニユーヘブライズの名を冠した。一八四六年イギリスは本群島を占領し、一八五四年フランスはニユーカレドニア島を占領した。

其の後、フランスはニユーヘブライズ島の領土併合を計畫したが事成らず、遂に一九〇七年、英佛共同統治を協約するに至つた。併し乍ら是等兩國の共同統治は圓滿にゆかず、殊に宗教的軋轢は甚だしく、島民中には二重の洗禮を受けたものも相當に多いといはれる。

タンナ、アネイティムの兩島には活火山があり、アネイティム島には五十年の昔、一二、〇〇〇の島民が住んでゐたが、性病に斃れて今日は五〇〇人に激減してしまつた。

三 貿易・産業

二 サンタクルス群島

ソロモン群島の東三〇〇哩にある群島で、一七六七年英人カーテレットの発見にかゝり、クイン・シャーロット或はニテンデー島とも呼ばれ、一八九八年イギリス領となつた。面積三八〇平方哩。人口約五、〇〇〇。左の島嶼から成る。

フアタカ、ベニコロ、ダフ、モトイテ、デコビア、マテイマ。

原住民の文教に關しては、從來宗教團のするまゝに放任されて居たが、今や政廳は、宗教と文教とを別箇にし、宗教に關する事項は教團に、教育に關する事項は政廳が直轄する方針になつてゐる。トラギ港及ベニコロに無電塔がある。一九二六年の輸出總額は四一八、〇〇〇磅、輸入は六六、九〇〇磅、労働者は少く、且つ未踏査の蕃界が多いので、産業は振はない。次に産物としては椰子・棉花・煙草・パイナップル・ゴム・甘藷・木材・石鹼・家畜・蠟石・高瀬貝等である。

三 オシアン島

1 位置・面積及人口

我がマーシャル群島の南三五〇哩、東經約一六九度半、南緯〇度五分にあつて周圍六哩、面積二、五〇〇エーカーに満たない海拔七〇米計りの小島である。一名バナバ島と稱す。人口は一九三八年に於ては原住民一、九三〇名、白人二四〇名、支那人六八四名、計二、七四四名となつて居る。

2 産物

本島には多量の燐礦石が天産する。其の質は良好で純分八四%に達し、南米及中米産の四〇乃至六〇%のものに比し遙に優良である。毎年六萬乃至七萬噸を採掘し、これを濠洲及新西蘭に供給して居る。

四 フェニックス諸島

我がマーシャル群島の東南九〇〇哩、南緯四度、西經一七二度附近に

海底電信

フアンニンゲ島は海底電信中繼所として重要視され、クリスマス島の西北約二〇〇哩、北緯三度半、西經一五九度附近に在つて、周圍三四哩、面積一五平方哩、人口二〇〇餘、内海底電信に従事する歐人二九人である。電信線はカナダのバムフイールドと、フィジー島のスバとの間を、本島によつて中繼されて居る。

七 マルデン島

南緯四度、西經一五五度に在る。長さ一二哩、幅六哩、面積三五平方哩、クック島に近く、少量の燐礦石を産出する。

この島は古代民族の文化を表はすピラミッドがある。學者は、イースター島及ペルーインカ帝國の巨石文化と關係があると言つてゐる。

太古この島は一大墓場であつて、死人があつた時には、小舟に屍をのせて此の島へ來り、ピラミッド型の石段で屍を焼いてその下に埋めたものであると言はれて居るが、尙ほ検討の餘地がある。

八 ヒットカイルン島

佛領バウモト群島の東南、南緯約二五度、西經約一三〇度附近に在り、ヘンダーソン、ドゥジー、オネオ島と共に一九〇二年東南太平洋の英國直轄植民地に編入されてゐる。面積は僅か數平方哩に過ぎない。

一七六七年英人カーテレットは單桅帆船スワロー號に座乗して附近を航海中、発見したものである。爾來島が小さい割合に人口が多く、殊にイギリス人の子孫が居るといふので、珍らしい島となつて居る。

ヒットカイルンといふ島の石は、スワロー號に乗込んで居た水夫ピットカイルンが逸早くこれを発見したので、その名に因んだものである。

島民の數(一九三六年六月末現在)凡そ二〇二人、海拔三〇〇米の山があつて甘藷・豆・砂糖・バナナ・瓜・パイナップル・コーヒー等を生産

太平洋諸島……英領太平洋諸島

あつて太平洋航空の要衝に當る。

面積は僅に一六平方哩、人口六〇人餘、曾て燐礦石を産出したが、今日は採掘し盡してその跡を絶つた。航空連絡の發達によつて著名となつたが、若し北米と濠洲との間に此の連絡が出来なかつたならば、或は無價値に終つたかも知れない小島である。

フェニックス群島内には、右の外マツクキノ、バーニー、ハル、シドニー等の小島があるが特記すべきものはない。一八九二年イギリス領となり、植民省の直屬となつて居る。

五 ユニオン群島

現在新西蘭統治下にあつて、時々軍艦が巡航、警戒をして居る。南緯一〇度、西經一七二度、前述英領サモア群島の北にあつて、三つの小島から成り、面積僅に六平方哩に過ぎないが、原住民にはサモア語と使用する一、一九一のポリネシア人が居て、椰子の栽培に従事して居る。無電塔が設けられてあつて、これに熟練した原住民だけで放送をして居る。ユニオン群島の内、スワイン島のみはアメリカ領である。

六 クリスマス島

位置・面積及産物

ハワイ群島の南、北緯約二度、西經一五七度半附近にあつて、バルミラ、ワシントン、フアンニンゲ島等と共にライン・ランド或はアメリカカン・アイランドと呼ばれ、海面に低く露出せる大環礁で、ギルバート群島から移住した原住民が少數住んで居る。陸地の面積は僅に約六萬エーカーに過ぎない。米國は航空の基地にせんものと策動し、これに對して英國では軍艦を此の地に派遣し、或は無電塔を設置し、非常に備へて居る。

中央太平洋椰子栽培會社は、一九一四年以來七十五箇年間の租借に對し、毎年二〇〇〇磅の税金を拂ひ椰子栽培の外、蠟貝及燐礦の採集をも行つて居る。

し、父家筋が飼はれて居る。二人のアメリカ人が居て、短波ラジオを握えて世界のニュースを島民に傳へてゐる。

九 ビスマーク群島(舊獨逸領)

1 位置・面積

本群島は我が南洋群島カロリン群島の南方僅に三〇〇哩、東經一五〇度、南緯四度に在り、面積二一、〇〇〇平方哩、一九三七年の人口一三六、六八一名である。

2 主要島嶼

ニューブリテン、ニューアイランド、アドミラルティ、ニューラウエンブルグ、ニューハノーバー、ガルドナー、アブガリス、ウネア、ニツサン。

群島は火山岩より成り、地味瘦せ、椰子の栽培は出来るが、其の他の栽培には適しない。元獨逸ニユーギニアの屬島として、一八八四年宰相ビスマルクによつて占領を確保されてゐたが、歐洲大戰後、濠洲委任統治領となりラバウルに政廳を置いた。

3 ニューブリテン島

本島は一六九九年英人ダンピルが発見したもので、面積約一三、〇〇〇平方哩、一九三七年の人口八六、九一四人、山中に住む蠻人中には、今尙ほ食人の蠻風を有するものが居るが、ガゼル半島は良く開けて居る。島形は三日月型に東西に横はり、數座の火山が中軸となつて走り、港灣は尠くない。就中シンブロンは良港である。夏季は季節風の影響を受けて雨量多く、終年酷熱、白人永住の地ではない。

4 ニューアイランド島

本島は土語トンバラ島といひ、一六一六年レマイアア及シニハウテンの兩オランダ人が発見した。聖デヨーデ海峽を距て、ニューブリテン島に對し、海峽内に、ニュー・ラウエンブルグ即ちデューク・オブ・ヨーク群島がある。島民は良く教化され、島内多量の棉花を産す。全面積

三、〇〇〇平方哩で、一九三七年の人口三六、三六五人あり、カビエン港には、一九一三年病歿したプロミンスキ長官の頌徳碑がある。

5 アドミラルティ諸島

本群島は南緯二度附近に在つて、面積八〇〇平方哩、一六一五年オランダ人シユハウテンの発見にかゝり、一七六七年獨逸軍艦スワロー號が來り占領した。一九三七年の人口一三、三九二人、七〇〇平方哩のマヌス島を最大とする。

二人の歐人宣教師、一六八人の原住民傳道師、三五〇箇所の講義所、九、〇〇〇の基督教信者が居り、ビスマルク群島中、最も教化された島である。

(備考) ビスマルク群島に關してはニューギニア編東北ニューギニアの部に若干記載されてゐる。

III 佛領太平洋諸島

第一章 ニューカレドニア

位置・面積：歴史……人口……住民……政治……産業（農業・牧畜・林業・水産業・鑛業）

一 概 要

ニューカレドニア (New Caledonia, Nouvelle Calédonie) は南太平洋上に於る佛國の最大植民地である。嘗ては常習犯罪人や政治上好ましからざる人々の追放地に過ぎなかつたが、今日ではニツケル、クロム、コバルト、鐵等の重要鑛物の富源地として世界的に注目され、佛本國自身といふよりも日本・米國・濠洲等から一層多大の關心を拂はれてゐる。

二 位置・面積

本島は我が南洋群島クサイ島の南一、五〇〇哩、東經一六五度、南緯二度邊に在り、東にロイヤルティ群島、北にニューヘブライズ群島がある。西北より東南に亘り長さ二〇〇哩である。

而して總面積は二二、一三九平方哩（八、五四八平方哩）である。

三 歴 史

本島は、一七七四年彼の太平洋探検家として著名な英國人クック大佐によつて発見されたもので、スコットランドの風光に似たところありとしてニューカレドニアと命名したのであつた。其の後永らく放置され、佛國ダントルカストー提督配下の船舶によつて精測されたことから、佛國は既に一八四三年に三色旗を本島に掲げたが、英國の抗議にあつて一旦撤退した。然るに、一八五三年佛國の測量船アルクメン號の一士官が同島の原住民に虐殺されたのを口實に再び占領し、政廳を本島のヌメアに設置した。

現に南方のパン諸島（一五〇平方哩、人口約六六五人）、ロイヤルティ諸島（約二二〇平方哩）、東北のフォン諸島（無人）、更にフィジーの西北方のワリス群島（約一〇五平方哩、人口約六、〇〇〇人）、フトナ島及アラウイ島等も、當政廳の管轄に屬する。

四 人口・住民

人口——一九三六年に於る總人口五三、三四五人、その内譯は左の通りである。

歐 入	一七三三	原 住 民	二八五九
ジヤワ 人	七二三	其 他	三〇四
安 南 人			

住民——佛國はこの島を流刑植民地とし、一八六三年普佛戰爭後、國事犯及重罪犯人二五〇人がヌメア對岸ノオ島に流され、その數は一九〇六年中實に七、九〇〇に達したといふ。

併し現在では流刑者の子孫は少く、多くは濠洲へ移住してゐる。現在島民中二、三〇〇は流囚の子孫であり、佛人と原住民との混血兒の數は一七、〇〇〇に上る。

原住民の殆ど全部はメラネシア族で、此處でもカナカと呼んでゐる。嘗ては其の數七萬を算したと言はれたが、惡疫の傳染や歐人に對する反抗等による虐殺等の爲、現在では半減以下となり、年々減少してゐる。

原住民は一見頑健であるが、怠惰で近代的事業の労働者としては不適當である。ニューカレドニアでは鑛業の労働者を相當多數必要とする爲、曾てはジヤワ及安南方面より多數の労働者を入れ、一八九六年頃は其の數一四、〇〇〇に達したことがあつたが、今日は新しく外國人の入國を禁止せる爲、人口は減少、産業は萎縮し、島民は労働組合を結束し、外人労働者の移住を拒んでゐる。

五 政 治

政廳はヌメアに置かれてゐる。フランス海軍省直轄地として將官級の軍人によつて統治されて居るが、島民と官吏との間には激烈な闘争が絶えることがない。

六 産 業

1 農 業

本島の平地は比較的乏しいのであるが、氣候的には甚だ恵まれて居り、各種の有用作物が良く生育する。

然しながら、鑛業の殷盛の爲に農業は一般に輕視され、閉却され勝で、食糧は濠洲から大量輸入されて居り、野菜や果物の一部さへ輸入に仰いでゐる。灌漑耕作の困難、労働力の不廉等が結局生産費を高め、他方では海外市場との距離が大である事等も、同島農業の發展を阻害する重大な要因である。

左に主要産物に就て概略すれば次の通りである。

米——年に二回收穫され、バナナ・パイナップル等の熱帯果實、大根・

午参・トマト等の野菜類も見事なものが出来る。

甘蔗及棉花——甘蔗と棉花は曾て相當栽培されたのであるが、近年の世界恐慌の爲に全滅の状況で、現在では野生となつて若干殘存するに過ぎない。棉花はエジプト種を入れたもので、印度のブローチ種、米國のミッドリング種以上のものを第一次歐洲大戰前には輸出してゐたものである。ル・ロア種は少量であるが、高級コーヒーとして栽培され、パリ人に甚だ歡迎されてゐる。其の外、自然的には島内到處に適地があるが、主として高労働の爲に發展せず、世界的に有名なル・ロア種の如きは絶滅に瀕してゐる。

古々椰子——太平洋諸島の重要産物である古々椰子は大部分原住民の手で行はれて居り、彼等は原始的方法を固守してゐるので品質も劣り、他

のコブラ産地との競争が困難である。一九三八年のコブラ輸出量は四、五〇〇噸に過ぎず、そのうち三、八〇〇噸がフランスへ送られた。

2 牧畜

比較的重視され、牛・馬・羊・豚等約一五萬頭飼養され、その五分の四は牛で、羊は不適當で漸減してゐるに反し、牛の頭数は近年益々増加してゐる。世界恐慌時期には非常喪失で打撃を蒙つたが、當局の補助や組合の強化により好轉して來たもので、主としてフランスや屬領へ肉類を供給する。冷凍工場が進行中で、冷凍肉輸送の設備のある船舶が寄港するやうになれば一層活況を呈するであらう。

3 林業

森林面積は約七、〇〇〇平方呎、全面積の三分の一に近いが、伐採するのみで造林は皆無であつた爲荒廢し、森林らしいものは分水嶺の一部分に過ぎなく、殘餘は矮木雜草地となつてゐる。林木には黒檀・白檀・鐵木・チーク・ラワン・アカシア・カウリ・ニアオリ等の硬木類を主とする。海岸には紅樹が密生する。特異なのはユーカリの一種であるニアオリで、島内到處に群生して薪炭材としてだけでなく、その葉汁から同名の薬液を抽出する濠洲系の會社も出來てゐる。カウリは新西蘭等にも見られるもので、木理が非常に美しく、丈夫な點で喜ばれ、アカシアも堅硬で廣く用途を有する。

4 水産業

本島の水産業は未だ問題視されてゐないが、輕視出來ない。近海には鯛・鱈・鰯・鰱・鰪・鰈・鰻・鰺等が棲息し、大蝦・牡蠣等に富み、殊に高瀬貝・眞珠貝等が有望で、近年勇敢なる我が業者の一部は此の附近まで遠征し、時に領海内まで侵入して所謂密漁船の名義で拿捕されたものさへある。

5 鑛業

本島の鑛産は極めて豊富且つ重要である。就中、近年に於る同島の繁榮はニッケルに依存する事が最も大である。

需要量にかゝつてゐる。その他、濠洲・フランス等へ輸出される。

鐵—鐵は本島の南北兩端部に賦存し、蛇紋岩の風化に基く紅土より生成した豆状乃至塊状の鐵礦が、大約三—一〇米の厚層を呈する。品位は五—二〇%内外で優秀とは言はれないが、若干のクロム、ニッケルを含有してゐるので特殊鋼の原礦としては歓迎される。これ等の點は比律賓の「スガオ」、東印度のセレベスのものに類似する。一九三八年、日佛合辦のル・フェル・カレドニア會社(主として大阪の野村財團の出資)に經營)が設立され、南端部のゴロに於て探掘に着手し、同年末以來鑛石を日本へ送つてゐる。年採鑛能力は約七〇萬噸であると言はれる。

鑛—附近の小島に鳥糞層が發達し、七〇—八〇%の高品位のものから五〇%以下の低品位のまで、埋藏量は相當大であると見られる。殊にワルボロ島は既に相當採取したにも拘らず、良品位の磷礦石が未だ多量殘存してゐると言ふ。現在までのところでは海外の注文に應じて採取してゐる状態、一九三五年の輸出は二・二萬噸であつた。

其他の鑛物—現況では殆ど未開發の状態であるが、その種類は尠くない。島の北端部からアルト島にかけては金・銀・銅、島の中部東海岸に位するナケリーやカナラの附近に金・銀・水銀・アンチモニー等、西海岸のブルバリ附近の白金・鉛・亜鉛、首都ヌメア附近のモリブデン等が知られてゐる。

石炭も亦西海岸のヌメヤ、モアンドー、ボヤ、ボウ等に存在が知られてゐるが、その採掘は未だ量的には全く注目するに足らない。

第二章 其他の佛領諸島

一 ソンサイエター群島 (Societe I.)

リーワード群島と、ウインドワード兩群島から成り、面積六五七平方哩、前者の人口約九、〇〇〇、後者の人口約二、五〇〇、政廳はタヒチ島

太平洋諸島…佛領太平洋諸島

次に主たる鑛物名を掲げれば次の通りである。

ニッケル—橄欖岩類 (Peridotite) の風化したものから原鑛が得られる。一八六五年、佛人ガリーニエルの調査で知られ、過去約六〇年間採掘され、輸出されてゐる。

産地は殆ど全島に亘るが、就中東海岸のクア、ベンニエウ、チオ等は最も著名である。

西海岸ではコネとボーとの間のコニアムボー山塊に豊富な鑛床があり、首府ヌメア附近にはダムベヤ、モンドール、サンパンサン等が所在し、是等は運輸の便に恵まれて早くから採掘され、爲に現在では低品位の部分のみ殘されてゐる。チオ鑛山の如きは既に半世紀に亘つて採掘を續け、本邦移民も多く従業した地で、現に約六、〇〇〇の坑夫を使用してゐる。

クア鑛山は日佛合辦のロシアンニ會社(大洋鐵業會社)の經營に屬する。その他東海岸のチンゴ、ウワンギや西海岸のボヤ等は將來有望の鑛區と言はれる。探掘量は近年増大しつゝあり、一九三七年には二四八、九二二噸(平均品位四・七%)となつてゐる。

一九三八年に於るニッケル鑛石の輸出品は三二、四九二噸で、そのうちの大部分が日本及獨逸向けられてゐた。ニッケルは鍍金用にも消費されるが左程大量でなく、大部分は武器・彈丸・精密機械等を製造する特殊鋼の製造原料に供される。從て國防上不可欠の資源で、近年の世界情勢下では飛躍的需要増加は當然である。

クロム—島の南北の兩端部が主産地で、蛇紋岩山塊中の火成鑛床に胎胎する。北部のチエバギが最も有名にして、米國系會社 (New York Industrial Chemical Company) がフランス法人として經營してゐる。其の埋藏量は最小限三〇〇萬噸と推算されて居り、一九三八年の同鑛生産量は五二、二一六噸であつた。これは全部原鑛の儘輸出され、米國が最重要の市場である(米國への輸出品は一九三七年六・二萬噸、三八年二・五萬噸)。從てニューカレドニアのクロム鑛業の消長は一に米國の

ボヘエテに在つて人口約五、〇〇〇である。

二 ガンビール群島 (Gambier I.)

マンガレバ、其他の珊瑚礁から成り、面積六平方哩、人口一、五六〇餘、一七九六年船長ウィルソンが發見、蝶貝・柑橘・椰子及コーヒーを産す。

三 マーケサス群島 (Marquises, Marquesas)

十餘の小島から成り、面積四九〇平方哩、人口九〇〇、海拔九〇〇米餘の高山突起として聳ゆ。一五九五年スペイン人メンダニャは東南の群島を發見し、時のスペイン宰相マーケサスの娘の名を取つて、マーケサス・メンダサ島と名付け、その後、レポリエーション群島と呼んだことがある。一八四二年に至り、カトリック宣教師渡航して遂にフランス領と決した。

四 アウストラール群島 (Australis I.)

トプアイ群島 (Tubuai I.) と呼ばれ、七つの小島から成り、面積一、二五平方哩、人口三、〇〇〇餘、十八世紀中ヴァンクーパー、ラツセル、クツク等によつて發見せられた。

五 トウモト群島 (Tuanotou I.)

俗にデスアポイントメント島 (Disappointment I.) 或は連鎖群島と呼ばれ、約九〇の珊瑚礁から成る。面積二二〇平方哩、人口四、三五〇、トアモト群島といふのが正しい名で、一六〇六年、スペイン人デ・キロスの發見にかゝる。デ・キロスは曾てメンダニャに從つて水先案内となり、ニューヘブライス島を發見し、又ソロモン群島中のダフ島をも發見

した人である。

六 タヒチ島 (Tahiti I.)

一名シヨルジャン島とも呼ばれる。ソサイエター群島中の一島にして其の島形までも数字の8に似て面積四〇二平方哩、人口約二萬(内原住民の數八、〇〇〇、佛人五、〇〇〇、支那人二、九〇〇)。南北二島は狭い地峽を以て蟻の胸腹の如く接続し、北島には海拔二、三〇〇米餘の高山がある。一六〇五年デ・キロス之を發見し、一時サキタイラ島と呼ばれた。又一七六七年にはイギリス人ワリスはドルフィン號に乗つて本島に渡來し、之にキング・ゾオルヂ島の名を冠した。次いで一七六八年ワランズ人ボーガンビーユが來つて佛領を宣し、名をヌーペーヌ・シセーヤーと改めた。

キャブテン・クツクは其の航海史に、本島は太平洋諸群島中最も豪華の島であると推奨してゐる。地味肥沃にして天然資源は多く、椰子・バナナ・柑橘・砂糖・コーヒーの外、毎年五百噸の蝶貝、八萬噸の礫石を産す。毎年の輸出約五千萬フラン、輸入四千四百萬フラン、島内には師範學校一、小學校八七が存す。又島民には多くの癩患者がある。ホエホエに政廳を設け、パナマ運河を経て、ニューカレドニア・ヒンランヌとの定期船が寄港し、又無電塔の設備がある。

IV 文献目録

Appleton, John B. comp. :- The Pacific Northwest : a selected bibliography, 1930-39. 1939.

Armstrong, Louise B. :- Facts and figures of Hawaii, including a glossary of Hawaiian names and words. [c1933]

Castle, William R. :- Hawaii : past and present. 1923.

Chapple, Major W. A. :- Fiji : its problems and resources. 1921.

Closter, C. E. :- Australasia and Asia. 1929. (Modern world geographies, book 3, pt. 2)

Fox, Frank-Peeps at many lands: Oceania. 1911.

Gt Brit. Colonial office :- Colonial report: Fiji, 1918. 1919.

:- Colonial reports: British Solomon Islands protectorates 1929. 1930.

Greenbie, Sydney :- The Pacific triangle. 1923.

Hobbs, William Herbert :- Cruises along by-ways of the Pacific. 1923.

Howarth, O. J. R. :- The world and Australasia : adapted for use in Australasian schools. 2 ed. 1918

Keesing, Felix M. :- Modern Samoa: its government and changing life 1924.

Melanesian mission church house, Lond. :- Melanesia to-day: a study circle book. 1928.

Morris, W. F. :- Australasia and the Pacific Islands. 1927.

Pope, Katherine :- Hawaii: the rainbow land. [c1924]

Rowe, N. A. :- Samoa under the sailing gods 1930.

Stewart :- Stewart's hand book of the Pacific Islands. 1920.

Wood, Gordon L. :- The Pacific basin.

Wriston, R. D. :- Hawaii to-day. 1926.

布哇年鑑

外務省郵政局第三課 :- 大洋州諸島概要 昭和15 (歐三諸島第14輯)

海洋國策研究会 :- フライジャー諸島の現勢 昭和11 (南方國策叢書第15輯)

:- 佛領「ヌーカレドニア」事情 昭和11 (南方國策叢書第16輯)

三藤五郎 :- 佛領「ヌーカレドニア」視察報告 明治44

村山賢一 :- 最近の「ヌーカレドニア」事情 昭和11 (海外拓殖調査資料第29號)

南洋經濟研究所 :- ナウル島事情 昭和16 (南洋資料第6號)

叢書・叢書

Dilke, Sir Charles Wentworth :- Problems of Greater Britain. 1890. 2v.

Gt. Brit. Royal commission concerning the administration of Western Samoa :- Report, 1927. 1928.

Hogbin, H. Ian :- Law and order in Polynesia : a study of primitive legal institutions. 1934.

Littler, Robert M. C. :- The governance of Hawaii : a study in territorial administration. 1929.

Mackenzie, S. S. :- The Australians at Rapaui : the capture and administration of the German possessions in the southern Pacific. 1927. (Official history of Australia in the war of 1914-18. v. 10)

Maserman, Sylvia :- The origin of international rivalry in Samoa 1845-84. 1934.

New Zealand Government :- Report of the Government of New Zealand on the mandated territory of western Samoa, 5 (1925)-17 (1937). 11v.

Scholefield, Guy H. :- The Pacific: its past and future and the policy of the great powers from the eighteenth century. 1919.

Schultz, E. :- Principles of Samoan family law. 1911. (Journal of the Polynesian society. vol. 20)

Van Maanen-Helmert, Elizabeth :- The mandates system in relation to Africa and the Pacific Islands. 1929.

叢書・叢書

Alexander, Agnes R. :- How to use Hawaiian fruit and food products. 1912.

Beasley, Harry G. :- Pacific Island records fish books. 1928.

Cobb, J. N. :- Commercial fisheries of the Hawaiian Islands. (U. S. Fish commissioner's report. 1910. pp. 381-499)

Gt. Brit. Hydrographic dept. :- Pacific Islands pilot. vol. 1-2; 5-6. ed. Lond. 1921-32. 2v.

Hawaii: University. Short course in pineapple production. Short course in pineapple production held at the University of Hawaii, 4th annual. 1925.

Tothill, J. D. :- The coconut moth in Fiji: a history of its control by means of parasites 1930.

Tribole, Leslie Bennett :- The international aspects of electrical communications in the Pacific area. Baltimore. 1929.

Wright, Philip G. :- Trade and trade barriers in the Pacific. Honolulu, 1935.

安藤信成 :- 布哇大學パイソツツル事業に關する諸講演 大正14-15 2冊

Higgins & Holt. 櫻井芳次郎 :- 布哇に於ける木瓜 大正12 (南洋叢書第25卷)

海洋國策研究会 :- 佛領「ヌーカレドニア」島鐵礦概要 昭和11

臺灣總督府殖産局特産課 :- 布哇鳳梨業者會議々事録 昭和12

蘆山節二 :- 布哇の鳳梨事業 大正12 (南洋叢書第27卷)

叢書・叢書

British museum (Natural history), Lond. :- Insects of Samoa: and other Samoan terrestrial arthropoda, pt. 1-9. 1923-30. 15v.

Bryan, William Almonson :- Natural history of Hawaii, being an account of the Hawaiian people, the geology and geography of the islands, and the native and introduced plants and animals of

- the group. 1915.
 Ewing, H. E. :- Ectoparasites of some Polynesian and Malayan rats of the genus *rattus*. 1924. (Bernice P. Bishop museum: bulletin 14)
 Guppy, H. B. :- Observations of a naturalist in the Pacific between 1896 and 1899. 1903, 1906. 2v.
 Hitchcock, Charles H. :- Hawaii and its volcanoes; 2 ed. 1911.
 Illingworth, J. F. :- Early references to Hawaiian entomology. 1923 (Bernice P. Bishop museum bulletin 6)
 Miller, Gerrit S. :- The characters and probable history of the Hawaiian rat. 1924. (Bernice P. Bishop museum: bulletin 14)
 Skotsberg, C. :- Juan Fernandez and Hawaii: a phytogeographical discussion 1925 (Bernice P. Bishop museum: bulletin 16)
 Pacific science congress, 4th *Batavia, Bandong, 1929* :- Proceedings. vol. 1-4. Batavia, 1930.
 Pan-Pacific science congress, 3rd. *Tokyo, 1926* :- Proceedings. vol. 1. Tokyo, 1928. 2v.
 Rock, Joseph F. :- The indigenous trees of the Hawaiian Islands. 1913
 Schmidt, Karl P. :- Reptiles and amphibians from the Solomon Islands. 1932. (Field museum of natural history: publication 311, zoological ser. vol. 18, no. 9)

歴史・地理

- Alexander, W. D. :- A brief history of the Hawaiian people. [c1899]
 Dibble, Sheldon :- A history of the Sandwich Islands. 1909.
 _____ :- History of Samoan Islands. 1839.
 Gifford, E. W. :- Tongan myths and tales. 1924.
 James, J. J. :- History of the Hawaiian Islands. 1872.
 Jenks, Edward :- A history of the Australasian colonies (from their foundation to the year 1911) 1912
 Laurence, N. L. :- Old time Hawaiians and their work. 1912

- Gifford, Edward Winslow :- Tongan place names. 1923. (Bernice P. Bishop museum: bulletin 6)
 Gratama, L. R. :- Onder de bewoners der betoverende Zuid-Zee eilanden.
 Grey, J. R. & Grey, B. B. :- South Sea settlers.
 An historical account of the circumnavigation of the globe and of the progress of discovery in the Pacific Ocean from the voyage of Magellan to the death of Cook. N. Y. 1839.
 Jenkins, J. S. :- Recent exploring expeditions in the Pacific, and the South Seas, under the American, English, and French governments. 1853.
 Mead, Margaret :- Coming of age in Samoa: a psychological study of primitive youth for western civilisation. 1929.
 Moerenhout, J. A. :- Voyages aux lies du grand ocean. 1837.
 Muller, G. J. A. & Heere, W. R. :- De groote ocean en Japan. Groningen, 1923.
 Rienzi, M. G. L. Donnay de :- Oeeanie; ou, Cinquieme partie du monde: revue géographique et ethnographique. t. 1-2. 1836. 2v.
 Saint-Johnston, T. R. :- The islanders of the Pacific 1921.
 Schott, Gerhard :- Geographie des indischen und stillen Ozeanz. Hamburg, 1935.
 Sinker, William :- By reef and shoal, being an account of a voyage amongst the islands in the South-Western Pacific. 1925.
 Yason, G. :- An authentic narrative of four years' residence at Tongatabu. 1810.
 Walpole, Fred :- Four years in the Pacific in Her Majesty's ship "Collingwood" from 1844 to 1848. Lond 1849.
 Wilson, Cecil :- The wake of the southern cross. 1932.
 長谷川與三治 :- 太平洋を圍繞する諸島の地理 大正15
 海軍司令部編 :- 太平洋諸島概要 大正7 2冊
 佐野 實 :- 南洋諸島巡禮記 大正3

- Innes, Sir Charles, ed. :- The Pitcairn Island register book 1929.
 Malo, David :- Hawaiian antiquities, tr. by N. B. Finson. 1903
 Maserum, Sylvia :- The origins of international rivalry in Samoa 1845-1884. 1934
 Rivers, W. H. R. :- The history of Melanesian society. 1914. 2v.
 Watson, Robert Mackenzie :- History of Samoa 1915.

言語・歴史

- Bloxam, Andrew :- Diary of Andrew Bloxam, naturalist of the "Blonde" on her trip from England to the Hawaiian Islands, 1824-25. 1925. (Special pub. 10)
 Bunker, Frank F. :- Lands and peoples, Hawaii and the Philippines: also the islands of the South Seas. [c1928]
 Caillot, A. G. Eugene :- Les Polynesiens orientaux, au contact de la civilisation. 1930.
 Cameron, John :- John Cameron's *Olyseey*, transcribed by Andrew Farrell. 1928.
 Christian, F. W. :- The Eastern Pacific Islands, Tahiti, and the Marquesas 1910.
 Churchill, W. :- The Polynesian wanderings. 1911.
 Cooper, Viola Irene :- Windjimming to Fiji. [c1929]
 Douglas, A. J. A & Johnson, P. H. :- The South Seas of to-day, being an account of the cruise of the yacht St. George to the South Pacific. 1926.
 Ellis, W. :- Journal of a tour through Hawaii. 1827.
 Frobenius, Leo :- Geographische Kulturkunde: eine Darstellung der Beziehungen zwischen der Erde und der Kultur nach älteren und neueren Reiseberichten zur Belebung des geographischen Unterrichts: tl. Ozeanien und die Ozeanier. 1934.
 Hardy, E. S. Craighill :- The native culture in the Marquesas. 1923 (Bernice P. Bishop museum: bulletin 9)
 Hobbs, Jean :- Hawaii: a pageant of the soil. [c1935]

新光社編 :- 大洋州及び南極 (世界地理風俗大系第23巻) 昭和5

人類学・風俗及習慣

- Ball, Stanley G. :- Museum handbook, pt. 2: clothing. 1924. (Bernice P. Bishop museum: special pub. 9)
 Brown, George :- Melanesians and Polynesians: their life-histories described and compared. 1910.
 Brown, J. MacMillan :- Peoples & problems of the Pacific. 1927. 2v.
 _____ :- The riddle of the Pacific. 1925.
 Coltrington, R. H. :- The Melanesians: studies in their anthropology and folk-lore. 1891.
 Formander, A. :- An account of the Polynesian race. 1878. 3v.
 Fox, G. E. :- The threshold of the Pacific: an account of the social organization magic and religion of the people of San Cristoval in the Solomon Islands. 1924.
 Frazer, Sir James George :- The native races of Australasia; including Australia, New Zealand, Oceania, New Guinea and Indonesia: arr. and ed. from the *Mass.* by Robert Angus Downie. 1930.
 Hager, Carl :- Kaiser Wilhelms-Land und der Bismarck-Archipel.
 Handy, E. S. Craighill & Handy, Willowdean Clatterson :- Samoan house building, cooking, and tattooing. 1924. (bull. 15)
 Ivens, W. G. :- Melanesians of the South-East Solomon Islands. 1927.
 Johnston, T. R. St. :- The islanders of the Pacific, or, The children of the Sun. 1921.
 Knibbs, S. G. C. :- The savage Solomons as they were & are.
 Malinowski, Bronislaw :- The sexual life of savages in North-Western Melanesia: an ethnographic account of courtship, marriage, and family life among the natives of the Trobriand Islands, British New Guinea 1929

- Mallo, David :- Hawaiian antiquities (Mooolelo Hawaii) 1903.
 Mead, Margaret :- An inquiry into the question of cultural stability in Polynesia. 1923.
 Pritchard, W. T. :- Notes on South Sea Islanders. 1864.
 Rivers, W. H. R. *ed.* :- Essays on the depopulation of Melanesia. 1922.
 Roberts, Stephen H. :- Population problems of the Pacific. 1927.
 Thompson, B. :- The Fijians. 1908.
 Thurnwald, Hilde :- Menschen der Südpazifik: Charaktere und Schicksale. 1937.
 Von Balow, W. :- Beiträge zur Ethnographie der Samoa-Inseln. (Separat-Abdruck aus 'Internationales Archiv für Ethnographie', Bd. 13, 1900)
 Williamson, Robert W. :- The social and political system of central Polynesia. 1924. 3v.
 古野清人 :- 太平洋民族と文化 昭和16 (太平洋問題の再検討の内) 松岡精雄 :- 太平洋民族誌 大正14
张謇・梅崎・豊船・柳澤
 Andersen, Johannes G. :- Myths & legends of the Polynesians. 1928.
 Beutli, Harlan P. :- Missions as a cultural factor in the Pacific. N. Y.
 Perge, Victor & Lanier, Henry W. :- Pearl diver: adventuring over and under Southern Seas. 1930.
 Brigham, William T. :- Color plates illustrating Ka Hana Kapa. (Memoires of the B. P. Bishop museum. vol. 3, 1911)
 Carse, Robert :- Pacific. N. Y. [c1932]
 Clouzet, H. & Level, A. :- L'art Nègre et l'art océanien. [c1919]
 Dickinson, Joseph H. G. :- A trader in the savage Solomons. 1927.
 Dixon, Roland B. :- Oceania. 1916. (Mythology of all races; ed. by Luis Herbert Gray. vol. 9)
 Foster, Harry L. :- A vagabond in Fiji. 1927.
 Erskine, Robert Dean :- The book of Puka-Puka. [c1928]
 Greiner, Ruth H. :- Polynesian decorative designs. 1923. (Bernice P. Bishop museum: bulletin 7)
 Hall, James Norman :- Mid-Pacific. 1928.
 Handy, E. S. Craighill & Winne, Jane Lathrop :- Music in the Marquesas Islands 1925 (Bernice P. Bishop museum: bulletin 17)
 Ivens, Walter G. :- A dictionary of the language of Sa'a (Malu) and Uluwa South-East Solomon Islands. 1929.
 Keable, Robert :- Tahiti: isle of dreams.
 Mason, Etta :- On our island. 1926.
 Restarick, Henry Bond :- Hawaii, 1778-1930, from the viewpoint of a bishop, being the story of English and American churchmen in Hawaii, with historical sidelights 1924.
 Saroni-Middleton, A. :- Tropic shadows: memories of the South Seas, together with reminiscences of the author's sea meetings with Joseph Corrad. 1927.
 Saint-Johnston, T. R. :- South Sea reminiscences. 1922.
 Thrum, Thomas G. *comp.* :- More Hawaiian folk tales: a collection of native legends and traditions. 1923.
 Wilson, Ellen :- Sketches from life in Melanesia.
 Wycheley, George :- Buccaneers of the Pacific. Indianapolis. [c1928]
 Youngusband, Francis :- The epic of Mount Everest. 1928.

附 録

目次

參考資料

- I 大東亞共榮圈各地面積・人口及密度比較……………一頁
- II 南方各地標準時對照……………二
- III ビルマ固有名詞及地名の讀み方に就て……………三
- IV 南方各地別主要農產資源生産高對世界比率(一九三九年)……………六
- V 皇紀・西曆及泰國曆對照……………八
- VI 主要參考書目……………九

附錄

參考資料

I 大東亞共榮圈各地面積・人口及密度比較

地域名	總面積	總人口	調查年	平方英里當り密度	最近國勢調查人口	調查年
佛領印度支那國	六七〇,九九〇	二二,六七〇,〇〇〇	(一九四一)	三三	二二,〇〇〇,〇〇〇	(一九三三)
① 泰國	六五九,二六八	一七,二八四,八九九	(一九四三)	二六	一四,四六四,一〇五	(一九三七)
② 馬來	九三,八三五	四,二七三,八三九	(一九四三)	四六	四,三五五,一六五	(一九三三)
② 緬甸	五五六,五二二	一六,五七七,九三二	(一九四三)	二九	一六,八三三,七九八	(一九四一)
② 暹羅	四〇七,九三七〇	三,八八九,九七五	(一九四一)	九五	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	六五,六一〇	五,九三二,〇〇〇	(一九三九)	九〇	五,〇〇〇,〇〇〇	(一九三三)
② 緬甸(アールネイを除く)	二九七,四〇〇	一六,七七二,九〇〇	(一九四一)	五六	一六,〇〇〇,〇〇〇	(一九三九)
② 緬甸(アールネイを除く)	一,九〇四,四四四	六,〇七二,七三三	(一九四一)	三七	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	一,一七二,一七四	四,一七一,八三三	(一九四一)	三六	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	一,七七二,一七〇	一,九〇〇,八八九	(一九四一)	一一	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	四七三,六〇四	八,二五四,八四三	(一九四一)	一七	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	五三九,四六〇	二,二六八,六六一	(一九三〇)	四	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	七五九,一〇八	八,五八五,三六五	(一九三〇)	一一	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	一八,九九〇	四七三,二六四	(一九三七)	二五	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	三二,一三三	八三〇,四三三	(一九三八)	四	同	同
② 緬甸(アールネイを除く)	七,〇〇〇	三〇〇,一〇〇	(一九三八)	四	同	同

日本	11,945,500	4,905,500	(1935)
朝鮮	15,750,000	3,780,000	(1936)
支那	475,330,000	9,720,000	(1939)
暹羅	24,000,000	6,330,000	(1939)
安南	23,440,000	3,380,000	(1939)
東洋	7,700,000	6,990,000	(1939)
南洋	2,690,000	1,710,000	(1939)
新西蘭	1,700,000	5,330,000	(1936)
計	1,011,101	10,510,000	(1939)
日本	11,945,500	4,905,500	(1935)
朝鮮	15,750,000	3,780,000	(1936)
支那	475,330,000	9,720,000	(1939)
暹羅	24,000,000	6,330,000	(1939)
安南	23,440,000	3,380,000	(1939)
東洋	7,700,000	6,990,000	(1939)
南洋	2,690,000	1,710,000	(1939)
新西蘭	1,700,000	5,330,000	(1936)
計	1,011,101	10,510,000	(1939)

(註) (1) 佛領印度支那の面積・人口は一九四一年五月九日、佛・泰國間に於る關係條約及議定書に基き新たに泰國側に譲渡されたるルアンパパン地区・メコン河中の島嶼・パクセ地区・カンボヂヤ地区及パッタナン州計六九、四二〇平方杆及同地域居住の人口三〇萬(推定)を除外してある。(2) 泰國、マライ、ビルマの面積及人口は一九四三年八月二〇日の日泰條約に基き編入或は割譲せられたるものに就て計上した。従て泰國の面積・人口は著増し、之に反してマライ、ビルマは各々減少を示してある。(3) 新西蘭人口にはマオリ人九〇、九八〇人を含む。

(備考) 本表は、本年産所掲のものに、内閣統計局編刷國勢要覽昭和十六年版、その他其後に入手したる数字を加へて作成した。人口密度は小數點以下四捨五入してある。而して東印度の一九四〇年推定人口は七〇、四七六、〇〇〇人と計上されてゐる。尙太平洋諸島嶼の各面積・人口は本表には除外してある。

II 南方各地標準時對照

時計は、學術的には英國グリニッチの正午を基準とする萬國標準時を

東京正午とせ る各地の時刻	地名	萬國標準時に對 する早△遅▲
午後 四・三〇	ハワイ	▲一〇・三〇
午後 四・〇〇	アリゾニアン列島	▲一〇・〇〇
午後 四・〇〇	フィジー、カムチャツカ	▲一〇・〇〇
午後 二・三〇	新西蘭	▲一〇・〇〇
午後 二・〇〇	ニューカレドニア、オホーツク	▲一〇・〇〇
午後 一・〇〇	南洋群島(ヤルト島、ボナペ島、トラタツ島) ニュージーニア東部、シベリア(蒲湖)、濠洲東部(シドニー、メルボルン等)	▲一〇・〇〇
午後 〇・三〇	濠洲北部、濠洲南部	▲九・三〇
午後 〇・〇〇	①日本、朝鮮、臺灣、滿洲國、關東州、②南洋群島(サイパン島、パラオ島、ヤップ島)、ニューギニア西部	▲九・〇〇
午前 一・〇〇	比律賓、ボルネオ東部、セレベス、西オーストラリア州、支那東部(中原時) 青島、香港、澳門)	▲八・〇〇
午前 一・三〇	ジャワ島、サラワク	▲七・三〇
午前 一・〇〇	佛印、泰國、マライ、スマトラ南部、支那中部(臘獨時)	▲七・〇〇
午前 九・三〇	ビルマ國、スマトラ北部	▲六・三〇
午前 九・〇〇	支那西部(西藏時)	▲六・〇〇
午前 八・五三	カルカッタ	▲五・五三
午前 八・三〇	印度、支那最西部(昆侖時)	▲五・三〇

(註) ①日本中央標準時及南洋群島西部標準時。
②南洋群島東部標準時。

次に日本及濠洲の其の經度を記せば左の如くである。

標準時帶	經度	時差
日本中央標準時	東一二三・五〇〇度	九・〇〇前

III ビルマ固有名詞及地名の讀み方に就て

本稿はビルマの固有名詞及地名を如何にして實際的に發音するかを解明したるもので、從來兎角同國地名が誤讀又は誤記されてゐた憾み尠からざるにより、此處に特掲して一般の利便に供せんとするものである。然りと雖も現地民の夫と一致するや否かは計られざるも、出來得る限り是等地名を正確に發音する資ともならば望外の幸である。此の點篤と諒承されたい。

原 字	發音記號	片假名書
Akyab	Ak-e-ab	アキヤブ
A'nanapura	第一マラブルにアクセントあり	アナーマラプラ
Anawra'ta'	An-or-'a-tai'	アノラター
Ava	Al'-va	アーヴァ
Bawwin	Baw'-dwin	バウドウィン

Bassein	Bā-sēn'	バセイン
Bhamo	Bah-mō'	バモ
Bilgyun	Bē-lāo-jōon'	ビョルジョオン
Chindwin	Chin-dwin	チンシウイン
Daingwungkwin	Dīng'-wōon-kwin'	ダインウーオンクウイン
Danbyu	Dā'-nōō-bew	ダヌーボエー
Dukathsein	Dōō-kān-thān	ドゥーカンテン
Eindawya	An-daw-yāh	アンダウヤ
Gokteik	Gō'-tāk	ゴタ
Gyauing	Jing	ギヤイン
Gyolungauk	Jō-bin-go-wk	ギョービンゴウク
Heho	Hā-hō'	ハホ
Heinsun	Hān-sōon	ハンソン
Henzada	Hēn-za-dā'	ヘンヂダ
Hlaing	Hing	ヘヤン
Hmawza	Maw-zah	マウサ
Hrayon	Pa-yōn'	パヨン
Hsipaw	Sē'-paw	シーパウ
Insein	In-sēn or In-sān	インセン
Irye	In-yā	インヤ
Kadaik	Ka-dīk	カダイ
Kado	Ka-dō'	カド
Kale	Ka-lā	カラ
Kalewa	Kā-lā-wah	カラワ
Kalyansina	Kāl-yān-i-sē-na	カルヤニセナ
Katla	Kā-thāh'	カタ
Kaungugo	Kō-wung-ō	コウウゴ
Kawhaat	Kaw-hāt	カウハト

Kwanhla	K wōn'-lah	クワンラ
Kyabin	Chal-bin	チャビン
Kyaikkauk	Chik-kowk	チャイクロウク
Kyaukpun	Chik-poōn'	チャイクポーン
Kyaukhanlan	Chik-thān-lān	チャイクタンラン
Kyangin	Chān-gin	チャンジン
Kyanzittha	Chān-zi-thāh	チャンジタ
Kyaukmyung	Chowk-myowung	チャウクミョウウン
Kyaukpanaung	Chowk-pān-dō-wung	チャウクパンドウウン
Kyaukpyn	Chowk-pyōō	チャウピョー
Kyauksa	Chowk'-sā	チャウセ
Kyauk Taw Gyi	Chowk Taw Je	チャウクタウジ
Kyaukzedi	Chowk-zā-dē	チャウクゼヂ
Kyonkadat	Chōn-ka-d t	チョンカダト
Kyongyauw	Chōn-pyāw	チョンピヤウ
Leiksa	Lāk-saw	レーサウ
Leepadān	Lēt-pa-dān'	レトパダン
Magwe	Mā-gwā'	マクワ
Maungkaing	Māng-King	マインカイン
Maymyo	Mā-myō	マイミョ
Meikilla	Māk-yī-lā	マイチラ
Mergui	Mēr-gwē'	メイグイ
Migadeikpa	Mē'-gah-dāk-pah- mīng-ā	メイガクミン
Min-ige	Min-ga-la-tōn'	ミンガラトン
Mingaladon	Min-lah	ミンラ
Minhla	Mī-gōk'	ミゴク
Mogok	Mōn'-yōō-ah	モンヨーア
Monywa		モンヨーア

Moulmein	Mōol-mān	モールマン
Mupun	Mōō-pēon	ムーポン
Myede	Mý-a-dā'	ミヤダ
Myingyan	Min-jahn'	ミンシヤン
Myitkyina	Mi-eh'-nāh'	ミチナ
Myinge	Ming'-ā	ミンガ
Myitha	Mýi-thah	ミヤ
Nagayon	Nāh-gā-yān	ナガヨン
Nakkyigon	Nāt-jē gōn	ナチゴン
Naunglon	No-wng-lōn	ノーロン
Naungpauung	No-wng-pōō o-wng	ノーリンポーオン
Negrals	Nē-grā'-is	ネグレイス
Ngawun	Nāh-wōōn	ナワン
Nyaminghinzeik	Ný-o-wng-bin-zāk	ニョウミンビンザク
Nyaungu	Ný-o-wng-ū	ニョウミンウ
Pa-an	Pe-ān'	ポアン
Pagan	Pa-gahn'	パガン
Pagat	Pa-gāt'	パガト
Palewa	Pā-lā-twah'	パレワ
Patolawgyi	Pāt-ō-daw-jē	パトオダウジ
Pauwgle	Powng-dē	ポウング
Pazundaung	Poozen-dawng	ポゼンダウング
Prome	Prōm	プロム
Pyinbongyi	Pin-bōn-jē	ピンボンジ
Pyinmanu	Pin-nā-nāh'	ピンナナ
Pyintla	Pin-thāh	ピントア
Sagaing	Sa-gīng	サガイン
Salenyo	Sāh-lā-mýō	サレンヨ

Seligyi	Sāk-jē	サイキジ
Sleinmaga	Shān-nā-gāh'	シヤンナガ
Shinbinkgyi	Shin-bin-kōō-jē	シンビンクウジ
Shittauung	Shit-to-wng	シタウウン
Shweangyo	Shwā-ō-wng-jō'	シュワウオウキョ
Shwebo	Shwā-bō	シュワボ
Shwe Dagon	Shwā-Da-gōn'	シュワダゴン
Shweguagale	Shwā-gōō-glā'	シュワゴウガレ
Shwehnaawdaw	Shwā'-maw-daw'	シュワウマウダウ
Shwemokdaw	Shwā-nōōk-taw	シュワウノウクタウ
Shwenandaw	Shwā-nān-daw-oh-wng'	シュワウナンダウウウ
Kyauing	Shwā-nāt-to-wng	シュワウナトウン
Shwenattauung	Shwā-nýō-wng	シュワウニョウウン
Shwenyauung	Shwā-sin-daw	シュワウシンダウ
Shwesandaw	Shwā-thāh-yō-wng'	シュワウシヤウウン
Sittauung	Sit-to-wng	シトウン
Sule	Sōō-lā'	ソーラ
Tagaung	Ta-go-wng	タゴン
Tangyan	Tān-jān	タンヤン
Taung-egy	Towng-jē	トウング
Taung-waing	Towng-wing	トウウイ
Tavoy	Ta-yoy'	タウイ
Tengyueh	Teng-yōō-i	テンゴイ
Thabeikkyin	Thā-bā'-chīn	タベチン
Thaathymyui	Thāt-bý-in-nýōō	タトニン
Thaton	Thā-tōn	タトン
Thayauung-gaing	Thā-yō-wng-jā-wng	タウウゴンヤウ
Thayemyo	Thā-yēt-myō	タイエミョ

Tha-yekhetaya	Tha-yá-kít-ta-yah	タイエケタヤ
Thazi	Thah-zé	タジ
Thendawgyi	Thán-daw-jé	タンダウジ
Thibaw	The-baw	チバウ
Thyving	Té-jing	チジヤイン
Toungoo	Tow-ngoo	トングー
Yanethin	Ye-nā-tīn	ヤメチン
Yankinang	Yán-kin-tó-wng	ヤンキントン
Yebawmi	Yá-baw-mé	イエバウミ
Yenangyung	Ye-nan-jowng	イェナンジョン
Zaing	Zang	ザイン
Zegyo	Zá-jó	ゼジョ
Zingyik	Zin'-jik	ジンジヤイ
Zwegabin Daung	Zwé-gá-bin-downg	ズウエガビンドン

(備考) 發音記號中イタリククのaはその發音が不確定なることを表はすものである。
尚ビルマの地名中、左記の文字は通例左の如き意味を有する場合あり、附記して參考に供する。

Aing	小湖	Nge	小
Chaug	小川、流れ	Pin	木
Huang	舊、古	Se	堰
Kan	タンク	Seik	着陸場、陸揚池
Kon	高地	Tauing	丘、岡
Kyi	大	Taw	森
Kyau	島、島嶼	Thit	新
La	米田	Wa	村口
Myo	町	Ywa	村

IV 南方各地別主要農産資源生産高對世界比率 (一九三九年)

地域名・種別	マニラ麻	胡椒	規那	ゴム	カボツク	コブラ	タピオカ製品	茶	米	胡麻
世界總生産高	千キントナル 1,400,000	噸 80,000,000	千噸 1,200,000	千噸 1,000,000	千噸 2,000,000	千キントナル 1,800,000	千噸 3,000,000	千キントナル 5,000,000	千キントナル 9,000,000	千キントナル 6,500,000
對世界比率	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
比 率	0.01	0.03	0.04	0.07	0.05	0.07	0.03	0.04	0.05	0.03
佛	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
サ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
北	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
マ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
東	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
比	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
律	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
印	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
度	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
賓	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
計	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
他	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
總	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001

地域名・種別	落花生	パーム油	砂糖	葉煙草	大 麥	パーム核	玉蜀黍
世界總生産高	千キントナル 6,200,000	噸 5,181,800	千キントナル 1,700,000	千キントナル 1,100,000	千キントナル 1,200,000	千キントナル 6,000,000	千キントナル 1,100,000
對世界比率	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
比 率	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
佛	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
サ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
北	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
マ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
東	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
比	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
律	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
印	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
度	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
賓	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
計	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
他	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
總	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001

地域名・種別	落花生	パーム油	砂糖	葉煙草	大 麥	パーム核	玉蜀黍
世界總生産高	千キントナル 6,200,000	噸 5,181,800	千キントナル 1,700,000	千キントナル 1,100,000	千キントナル 1,200,000	千キントナル 6,000,000	千キントナル 1,100,000
對世界比率	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
比 率	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
佛	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
サ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
北	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
マ	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
東	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
比	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
律	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
印	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
度	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
賓	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
計	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
他	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
總	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001

(註) (1)生産量不明の爲参考として輸出數字を示す。(2)輸出(3)ジャリ及マヅラのみ(4)一九三八年の比率
(備考) 本稿は南洋協會發行の「南洋」昭和十八年六月號所掲のものに依據したものである。

V 皇紀西曆及泰國曆對照

皇紀 (年號)	西曆	泰(佛)曆	皇紀 (年號)	西曆	泰(佛)曆
二五七〇	明治四三	二四五三(閏月1翌)	二五八八	三	二四七一(同)
二五七一	四四	二四五四(同)	二五八九	四	二四七二(同)
二五七二	四五	二四五五(同)	二五九〇	五	二四七三(同)
二五七三	大正 四	二四五六(同)	二五九一	六	二四七四(同)
二五七四	四五	二四五七(同)	二五九二	七	二四七五(同)
二五七五	四六	二四五八(同)	二五九三	八	二四七六(同)
二五七六	四七	二四五九(同)	二五九四	九	二四七七(同)
二五七七	四八	二四六〇(同)	二五九五	一〇	二四七八(同)
二五七八	四九	二四六一(同)	二五九六	一一	二四七九(同)
二五七九	五〇	二四六二(同)	二五九七	一二	二四八〇(同)
二五八〇	五一	二四六三(同)	二五九八	一三	二四八一(同)
二五八一	五二	二四六四(同)	二五九九	一四	二四八二(同)
二五八二	五三	二四六五(同)	二六〇〇	一五	二四八三(閏二月1)
二五八三	五四	二四六六(同)	二六〇一	一六	二四八四(二月1)
二五八四	五五	二四六七(同)	二六〇二	一七	二四八五(同)
二五八五	五六	二四六八(同)	二六〇三	一八	二四八六(同)
二五八六	五七	二四六九(同)	二六〇四	一九	二四八七(同)
二五八七	五八	二四七〇(同)	二六〇五	二〇	二四八八(同)

IV 主要參考書目

I 佛領印度支那

- Agard, A. :- L'Union indochinoise française.
- Annuaire Administratif de l'Indochine (1940).
- Annuaire du Syndicat de Planteurs de Caoutchouc de l'Indochine (1939).
- Annuaire Statistique de l'Indochine (1931-32, 1933-35, 1936-37, 1931-38).
- Atlas de l'Indochine (1920).
- Bardesson, Capt. Henry :- Indochina and its Primitive People.
- Budget Général de l'Indochine (1939).
- Bulletin de Quinzaine de la Chambre de Commerce de Saigon.
- Bulletin Economique de l'Indochine.
- Chambre de Commerce de Haiphong :- Bulletin de Quinzaine Mouvement du Port.
- Chambre de Commerce de Saigon :- Statistiques Commerciales de la Cochinchine (1930-39).
- Chambre de Commerce du Port de Saigon. Statistiques Commerciales (1930-39).
- Charles Lavauzelle & Cie. :- Annuaire des Colonies (1926-27).
- Climat de l'Indochine et les Typhons de la Mer de Chine (1940).
- Collard, Paul :- Cambodge et Cambodgiens.
- Conventions et Traités de Droit International intéressant l'Indochine.
- Journal Officiel de l'Indochine Française.
- Les Editions G. van Oest :- Un Empire Colonial Française, l'Indochine (1929).

附 錄

九

II 暹羅

- L'Eveil Economique de l'Indochine.
- Mossy, Léon :- Principes d'Administration générale de l'Indochine.
- Publication G. B. Indochine :- Guide G. B. Indochinoise (1931).
- Rapport au Conseil Colonial de la Cochinchine (1929-30).
- Rapport au Conseil de Gouvernement (1928).
- Rapports au Grand Conseil des Intérêts Economiques et Financiers et au Conseil de Gouvernement (1929, 1932, 1933, 1934).
- Régime Douanier de l'Indochine (1941).
- Statistique mensuelle du Commerce extérieur de l'Indochine (1939).
- Tableau du Commerce extérieur de l'Indochine (1936-39).
- Tesson & Percleron :- L'Indochine moderne.
- Touzet, André :- L'Economie indochinoise et la grande crise universelle.
- Touzet, André :- Régime monétaire de l'Indochine.
- Yves, Henry :- Economie agricole de l'Indochine.
- 太平洋協會編 :- 佛領印度支那 政治・經濟 昭和15
- 邊見重雄著 :- 佛領印度支那の稅制 昭和16
- 三井榮次郎著 :- 佛領印度支那の鑛產資源 昭和17
- 渡邊源一郎著 :- 佛領印度支那の海運 昭和17
- 東亞海運株式會社編 :- 佛領印度支那の政治組織 昭和16
- 臺灣南方協會編 :- 佛領印度支那の政治組織 昭和16

III 附 錄

- Bangkok Times Press :- Directory for Bangkok & Siam (Annual).
- Dept. of Customs :- Foreign Trade & Navigation of Siam (Annual).
- Dockl, Mrs. W. C. :- Tai Race.
- Frankfurter, Dr. O. :- Element of Siamese Grammar.
- Grutlan, W. A. :- Siam. 2 vols.

Grail, W. G.: Flora Siamensis Enumeratio.
 Information Bureau: Siam Literature Series. 13 pls.
 International Chamber of Commerce :- Bangkok Market Report (Monthly).
 Le May, R. :- Asian Arcady.
 Loti, P. :- Siam.
 Ministry of G. & C. :- Siam: General and Medical Features.
 :- Siam: Nature & Industry.
 Ministry of Finance :- Statistical Year Book of Thailand.
 Office of the Financial Adviser :- Report on the Budget of Siam. (Annual)
 Sarasas, Pira :- My Country Thailand (1942).
 Seidenfanden, E. :- Guide to Bangkok, Siam To-day (1936).
 Siam Society :- Journal of the Siam Society.
 :- Journal of the Siam Society (Natural History Supplement).
 Siam Wirtschaftlicher Aufbau, Aussehenhandel und Zahlungsbilanz, von Grote Khunhahan (1932).
 Zimmermann, C. G. & Andrews, J. M. :- Siam: Rural Economic Survey (1930-31, 1934-35).
 滿鐵東亞經濟調査局編 :- シヤム編(南洋叢書第4巻) 昭和13,18
 日本貿易振興協會編 :- 泰國の産業貿易事情 昭和17
 日本タイ協會發行 :- 日本タイ協會々報
 岩生成一編 :- 日暹交渉史
 臺灣南方協會編 :- タイ國の財政 昭和16
 " :- 泰國の華僑 昭和16
 " :- タイ國の貿易 昭和16

III P N Y
 Annual Departmental Reports of S. S.
 " " F. M. S.
 Blue Book, S. S. (Annual).
 British Malaya Foreign Imports & Exports (Annual).
 Directory of Malaya (Annual).
 German, Capt. R. L. :- Handbook to British Malaya (1935).
 Grist, D. H. :- An Outline of Malayan Agriculture (1936).
 Government Gazette, S. S.
 " " F. M. S.
 Malaysian Agricultural Journal (Monthly).
 Malaysian Statistics (1934-39).
 Malayan Year Book (Annual).
 Scribner, C. R. :- Malayan Ore Deposit (1940).
 Singapore & Malayan Directory (1935).
 Winstedt, R. O. :- Malaya (1934).
 新嘉坡日本人會編 :- 赤道を往く(新嘉坡案内) 昭和16
 臺灣南方協會編 :- 英領馬來の政治概観 昭和16
 臺灣南方協會編 :- 英領馬來の貿易 昭和16

IV U N P
 Annual Statement of the Sea-borne Trade and Navigation of Burma: with foreign Countries and Indian Ports, with supplement for Indo-Burma Trade.
 Burma Trade Journal.
 General Report of the Census of India. Burma. 1931.
 Murray, John, ed. :- A Handbook for travellers in India, Burma

and Ceylon, including all British India, the Portuguese and French possessions, and the Indian States. 1938.
 緒方 昌著 :- ベルマ經濟事情 昭和17
 臺灣南方協會編 :- ベルマの財政 昭和16
 臺灣南方協會編 :- ベルマの貿易 昭和16

IV 亞細・パヤロン

Census of India. 1931.
 Colonial Reports: Ceylon (Annual).
 Indian Year Book. 1940.
 Statistical Abstract for British India (Annual).
 高橋西郎著 :- 最近の印度地誌 昭和12
 ダイヤモンド社編 :- 印度・セイロン島(南洋地理大系第7巻) 昭和17
 Hoerické, W. F. & Nestorio, N. :- The Mineral Resources of the Philippines (1934, 1938).
 Bulletin of Philippine Statistics (Formerly Philippine Statistical Review). (Quarterly).
 Census of Philippines. 4 vols. (1939).
 Duran, P. :- Philippine Independence and the Far East Question (1935).
 Encyclopaedia of the Philippines. 9 vols. (1935).
 Executive Orders and Proclamations (Annual).
 Forbes, W. G. :- Philippine Islands. 2 vols. (1911).

V 比 律 賓

Official Roster of Officers and Employers in the Civil Services of the Philippine Islands (Annual).
 Philippine Journal of Commerce (Monthly).
 Philippine Mining Year Book (Annual).
 Philippine Year-Book (Annual).
 Rosenstock's Manila City Directory (Annual).
 Tamsis, Florensis :- General Information on Philippine Forests (1937).
 滿鐵東亞經濟調査局編 :- 比律賓編(南洋叢書第5巻) 昭和16
 大谷純一編 :- 比律賓年鑑(年刊)
 河出書房編 :- 外南洋1(世界地理第6巻) 昭和14
 國際經濟學會編 :- フライクワビンの政治經濟問題 昭和15
 日本貿易振興協會編 :- 比律賓の資源と貿易 昭和17
 小笠原和夫著 :- 南方氣候論 昭和16
 ダイヤモンド社編 :- 海南島・フライクワビン・内南洋(南洋地理大系第2巻) 昭和17
 臺灣南方協會編 :- 比律賓の華僑 昭和16
 " :- 比律賓の貿易 昭和16
 比律賓協會發行 :- 比律賓情報(月刊)

VI 荷 屬 亞 細 (紐 羅 際 カ 中 ニ ス)

De Graaf, S., Sibbe, D. G. :- Encyclopaedie van Ned.-Indië (1930).
 Dienstregeling der Koninklijke Paketvaart Mij.
 Economische Weekblad. (Weekly).
 Fervé, Prof. J. C. :- De Volken van Ned.-Indië.
 Engelbrecht, F. M. L. :- De Ned.-Indischen Verboeken.
 Gongrijp, G. F. E. :- Geïllustreerde Encyclopaedie van Ned.-Indië.
 Handbook of the Netherland's East-Indies.

Jaaroverzicht van den In-en Uitvoer van Ned-Indië (1931-39).
 Indisch Verslag 1940, 41.
 Javasele Bank: - Verslag van den President van Javasele Bank.
 Landbouwexportgewassen van Ned-Indië (1931-38).
 Maandstatistiek van den In-en Uitvoer (1931-38).
 Regeerings Almanak voor Ned-Indië (1931-40).
 Smits, Dr. R. E.: - Te Peteekeis van Nederlandsch-Indië nit
 Internationaal Economische Oogpunt.
 Staatshad van Nederlandsch-Indië.
 Statistisch Jaaroverzicht van Ned-Indië (1931-39).
 Van Stockum's Travellers' Handbook: Dutch East Indies.
 Volksrelling 1930.
 臺灣南方協會編 :- 屬領印度政治組織 昭和16
 臺灣南方協會編 :- 屬領印度の貿易 昭和16

ハ 北ボルネオ

一 屬領北ボルネオ
 British North Borneo Herald (Monthly).
 Handbook of the State of North Borneo (1924, 1929, 1934).
 Rutter, O. :- British North Borneo (1922).
 Report on the Census of the State of North Borneo (1931).
 State of North Borneo :- Administration Report (Annual).
 " :- Annual Departmental Reports (Agriculture,
 Forest, Medical, Posts-Telegraphs & Telephones, Territorial Har-
 bour, Territorial Customs).
 " :- Official Gazette (Fortnightly).
 橫濱正金銀行調査部編 :- 北ボルネオ事情 昭和17
 2 カムラン(北ボルネオ)一

Annual Statistics & Account of the Dept. of Trade & Customs and
 Shipping Office. (Annual)
 Baring-Gould, S. & Bampfylde, C. A. :- History of Sarawak under
 its Two White Rajahs 1839-1908.
 Colonial Reports. State of Brunel (Annual).
 Sarawak Administration Report (Annual).
 Sarawak Civil Service List (Annual).
 Sarawak Gazette (Monthly).
 Sarawak Government Gazette (Fortnightly).
 Sarawak Land Regulations.
 Sarawak Orders. 2 pts.
 折務省折務局編 :- サラワック王国事情 昭和13.17
 外務省通商局編 :- サラワック國事情 附ブルネオ國事情 昭和13
 " :- 英領ブルネオ國事情 昭和7

九 濠洲・新西蘭・ニホーギニア及太平洋諸島

Commonwealth of Australia Government :- Official Year Book of
 the Commonwealth of Australia (Annual).
 Dominion of New Zealand Government :- New Zealand Official
 Year Book (Annual).
 League of Nations :- Report to the Council of the League of Nation
 on the Administration of the Territory of New Guinea (Annual)
 濠洲調査所編 :- 濠洲年鑑 昭和18
 樂松商店調査部編 :- 濠洲 昭和18
 岡倉古志郎著 :- 濠洲の社會と經濟 昭和18
 國際日本協會編 :- ニューギニアの統計年鑑 昭和18
 金子鷹之助・清川正二著 :- オーストラリア・ニューギニアの經濟
 資源 (南洋經濟資源總覽第12卷) 昭和18

國際日本協會編 :- 太平洋諸島統計書(大東亞統計叢書第1部IX)昭和18
 外務省歐亞局第三課編 :- 太平洋諸島概要 昭和15
 朝日新聞社編 :- ニューギニア 昭和18

101 陸

Dominion Office and Colonial Office List (Annual).
 Mining Year Book (Annual).
 Stateman's Year Book (Annual).
 Statistical Yearbook of the League of Nations (Annual).
 金平亮三著 :- 熱帯有用植物誌 昭和5
 南洋協會編 :- 南洋礦産資源 昭和17
 南洋協會臺灣支部編 :- 南洋水産資源 4卷 昭和8
 東亞研究所編 :- 南方統計要覽 上下2卷 昭和17
 淺香末起著 :- 南洋經濟研究 昭和17
 臺灣南方協會編 :- 金鐵 (英領マレー・屬領印度・タイ國・ビルマ・フ
 イリッピン) 昭和16
 滿鐵東亞經濟調查局發行 :- 新亞細亞 (月刊)
 南洋協會發行 :- 南洋 (月刊)
 臺灣南方協會發行 :- 南支南洋 (月刊)
 臺灣總督府外事部發行 :- 南支那及南洋調査報

昭和十八年九月二十八日印刷
昭和十八年九月三十日發行

臺北市文武町一番地

編輯兼
發行者 **臺灣總督府外事部**

臺北市榮町二丁目十五番地

印刷人 **臺灣出版印刷株式會社**

代表者 專務取締役 青木秀巳

臺北市京町一丁目四十三番地

印刷所 **臺灣出版印刷株式會社第一工場**

不許
複製

昭和十八年九月二十八日印刷
昭和十八年九月三十日發行

製本控

何第號

145	兩	9961	號	年	月	日
名	著	者	受	備	考	備
南洋中綴下						
日	月	年	日	月	年	日
日	月	年	日	月	年	日

地 外 事 部

番地

柳 株 式 會 社

木 秀 巳

番地

一 工 場

終

